



●記録全集 5

機動戦士
ガンダム
UNDAM

本書の制作スタッフ

●編集制作	朝銀英社
●編集	浜松克樹

●フィルム編集	蛭田 徹
●取材・記事執筆	小牧雅伸
●レイアウト	山下幸雄
●写真撮影	飯野 恵

●執筆・編集協力	富野喜幸 安彦良和 浜津 守
----------	----------------------

●取材協力	中田正友 齊藤 泉 丹波良治 中村彰弘 飯塚正夫 伊藤秀明 雙木信子 布川由起子
-------	---

●写植・版下制作	萩原 敬
●製版担当	矢板 担 高味寿雄

●製作コーディネイト	平田昭吾
------------	------

●印刷・製本	小宮山印刷
--------	-------

Title : GUNDAM

Author : NIPPON SUNRISE CO.,LTD.

Copyright : ©1980 by NIPPON SUNRISE CO.,LTD.
SOTSU AGENCY CO.,LTD.

printed in Japan

●ビジュアルストーリー編

1 37 ・ 38 ・ 39 ・ 40 ・ 41 ・ 42 ・ 43



VISUAL STORY

MOBILE SUIT GUNDAM

機動戦士ガンダム記録全集 5

目次

★ビジュアルストーリー編

- 第37話 テキサスの攻防
- 第38話 再会シヤアとセイラ
- 第39話 ニュータイプ・シヤリアブル
- 第40話 エルメスのララア
- 第41話 光る宇宙
- 第42話 宇宙要塞ア・バオア・クー
- 第43話 脱出

★イラスト編

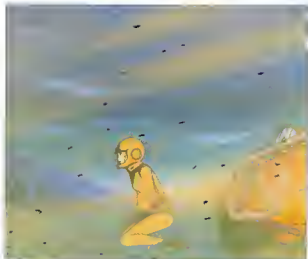
- 休息——安彦良和
- モビルスーツ——大河原邦男
- キャラクターシート

35 34
118 79 78

94 80 63 50 36 22 8



第37話



第38話



第39話



第40話



★ガンダム名場面・迷場面

★PRESENT・FROM・FAN

★設定・資料編

●人物設定

●美術設定

●メカニック設定

●スタッフ・キャストリスト

●声優コメント

●スタッフコメント

●初公開・富野メモ

●ガンダムアラカルト

●スタッフ座談会

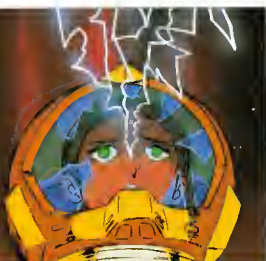
●スポットライト・うらかたさん

●打ち上げパーティ企画書

★スペシャルピンナップ By 安彦良和

●安彦良和 1 スタイラス

230 227 224 215 208 199 185 181 170 168 152 138 132 126 120



第41話



第42話



第43話



37話 テキサスの攻防

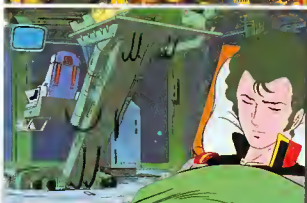
「ギレンは高官連の前で叫んだ。ア・バ・オア・クーを最終防衛線として連邦を討つ」



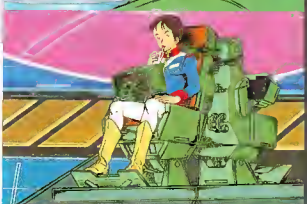
ギレンに対してうなづくデギン

ピクンと体をふるわせるギレン

「第二戦闘ライン内、異常なし。敵艦……なし。機雷なしと……」



「結構」とですよ……あと30分で交替ですからね」



「フラウ・ボウも、いろんな事やらされて大変だね」

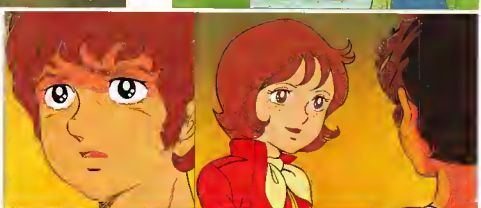


「アムロが来ました」「血圧測つていってくれ」



「あたしなんかには届かなくなっちゃったのね。でもいいのよ、弱

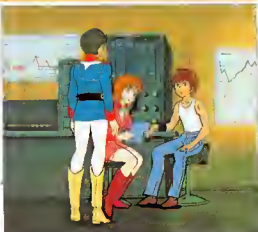
第37話 テキサスの攻防
ソロモンの攻略戦は連邦軍の大勝利に終わった。ホワイト・ベースは次の任務に就くべく航行していた。それは乗員にとっては貴重な休息の期間であり、自分を取り戻す時間でもあった。アムロとフラウにもそれはいえた。
「アムロってこわいくらい、たくましくなったのね」
「え？」
「あたしなんかには届かなくなっちゃったのね。でもいいのよ、弱



アムロ、話につまる

「アムロってこわいくらい、たくましくなったのね」

「ハヤトの具合はどうですか？」
「順調だよ、運動をやったおかげだな」



「いろんな事があったんだ」

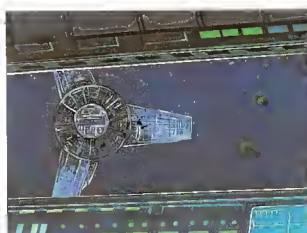


「でも……サイド6でなにがあったの？」



テキサスコロニー

「まいったな、テキサスの暗礁空域
「あ……ノ 起こしてすみません」

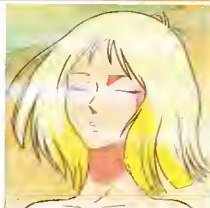


「まだテキサスに潜いておらんのか、エルメスとビットは……」
「無人コロニーみたいなものか？」



「ザンジバルはテキサスに入港する」

虫のアムロなんてみたくなし、みんなこうして大人になっていくでしょ？」
休息はつかの間だった。ホワイ・ト・ベースはテキサスの暗礁空域に入ったのだ。
レジャーと牧畜業専門に作られたこのコロニーは「テキサス」と名付られ、軍事的には何の重要性も持たぬために、とり残されている。それを囲む様に岩とコロニーの残骸が浮かぶ。
近くにはチベがあり、一方、秘密裏にシャアのザンジバルもやって来ていた。

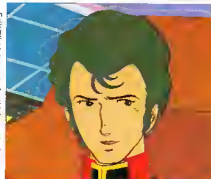


「命びろいのあとのお風呂だったのにな」



「チベが動きます。見つかったらしいです」
「よし、総員起こしだ」

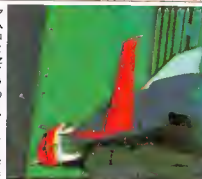
「無理はするな、俺でよかったら聞き役ぐらいはさせてくれ」



「助かるわ、そういつてくれると……」



アムロとセイラのGアーマーが発進する
「ミライ、いいのか？」
「心配かけてごめんさい、少し働いて渡れたのね」



「参員、ソロモンのあととはいえ、気をめくなよ」



「フフフフ……予定通りだな。木鳥をキヤツチ出来たか」



チベが動き、ホワイト・ベース乗員に第三戦闘配置が指示された。入浴中のセイラもたちちに用意して、Gアーマーで発進した。チベにいるマ・クベはモビルスーツの用意を部下にさせていた。自ら出撃しようというのだ。
「しかし、マ・クベ大佐自らお出になる事はないと……」
ウラガンに答えるマ・クベ。
「あるのだな。……ギャンは私用に開発していただいたモビルスーツだ。キシリア少将へ男としての面子がある。それに、シヤアには例のモビルスーツが属していない

「しかし、マ・クベ大佐自らお出になる事はないと……」
「あるのだな」



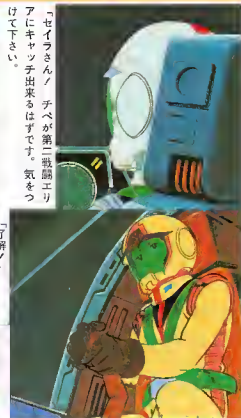
37話 テキサスの攻防

「ガンダムが現われたらテキサスへ誘いこめ。このギャンにはその方がやりやすい」



「セイラさん、チベが第二戦闘エリアにキャッチ出来るはずですよ。気を付けて下さい」

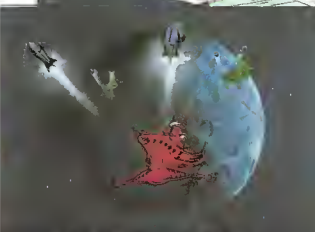
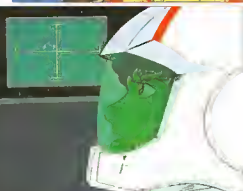
「了解！」



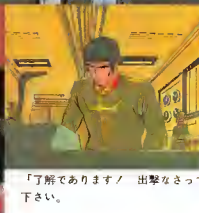
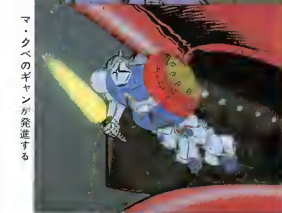
「Gアーマーをわらっているのか？」

「マーカ、どうなんだ！
敵の動きは！」
「ますます岩が多くて……」

「来たな！ セイラさん！ チベです！ そろそろ見えますよ！」



チベ、ムサイよりミサイルが連射される

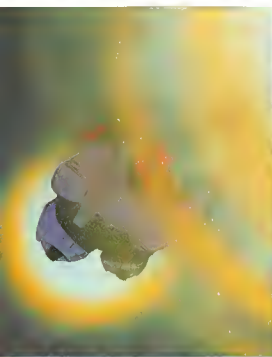


「了解であります！ 出撃なさせていただきます」

という話だ。きやつの前で木馬とガンダムをしとめてみせるよ」
マ・クベの艦はホワイト・ペリスを発見した。マ・クベはドムの乗員にガンダムをテキサスへ誘い込むよう指示した。
攻撃準備をしているブライトも、Gアーマーのセイラもガンダムのアムロも敵の目的は知らない。
チベ、ムサイよりミサイルが連射されて戦いは始まった。
対ホワイト・ベリス戦をウラガンに任せ、ギャンに搭乗しているマ・クベ。チベからギャンと2機のリック・ドムが発進した。

「ウラガン！ 木馬の足をとめるのは任せたぞ！」

マ・クベのギャンが発進する



「見えてノ アムロ、モビルスーツ、4、5機かしら？」
「ミノフスキ―粒子と岩のおかげで、判別つきませんね」



ビームを撃つGアーマー

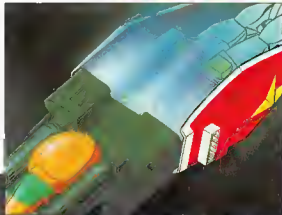
「私は仕掛けを作るノ ガンダムを倒せば二階級特進ものだということをおぼるなよ」



ガンダムのビームが3発のバズーカ弾に命中する



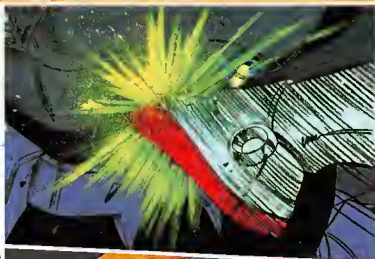
ポルト・アウトするガンダム



戦いをドムに任せてマ・クベは対ガンダム用の仕掛けを作るために隊を離れた。
Gアーマーのセイラとアムロはドムの編隊と戦闘を開始した。ビームが行きかい、ガンダムはポルト・アウトした。ビームライフルで応戦するガンダム。戦いのさなかにあつてアムロもセイラも息を抜くひまはなかった。
ガンダムもGファイターもテキサスへ流されてゆく。ホワイト・ベースでこの様子を見たフライトは第一戦闘配置を指示し、カインに発進準備を命じた。



ガンダムがドムにめりこむ



「うわーッッッ」



「ドムッ」



「ドムッ」



上にあがるドムに、ガンダムのビームが命中しドムが爆発した



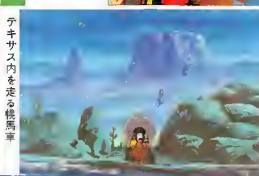
「サンマロ軍曹 また戦いが始まってんですか？」
「ハヤトは体を直すことだけを考えたんだ。それも任務だぞ」



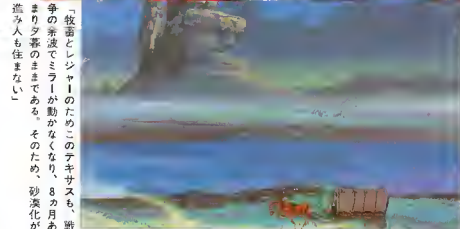
「ガンダム、Gファイター、テキサスへ流されているようです」
「カイノ 発進スタンバイノ 各員ノ 策一戦闘配置ノ」



「順調です」

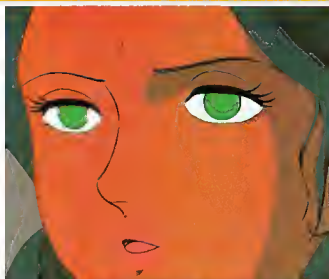


テキサス内を走る戦馬車



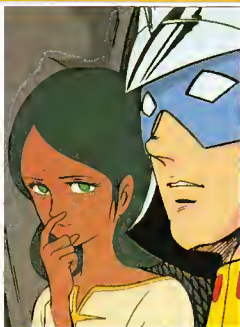
「牧畜とレジャーのためこのテキサスも、戦争の余波でミラーが動かなくなり、8カ月あまり大雪のままである。そのため、砂漠化が進みも住まない」

病床のハヤトは戦いの開始を知り、あせりが生じていた。早く出撃したいという思うのだがサンマロにたしなめられたのである。
「恰好よくいかんものですね」
「病人の恰好っていうのだったてるのさ。手間をかけさせるなよ」
一方、テキサス内部にはシャア、ラファ、フラナガン博士がいた。フラナガンはシャアにラファのテスト報告をしていた。
「順調です。ラファはテスト、ターゲットを70%の確率であてました」
そこは無人の砂漠だった。



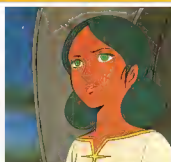
「なんだったのだろう……今の……あのしびれるような感覚は……」

「うふ、大佐が私の心をさわった感じなんです。私が……ウラア……冗談はやめにしてくれないか？」

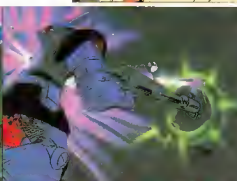


「なにがしら？ 来るわ」

「来る？ なにがだ？」



「ガンダムとGファイターはデキサスエリアに入りました。なにをたぐいんでいるのだ？ ジオンは？」



「手なれたパイロットたちだし、かし、バターンは嫌んだぞ」



「なに？」

針のようなミサイルが機手から来る



「最後の1機」

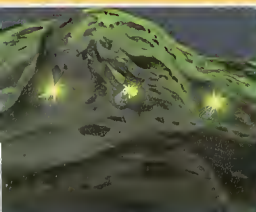


「こいつのどこへ痛いこむための作戦だったのか？」

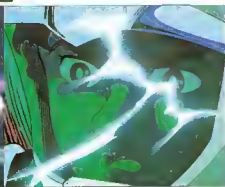


突然、ラアアが何かを感じた。フナガンは計器を見て言う。「テスト・ターゲットではありません。今までこんな脳波の強震を示しません」しびれる様な感覚はラアアに自分やシャアと同じ人がいるのかという疑問を生じさせた。だがその感覚はすぐに消え、疑問はそのまま残った。ガンダムとGファイターは戦ううちにデキサス・エリアに入った。ドムがあと一機になった時、横手から針状ミサイルがガンダムに飛来した。マ・クベのギャンが攻撃





「こいつ……ごめんと……思うノ」



キャンのいた岩が降参した。

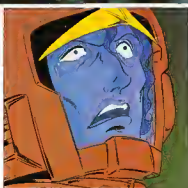
「こ、これが？」



「クフフフ……戦いをまともにやろうとするからこういう目に会ふのだよ。ガンダム」



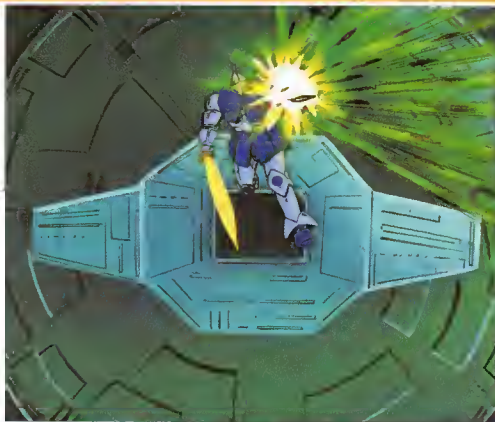
「ア!!」



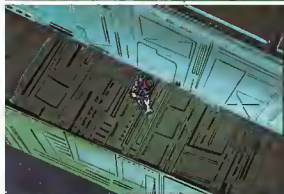
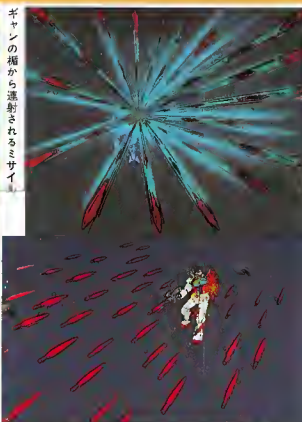
「さて……来てもらおうか？ ガンダム」



してきたのだ。
アムロは気付いた。ドムの攻撃はキャンの所へさそいこむための作戦だったのだ。手くすねひいて待ち構える相手と知りつつ、ガンダムはキャンに突っ込んでゆく。岩を飛びぬけようとするガンダム。その時、岩が爆発した。閃光に隠れてガンダムの姿が消えた。
マ・クベは喜び、笑った。
「クフフフ……戦いを、まともにやろうとするからこういう目に会ふのだよ。ガンダム」
だが、ガンダムは健在だった。岩かげからドームを放ったのだ。



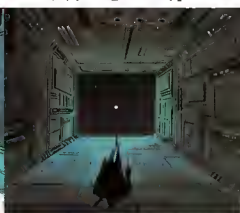
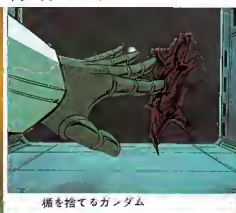
ギャンの楯から連射されるミサイ



「ここにはいないようだな……コロニーの中か？」

テキサス入口のガンダム

「テキサスに逃げるのか？」



楯を捨てるガンダム

「なにを見ているんだ?」「大佐を……いけませんか?」

「なにを見ているんだ?」「大佐を……いけませんか?」

「……ラアはすぐに私以上のパイロットになれる」

「私が?……赤い彗星以上に?」

「当たり前だ。そうでなければみなし児だったラアをフラナガン機関にあずけたりはしない……」

ミサイルを射ちつつテキサスへ逃げるギャン。それを追うガンダム。アムロは慎重にテキサス内にガンダムを進めた。

その頃シャアはゲルググの発進準備をしていた。ラアはもうすぐ乗ることになるエルメスが操縦できるかどうか心配していた。シャアは告げた。

「……ラアはすぐに私以上のパイロットになれる」

「私が?……赤い彗星以上に?」

「当たり前だ。そうでなければみなし児だったラアをフラナガン機関にあずけたりはしない……」

「……ラアはすぐに私以上のパイロットになれる」

「私が?……赤い彗星以上に?」

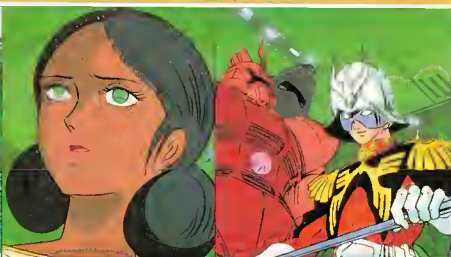
「当たり前だ。そうでなければみなし児だったラアをフラナガン機関にあずけたりはしない……」

エアブロックに張り付くガンダム

ノブをまわすガンダムの手



「ン」

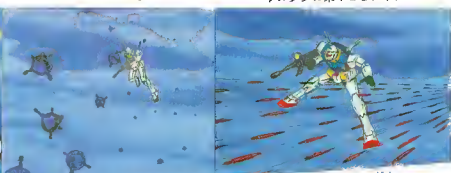


「あ！ また？」

ゲルググに乗りこむシャア



「さて、マ・クベのお手並を見せ
てもらおうか？」



ガンダムの方へ流れこむハイドポンプ

ミサイルをよけるガンダム

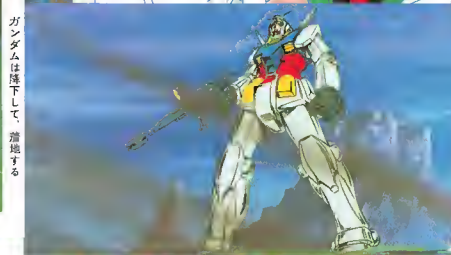


「こ、こんな小規模爆弾でええ？」

ガンダムは降下して、着地する



「わー！」



「ラアア、安全な場所からよく見て
おけよ。モビルスーツ同士の戦
いというものを。」



「大佐……」



シャアはゲルググに乗り込むと
ころである。ラアアは何かを感じ
し、とまどっていた。
ガンダムはすでにテキサス内部
にいた。キャンのミサイル攻撃に
手間どっている。ハイドポンプが
ガンダムにぶつかり、連鎖爆発を
した。爆発は大きい。アムロはあ
わててガンダムを上昇させた。雲
を突き抜け、上空から荒野に降下
し、ガンダムは着地した。
シャアの乗る赤いゲルググとラ
アの乗るバギーはザンジバルか
らコロニーの荒野へ発進した。
ホワイト・ベースは岩かけを利

岩かげから主砲を撃つホワイトベース



「3・2・1・0 / どうぞ」



「勘がいいのか? それとも、あの新しいタイプのやつなのか?」

「味方のモビルスーツか?」



「地雷原を作るなんて、一体、どういうやつなのだ!?
小手先ばかりのことをする」



「こっちも岩を爆にすんだ!
急げ!」

「やるなアー!」



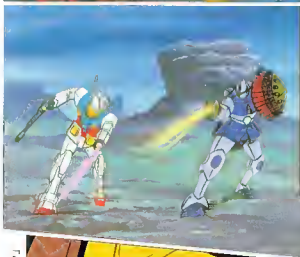
「シャア! ひけい!」



「シャア! ひけい!」
用してビームで交戦中である。一隻のムサイのブリッジを破壊したが、敵も岩かげに入りこんだ。アムロはマ・クベの地雷をたくさんにかわしていた。
「勘がいいのか? それとも、あの、新しいタイプの奴なのか?」
マ・クベが驚いた時、ゲルググが飛行してきた。たちまちゲルググとガンダムのビーム交戦が始まった。どちらも攻撃をかわしつつ応戦している。ゲルググは着地し、ビームをよけながら走る。その時、ゲルググの前にギャンが出て来た。
「シャア! ひけい!」



「今の貴様の任務は、ガンダムを倒すことではないはずだ」
「任せたよ。マ・クベ大佐、来るぞ」



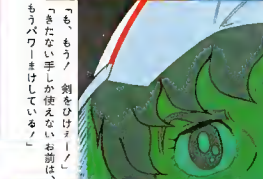
「フッ！ 今までのデータで確かめてある！ シアアとの小せり合いでビームを使い過ぎたのだよ」



ビームが出ない



「うわっ!」



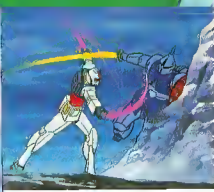
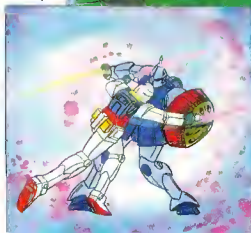
「大佐はなぜ助けてあげないのかしら？」

「も、もうノ 剣をひけゾーノ」
「またない手しが強えんいお前は、もうパワーまけているノ」



善戦するガンキャノン

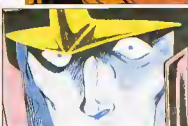
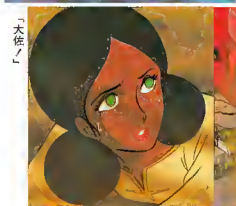
「今の貴様の任務は、ガンダムを倒すことではないはずだ」
マ・クベはシアアの操縦をきつぱりと断った。この戦いは彼にとり、己れが存在をかけたものなのである。シアアは身を引いた。再びマ・クベとアムロのモビルスーツによる戦いが始まった。ガンダムはシアアとの戦いでビームを使い果たしており、剣の戦いとなった。戦いは続いた。コロニーの外ではセイラとカイが敵に対し奮戦していた。
シアアは速くからマ・クベの戦いを見ていた。彼にとり、どちら



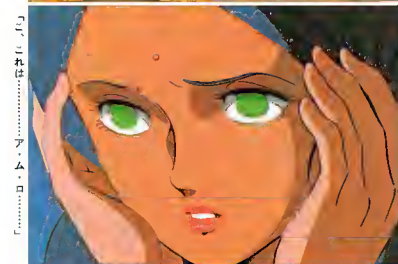


「それ見たことか！ つけやきばに
なにができるというか！」

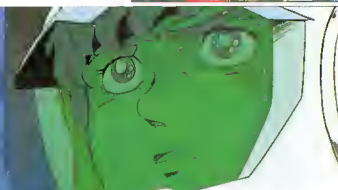
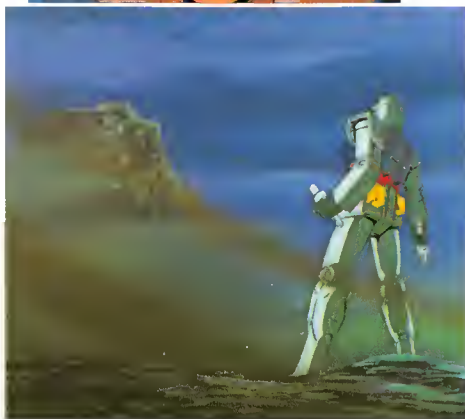
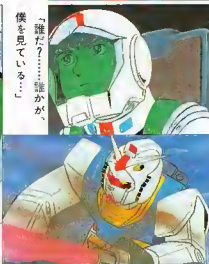
「もう、おやめなさい！
終ったのよ」



「ウラガン！ あの壺をキシリア様
に届けてくれよ、あれは……いいも
のだ…」

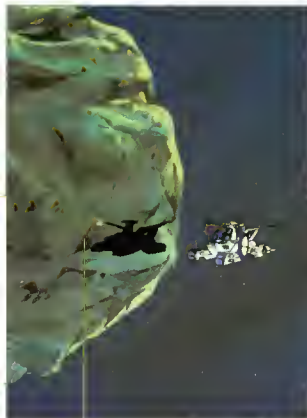


「……これは……シャアじゃな
い…」



が倒れても有難いのである。さら
に離れて様子を見ていたラアは
再び何かを感じていた。
マ・クベは形勢が不利になりつ
つあった。だが、シャアの台頭を
防ぐために、自分の手でガンダム
を倒さねばならないマ・クベは、
もう手が引けない。ついにギャン
はガンダムのサーベルに倒れた。
「ウラガン！ あの壺をキシリア
様に届けてくれよ、あれは……い
いものだ……」
マ・クベはギャンと共に爆死し、
アムロとラアは先ほどの精
神の感応の相手を互いに知った。

38話 再会、シャアとセイラ



ギヤンの爆発でテキサスコロニーの外壁が吹き飛び

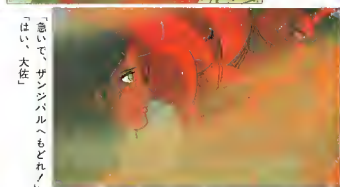


「今、ホワイトベースとマ・クベ艦隊は、テキサスゾーンの漂流物に身を隠し、互いの位置を確認出来ないまま待っていた」

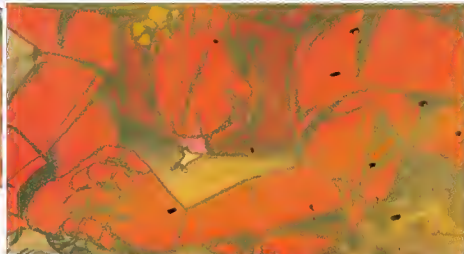


「誰だ……誰が、ぼくを見ているんだ?……」

立ちつくすガンダム



「悪い、大佐」
「悪いで、サンジバルへもどれ」



第38話 再会、シャアとセイラ

ホワイトベースとマ・クベ艦隊は、互いの位置を確認できないまま沈黙していた。

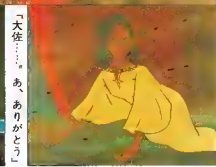
ゲルググでかがみ込むようにしてララアをかばったシャアは、ギヤンの爆風が収まるとララアにザンジバルへもどるように命ずる。

その上で単身、ガンダムに立ち向かうが、シャアの無事を信じてバギーを走らせていった。

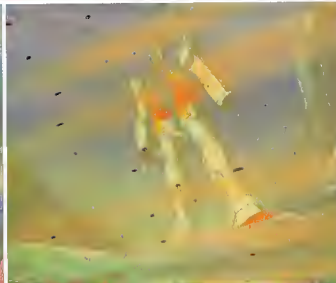
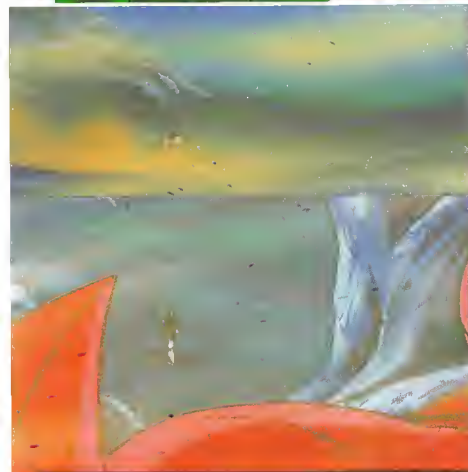
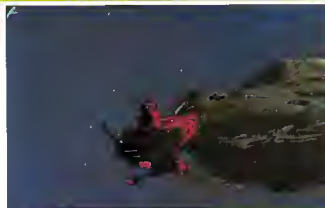
一方、現状では先に動きを見



「運がよかった、空気の流出が弱まってきたぞ、自動防御機構がまだ動いているらしい」

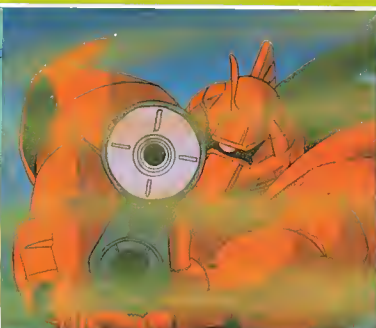
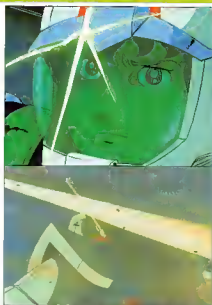


「大佐……あ、ありがとう」



一瞥とはいえ、ホワイトベースは決してあなどれる相手ではない。チベのブリッジでも戦法の論争が起こり、結局はバロム艦の到着を待つことになった。

アムロはシャアかも知れないと思いつつも、赤いモビルスーツを操っていた。その時、砂塵を走るバギーに、ララアの姿が見えた。ちょうどその時、シャアがガンダムを発見した。

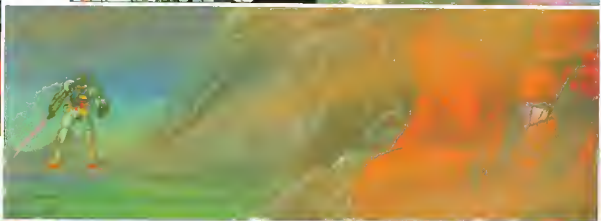


ギャンのビームをよけるガンダム

「ララアだ! ま、間違いない!」



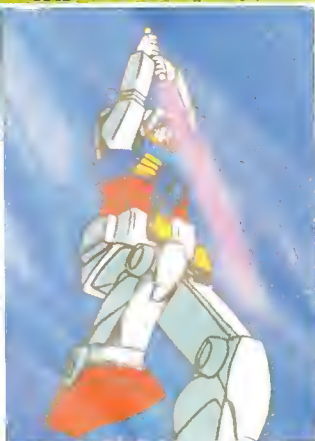
「やっかいなことになりそうだ。…
…ガンダムのパイロットも、ニュー
タイプだとはな……もう一度試して
みるか」



「シャアが、うしろから仕掛けたのか!? ……それとも、別の敵か?」
シャアはガンダムのパイロットもニュータイプだと気づく。この不確定要因は、戦局及びその予測の複雑化を意味していた……。シャアは確認のため再度攻撃を加えるが、正確なはずの彼のビームは

ララアに間違いない! アムロはバギーを追った。だが、その背後から嵐に乗じて接近してきたゲルグが、ガンダムにビームを放った。気配を感じたアムロは、さっとビームをよける。
「シャアが、うしろから仕掛けたのか!? ……それとも、別の敵か?」





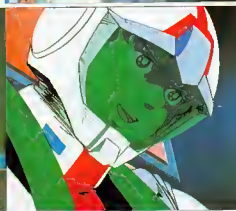
「間違いないと思うな……私の射撃は正確なはずだ。それをことごとく外すとは……」



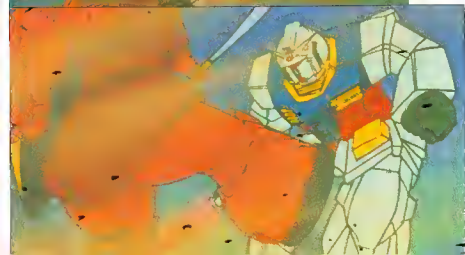
「うわ……くっくそーグ」



「なんだと!？」



「/ シャア、読めたよ」



すべて回避されてしまった。次々と襲ってくるビーム攻撃かわし、岩陰に身を隠したガンダムは、ゲルググに誘いをかけた。モニターにはなにも映ってはいないが、アムロはシャアの居所をつきとめたのである。

岩陰からジャンプしたガンダムは、ゲルググの頭上から一気にサーベルを振り降ろし、ゲルググの片腕を破壊した。シャアは負けじと残った片腕でサーベルを抜き、ガンダムに応戦する。ゲルググはすきを見て、ガンダムに足げりをくわした。



ガンダムをかすめるサーベル

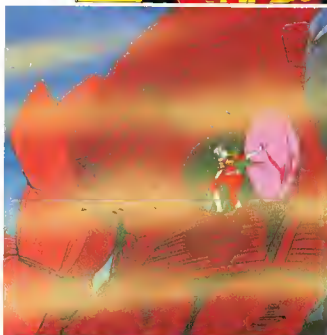
サーベルを振るうゲルググ



「フフ…そうか…パイロットがもし、ニュータイプなら、やつの反応にガンダムの機能がついていけないのだな」



「わあ…も、もう少し遅く反応してくれ！」

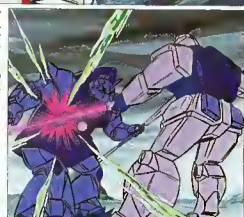


「大分やられたな。……ニセの爆発であのパイロットをだませたと思えんが……」

「な、ならし運転もしないで言う、こいういとか」



ゲルググの脇腹にめりこむガンダムのビームサーベル



「うう、大分消耗して……あ？」



倒れたガンダムに、容赦なくゲルググのサーベルが襲いかかる。ときどき、機体をサーベルがかすめた。アムロの反応に、ガンダムの動きがついてゆけないのである。あせるアムロ。が、しかし、シャアもいち早くそこに気づき、執拗な攻撃を加えた。

「ウ……シ、シャアノ！」

振り降されたサーベルを受け止めたガンダムは、逆にサーベルをゲルググの脇腹にめりこませた。ゲルググを使いこなせないことを悔やみながらも、シャアは撤退する。アムロは追おうとするが、

「や…やったのか!? で、でも…あのシャアが……!?」





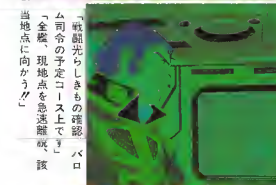
「バロム艦を貫くマゼランギビーム」



「本艦に接近する艦があります」「なに?」



「ホワイトベースとはまだ接触出来んのか!」「はっ、この付近はミノフスキー粒子の濃度が高いうえに、こう漂流物が多くては……」



「戦況光らしきの確認。バロム司令の予定コース上です」「全艦、現地点を急速離脱。該当地点に向かうが」



「Gファイター! 発進します」「Gファイター! 発進だ。ジョブ・ジョンガンキャノンもスタンバってけ!」



「敵艦隊、探知しました。未確認戦艦域に向かってます」「しびれを切らしたな。セイラ! Gファイター! 発進だ。ジョブ・ジョンガンキャノンもスタンバってけ!」



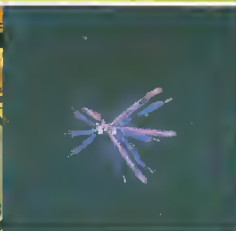
「後方より本艦が追って来ます」「あわてるな! 全砲攻撃しろ!」



「……た、たった1機で?」「つかまえたわ」

「……た、たった1機で?」
攻撃を仕掛けるのか?」
「つかまえたわ」
エネルギーが底をついていた。その間にシャアは、目くらましのニセ爆発を起こし消えていった。マゼランのブリッジではワッケインがホワイトベースを捜していたが、思うようにいかずあせっていた。そこへバロム艦が接近してきた。対艦砲撃戦が開始された。離れてこれを察知したデベ艦隊は、やむを得ず、該当地点へと発進する。だがこの瞬間を待っていたブライトは、すかさず対艦砲撃戦を命じた。セイラのGファイターがムサイとチベの間に割り込む。デラミンはその攻撃に驚愕した。

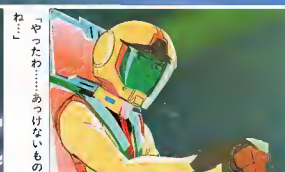
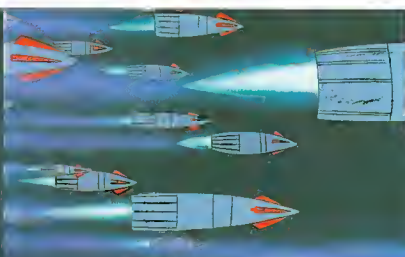
「大量にミサイル接近ッ」
「アンチミサイルはどうしたッ」
「ま…前に合いません」



ミサイルを撃つホワイトベース



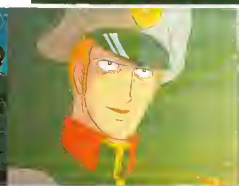
「メガ粒子砲 / 主砲 / ミサイル発射ッ」



と、同時にホワイトベースから大量のミサイルとビームが発射された。この速攻に体勢の整わないチベ艦隊は、アンチミサイルで、迎撃すらできず、被弾、爆発した。戦いはあつけないほど、ホワイトベースの一方的勝利であった。そこを離れた空域に位置するマゼランも、バロム艦への集中攻撃が成功し、勝利を取めた。マゼランと合流するや、ホワイトベースはアムロとガンダム収容のため、テキサスコロニーへ向かった。コロニーの外部にとどまったマゼランでは、ワッケインが、



「未確認戦闘域から」隻、こちらに向かっています」



「よし、180度転舵、ホワイトベースに接近する」

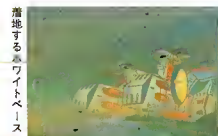


テキサスに入るホワイトベース



「ブライト君// まだ中には敵の生き残りがいるかも知れん。気をつけてな。私は、外で待つ」

テキサスコロニーへ向かうホワイトベースとマゼラン



着地するホワイトベース



「着地完了」
「よし// オムル、セイラ、ジョブ、探索に出てくれ」



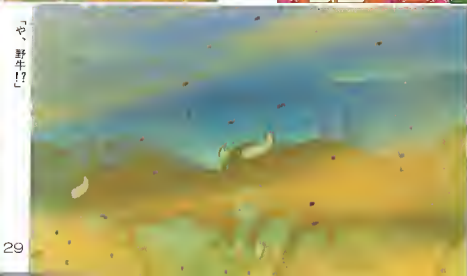
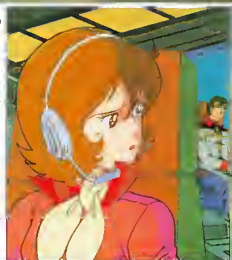
「………ホワイトベースか………たましくなつたものだ」



「マーカ-、爆発があつたのはどこだ」
「はい// CブロックのポイントN-5付近です」
「N-5に直行します」



「フラウ………疲れているなら、誰かに代えようか?」
「いいえ、だ……大丈夫です」



「や、野牛!」

たくましくなったホワイトベースの雄姿を、万感の想いをいだきながら見つめていた。ホワイトベースとは、ルナツー以来の再会なのである。

テキサス内部に入ったホワイトベースは、先ほどギャンが爆発した地点の近くに着地し、オムル、セイラ、ジョブがアムロ搜索に出た。まだ内部には敵の生き残りがいる可能性があるため、ホワイトベースでは第二戦闘配置が敷かれたが、無線担当のフラウ・ボウは、ボーっとしていた。戦いの連続でみんな疲れているのである。



「みんな疲れている……」

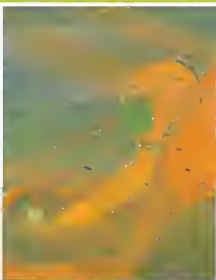


「了解した。フラウ、ハヤトの容態をみてきてくれないか？
ハヤト寂しがってるだろう」



「あつ、は……はい。こちらホワイトベース、どうぞ」
「未だガンダムは発見できません」

「こちら、ジョフ・ジョンノ
ホワイトベースノ」



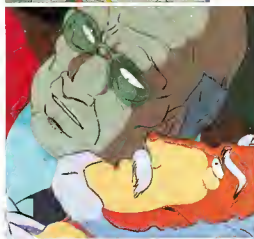
「軍を抜けるといったはず
だ……それが革命とはな」



「に、兄さん！」



「こちらセイラ、こちらセイ
ラ。ホワイトベースどうぞ」
「セイラか？」



「わ、わたしごときを次期首相にと？」

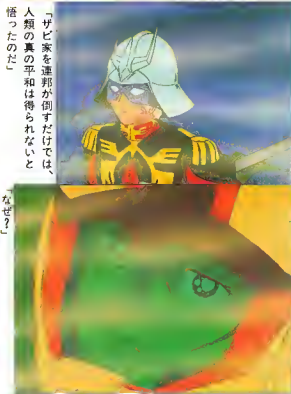


「あ、相手は……た、誰なのだ？ こ、声が……」

フラウを休ませ、自らレシーバ
ーをつけたブライトのもとにセイ
ラから無線が入った。会話の途中、
セイラは突然息をのみ、しばしの
沈黙が流れた。バギーにとび乗っ
たシャアと向かい合ったのだ。
生き別れになっていた兄妹の三
度目の再会である。ザビ家への復
讐のためにジオン軍に入ったこと
を非難するセイラに、シャアは自
己の目的と手段の変化の理由を説
明した。ニュータイプ発生のよ
り、ザビ家を連邦が倒すだけでは、
人類の真の平和は得られないとい
うのである。



シンバ・ラルの回想



老いたジンバ・ラル夫妻と幼いシャアとセイラ



「お、悪い直して下さいノ 兄さん」

「アルテイシアは、あの木馬から降りるのだ」「木馬?! ああ、あのホワイドベース?」



「アルテイシア……その素顔をもう一度見せてくれないか?」



「アムロがニュータイプだから?」



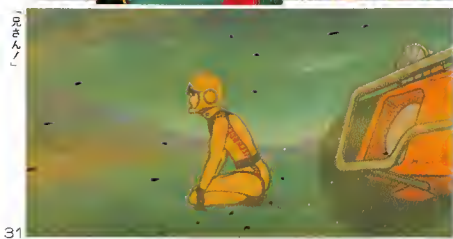
「ニュータイプ?!」



「ブライトノ、どうしたの?」「ムロが?」「いいや。な、なんでもないさ、雑音がひどくてな……」



「兄さんノ キャスバル兄さんノ!」

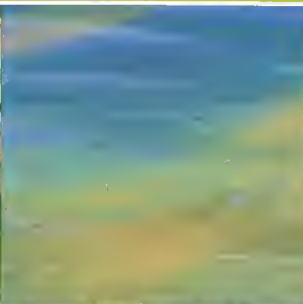
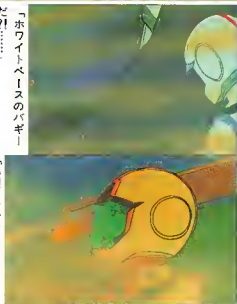


「兄さんノ」

「アムロがニュータイプだから?」
絶望的ながらも、セイラは兄を説得しようとした。
「ジンバ・ラルは、ニュータイプは人類全体が変わるべき理想の型だと教えてくれたわ。だったらニュータイプを敵にする必要はないはずよ!……」
だが、セイラの必死の言葉もシャアには通じなかった。反対に、セイラの素顔を記憶にやきつけ、木馬を降りよと告げると、シャアは去っていった。兄を呼び、跪くセイラ。このやり取りを、ブライトは、すべて聞いていた。

「ホワイトベースのバギーだ?!……」

「あ?! ア、アムロ!」



「だめだ……みんな焼き切られている。こいつも、あれ……?? あれは……」

「敵は一隻だノ、よくねえッノ、すぐにホワイトベースも応戦に果てくれるノ、それまで待たせる」



「マゼランタイプ一隻だノ、一気に突破するぞ!」



「テキサスの反対側の港からザンジバルタイプの戦艦が出港すると!」



「ラアのおかげでゲルググも回収出来た、すまん」



「ホワイトベースを通じて、ガンダムとジヨブ、オムルを収容する」



「よしノ、ミライノ、発進だノ、ザンジバルの使った港から出て、追撃戦にうつろ!」



ホワイトベースに収容されるガンダム

アムロはセイラのバギーを見つけた。ホワイトベースは直接、ガンダムと各バギーを収容することにした。テキサスの反対側の港から、ザンジバルが出港しつつあると連絡を受け、急いでいるのだ。コロニーの外で、ザンジバルとマゼランの激しい戦いが開始された。シャアを相手にして勝つ見込みはなかったが、ワッケインはホワイトベースの応援をあてにして、砲撃戦の指揮をとるのだった。ホワイトベースはザンジバルの跡を追って出港しようとするが、発振物体をキャッチして手間どつ



「ブライトノ 爆発物じゃあないらしいぜ
ノ たたのゴミだノ コミノ」



「えーい、この緊急の時にカ オムルに調
べさせろノ」



「第3シャッター付近に発爆物をキャッ
チしました」



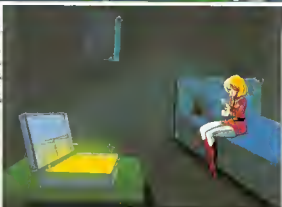
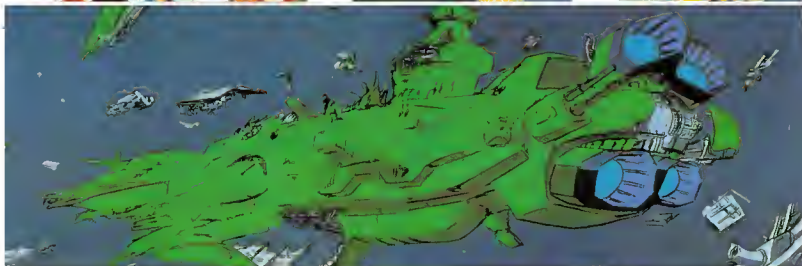
「お、おそかったのか」



「チーノ シ、シャアの野郎
」



「う……ノ ワ、ワッケイン
司令ノ」



シャアの手紙を読むセイラ



「?!……バ、バカな。
……ぞ、そんな馬鹿なッ!」

「シャア・アズナブル。…赤い替
星です」



「救えてもらえんか? トラ
ンクの中味と差し出し人のこ
とを……」



ベッドに伏して泣くセイラ

ていた。それはセイラあてのトラ
ンクだった。ようやく戦場空域に
たどりついたホワイトベースを待
っていたのは、マゼランの悲惨な
残骸であった。ブライトたちは、
ただ、無念の思いに打ちひしがれ
るばかりであった。
自室に呼んだセイラにブライト
は、トランクの中味と差出人を尋
ねた。セイラはそれがシャアより
送られた金塊であると答えた。自
分の部屋に戻ったセイラは、兄か
らの手紙を読んで泣きくずれる。
戦争は、仲の良かった兄妹を引
き離し、苛酷な運命を与えた。

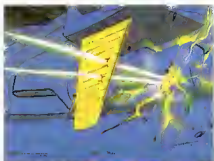




39話 ニュータイプ、シャリア・ブル

マゼランに閃光がノ

爆発するG.M.



ソロモンに集結する連邦軍艦隊

「ラ、ラ、だ」

驚愕するレビル



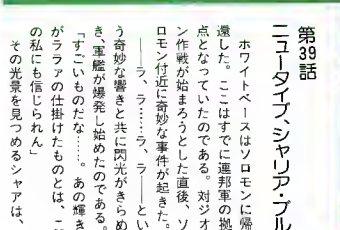
ソロモン周辺に次々爆発が起きる



「すごいものだ、あの輝きからアラの仕掛けたものとは」



シャアのゲルググとララのエルメス



第39話 ニュータイプ、シャリア・ブル

ホワイトベースはソロモンに帰還した。ここはすでに連邦軍の拠点となっていたのである。対ジオン作戦が始まろうとした直後、ソロモン付近に奇妙な事件が起きた。

「ラ、ラ……ラ、ラ」という奇妙な響きと共に閃光がきらめき、軍艦が爆発し始めたのである。

「すごいものだ……あの輝きがアラアの仕掛けたものとは、この私にも信じられん」

その光景を見つめるシャアは、



コクピットのララア



爆発するサラミス

「なんだ？ 爆発だぞ？」



「第一戦艦配置とらせろ」



「度？ そりゃ殺気みたいなものは感じるが」

「なにかしら……なにかが呼んでいるような気がする……」



「セイラ 雲を信じちやあい
るが、戦いに私情はもちこむ
なま」



「フライットさん……私の今までの行動は、ウソではなくて
よ」



「ほ、僕のノーマルスーツ、持って来てくれないか？」



「あノ キッカノ」



「なにかあったの？ フライット？」
「なにか、セイラ……一人で悩むことをか
ええているようだね」

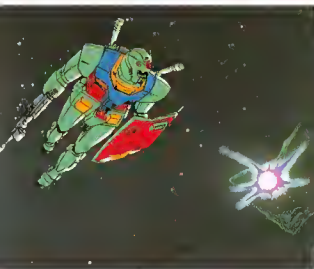
ニュータイプのひらめきと、エルメスの戦力に息をのんだ。さらに閃光と爆発は続く。ホワイトベースからもその爆発は目撃された。ミライはそこに、なにかひかれるものを感じたのだ。ホワイトベースは第一戦艦配置をとり、ガンダム他各機に発進命令が下された。病床のハヤトも無理をして参加した。通信でクギをさすブライトにセイラは反論した。指揮官としての確認であり、君を信じていると答えるブライトだが、言葉上とはいえ、これはチームワークにおける不協和音といえた。



「ガンキャノン いくぜーノ」



「行きまアーすノ」



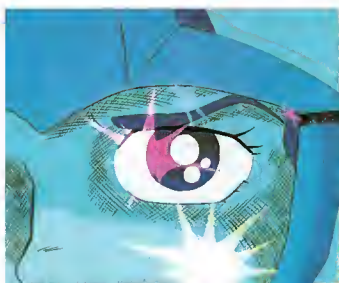
「またか?」

「ラッ
ラッ」
「あれ?」

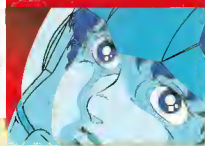
マゼランのブリッジにつ
きさる光



「もとジオンの女。シャアの妹。信じられなくなるの
か当り前よね」



「あ、か、呼んでいるような………気がする
なんだ? なにかが見えるようだ? なんだ?」

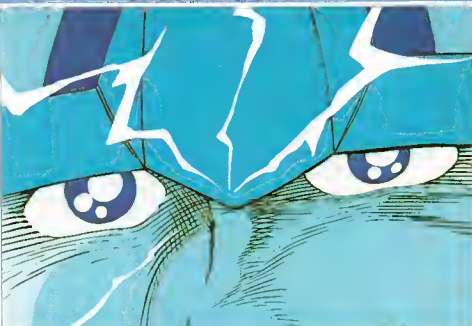


「呼んでいる?」

ガンダム他、各機は発進した。
そしてセイラム、ラ、ラ……とい
う響きを感じていた。それはアム
ロも同じだった。
「なにか、呼んでいるような……
気がする。なんだ? なにかが見
えるようだ。なんだ?」
光のイメージの中、アムロの体
が浮いた。光の奔流がせまり、そ
の中心にラアの姿が揺がれるのを
アムロは見ると、光の流れはさらに
続き、アムロはなにかを感じとつ
た。
シャアはラアの疲れた様子を
見て、作戦を終了させ、ゲルググ



アムロの体が浮くノ



「私に見えるのた？」



ララのイメージがアムロの頭に……

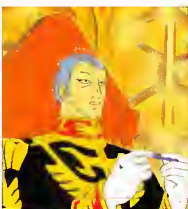


ソロモンを去るエルメスとゲルグ

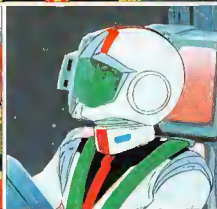
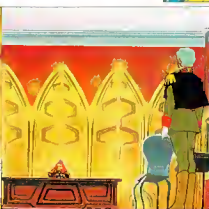
「ゾア 疲れたか？」
「……はい 大佐 でも大丈夫です。まだやれます」



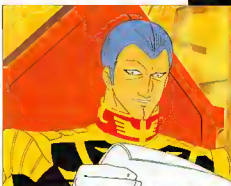
「いや。今日はやめて（こら）」



シャリアブルを覬見するギレン



「き、聞こえなくなった……？ な、なにが……聞こえていたんだ……？」



「木星のエネルギー船団を務めた君の才能のデータはそろっている」



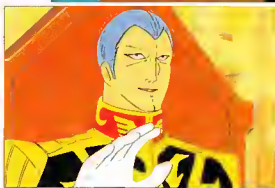
「お話しニュータイプの件ですが、私は、多少、人より勤がいいという程度で……」

とエルメスをソロモンから撤退させた。
アムロはとどまっていた。先ほどから感じていた。なにか。が聞こえなくなったのだ。アムロを呼んでいたように思えるなにかが……。
これに先立つ数時間前、ギレン・ザビ総帥は、木星帰りの男、シャリア・ブル大尉を覬見していた。
「……しかし、お話しニュータイプの件ですが、私は多少、人より勤がいいという程度で」
否定するシャリア・ブルに、ギレンは、フラナガン機関からの報告ファイルを示した。

「そう、君は自分でも気づかぬ才能を持っている」



「シャリア・ブルに関するニュータイプの実生形態？ 私に、その才能がある」と



「私がなぜ、君をキシリアのもとにやるかわかるか？」



「ホウ、言われ先からよくわかったな」



「キシリア殿のもとへ行けと？」



ブラウ・プロに乗るシムスとシャリア・ブル



グラナダに降下する空母ドロス



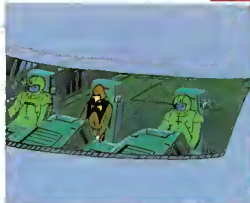
「この船で、シャリア・ブルという男も来ておるのだな」
「ハッ！ シムス中尉と共に、ブラウ・プロを使わせます」



沈痛な顔のシャリア・ブル



ファイルには、シャリア・ブルがニュータイプであることが示されていた。ギレンは、そのニュータイプの才能を戦争に役立てて欲しいといった。それは、キシリアのもとへ行くことを示していた。そこにはすでに、彼専用のモビルアーマーが準備されているのだ。「私がなぜ、君をキシリアのもとにやるかわかるか？」
ギレンは言外に、戦い以外のことも要求していた。沈痛な思いのまま、シャリア・ブルは退室した。空母ドロスで月のグラナダ基地に降下したシャリア・ブルは、彼



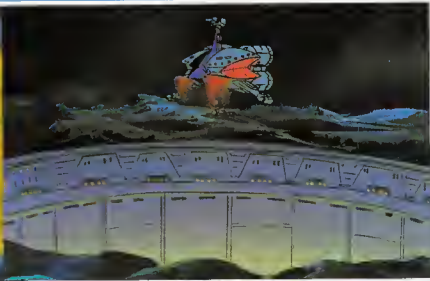
「了解です。シャリア・ブル大尉」



「シムス中尉 彩の方はいつでもいい
発達してくれ」



ノロモンへ向かうブラウ・プロ



上昇するブラウ・プロ

「シャリア・ブル」



「脳波を受信する電圧が多少逆流して、ラ
ラァを刺激するようです」

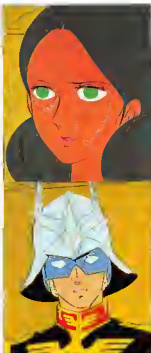


「わかったのか？ ララァが疲れすぎる原因が？」

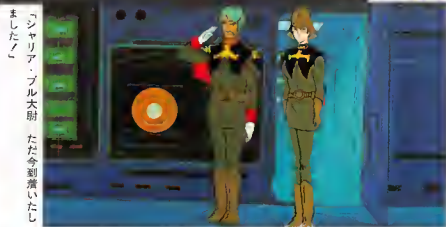


「シャリア・ブルという方、気
になります」

「そういうことは、ララァは気
にする必要がない」



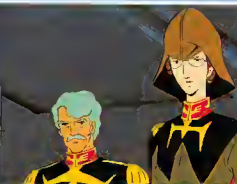
「大丈夫です、もうしばらくすれば美夢に出られます」



「シャリア・ブル大尉 ただ今到着いたし
ました」

用に開発されたブラウ・プロに搭
乗し、ただちにザンジバルへ向け
て発進した。キシリアはそんなシ
ヤリア・ブルに、今後の戦局への
想いをめぐらせた。
ザンジバルでは、ララァの疲労
を押さえるべく、エルメスの調整
を行なうフラナガン博士に、シャ
アが立ち会っていた。そこへラ
アも来た。シャリア・ブルの参加
による、シャアの立場を心配して
いたのだ。しかし、シャアは気
にやがて、ブラウ・プロでシャ
ア・ブルが到着した。

「補給部隊には言っているのだが、こんなソロソロした恰好で艦の中を歩きまわられて困っているのだ」



「フラナガン機関の秘蔵っ子といわれるラアア?」



「こころろ / シアアだ こちらがエルメスのパイロット、ラアア・スン少尉」



「いや……私は、大佐のような方が好きです。お心は、大きくお持ちいただけたと、ジオンのために素晴らしいことだと思われまふ」
「良い忠告として受けとておこう」



「で? 大尉! 私からなにを感じるのかね」

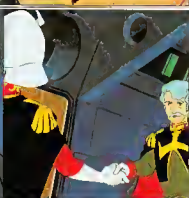
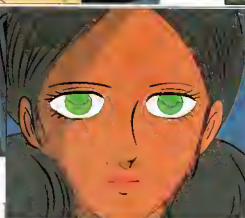


「大佐……この少女……え、いや、ラアア少尉からはなにかを感ずります。そう、力のよなもの……」



「やっかいなことは、ガンダムというモビルスーツのパイロットがニュータイプらしい」

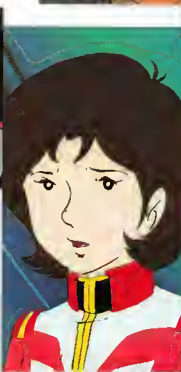
「あ、あり得ることで……」



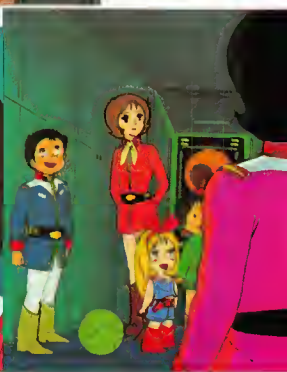
「よろしく頼む、大尉」



「ガンダムの操縦系が、ちよっとオーバーヒート気味なんです。それ……」



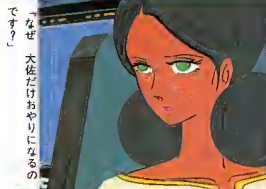
「なに、騒いでいるの?」



「ハヤト / 起きていいの?」
「すみません 御心配かけて」

「人類全体の平和のために、という意味にとっていいのだな?」
「うなずく」
「シャリア・ブルにシャアは、連邦がすでにニュータイプを実戦に投入していると告げた。ホワイトベースでは、すでに帰艦したアムロが、ガンダムの操縦系がオーバーヒート気味であると」

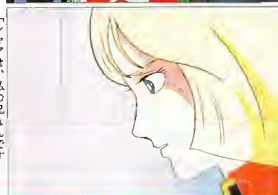
「シャリア・ブルとシャアが向かいあった。ニュータイプとして自覚し始めたシャリア・ブルは、シャアに、ある一つの道を示した。『もし、我々がニュータイプなら、ニュータイプ全体の平和のために素ずるのです』」



「なぜ、大佐だけおやりになるのです？」



「不審か？」



「シャアは、私の兄なんです」

「あなたの誤解を解いておきたいです……」
「僕の誤解？」



「セイラに呼ばれたブライト」



「わ、判った。以前と同じように君を援うだけだ」
「ありがとう、ブライトさん」



「セイラの選んだ道は辛いぞ」
「承知しているつもりよ」



「兄が私にくれた金ののべ板です。これを、ホワイトベースのみんなに分けて下さい」



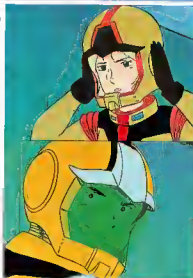
ソロモン付近のホワイトベース

仲間へ告げる。
そしてサンジバルでは、シャリア・ブルがブラウ・プロのテスト飛行に、単独で発進していった。一方、セイラはブライトを自室に呼んで、誤解を解くために、シャアが実は自分の兄であると告げた。セイラは事情を説明すると兄から送られた金塊をホワイトベースの仲間に分けて欲しいとブライトに頼む。ホワイトベースを降りたくもないし……仲間であり続ける以上、この方がスツキリするというのである。ブライトは、セイラの心情を理解した。



「でも、今日は後方で見学者よ、勦をとりもどすまではね」

「ハヤト 大丈夫なの?!」
「もう大丈夫です 休んだ分とりかえします」



「敵バトルロール艇らしきものキャッチ! ソロモンより迎撃機の発進要請です」 「なんでもかんでも、こっちにやらせるのか?」



「3機に見えるが? 違うなラアアじゃあない、別のなにかだ」



「ん? くるな……」



「なに?!」



地球光の中から飛び出すガンダム



「ジャリア・ブル大尉、敵をキャッチしました。戦闘はお任せします」
「私に、どこまで出来るか、データはとっておいて下さい」



「敵のパイロットは、こちらの位置と地球の一直線をよめるのか?」



ガンダムのビームをかわすブラウ
プロ

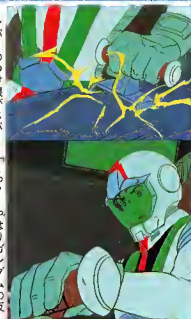
ブラウ・プロによる敵影をキャッチしたホワイトベースは、ソロモンの要請に従って、ガンダム以下各機を発進させた。

アムロは敵に意識を集中させると、これがラアアではなく、初めて出会う別のなにかと知った。

輝く地球光の中からガンダムが飛来するのにはジャリア・ブルは気づいた。こちらの位置と地球との直線を読んで飛行するのは非常に高度な技術である。ブラウ・プロは攻撃に移り、ガンダムに対して上や下からビームが襲いかかった。急速回避行動を続けながら応戦

イク

「くっ／＼やはりが
ガンダム」の反
応が鈍い／＼



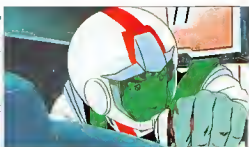
機をやられるガンダム



「下かアノ」



「うわーっ！ に、2機か3機のモビルアーマーがいるのか?!」



「さかれ／＼この敵はいつ
もモビルアーマーとは違
うぞ／＼さかれ／＼」

「すごいモビルスーツとパイロットだ。あのパイロ
ットこそ真のニュータイプに違いない。そうでなければ、
このブラウ・プロのオール・レンジ攻撃をよけられる
わけではない」



「カ、カイノ ど、どこから……?!」

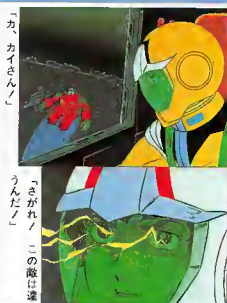


「うわ……／＼」

するガンダムであったが、アムロ
の操作に対する反応は相対的に遅
くなっており、射撃は命中せず、
そのうち機も破壊されてしまった。
シャリア・ブルはガンダムのパ
イロットをニュータイプと確信し
た。そうでなければブラウ・プロ
のオールレンジ攻撃をよけられる
わけがないのである。
そこへガンキャノン、ガンタン
ク、Gファイターが援護に来たが、
シャリア・ブルとの能力の差が大
きすぎ、対応できるわけがなかつ
た。敵の位置さえつかめぬまま、
ガンキャノンは脚を破壊された。



右へ向きを変えるガンダム

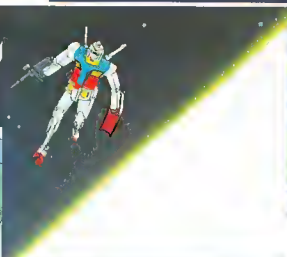


「カ、カイさん！」

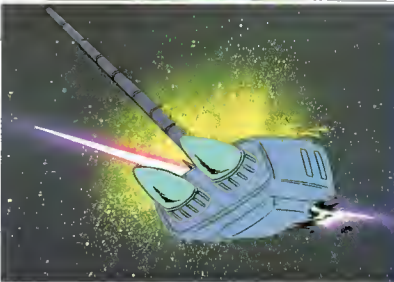
「さがれノ、この敵は遠うんだノ」

「どういふことだノ、一のはずだノ」

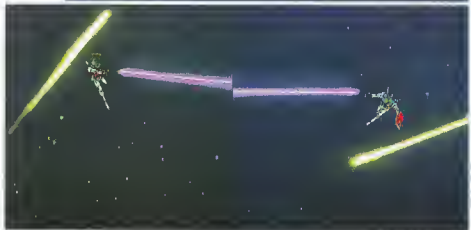
敵は、一機のモビルアーマー



「あのパイロットは、反対からの攻撃も読んだ?！」



ビーム砲を飛ばされたプロウ・プロ



ガンダムの反応はアムロにとつて遅すぎたが、その中であつてアムロは、適確に操作してゆく。
「あのパイロットは、反対からの攻撃も読んだ?！」

シャリア・ブルの驚きどおり、

前後左右から来るビームを、ガン

ダムは巧みにかわしていた。一機

のモビルアーマーとは思えない攻

撃にとまどいつつも、アムロはこ

の事態に対処していった。プラウ

・プロから伸びたワイヤーの先の

ビーム砲を射ち落としたのである。

だが、反対からきたビームをよけ

て、さらにガンダムで応戦させよ

う。

ガンダムは、一機を倒す。シャ

リア・ブルは、ガンダムに近づき

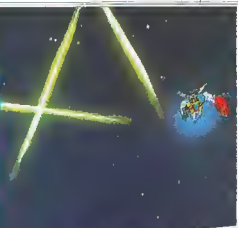
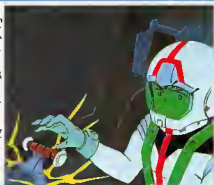
て、ガンダムを攻撃する。アムロ

は、ガンダムを助ける。ガンダム

「敵はーっ!」

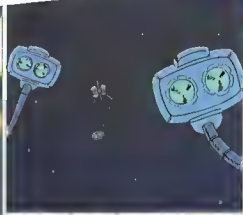


「オ、オーバーヒートだノ、うっ」



ビームの交又する中を飛ぶガンダム

「ん?! なんだ? 見つけたのか?」



ブラウ・プロのビーム砲



「シムス中尉、逃げろ」

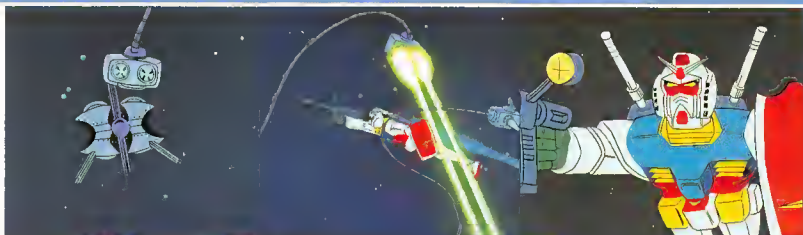


「え?」

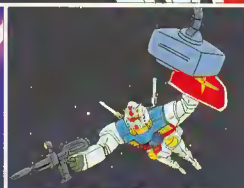


うとしたその時、アムロの持つレバーの下からスパークが生じた。ガンダムのオーバーヒートである。満足にガンダムが動かなくなつた以上、敵の本体をねらうしかない。アムロは目を閉じて意識を集中させ、ブラウ・プロの位置を読んだ。

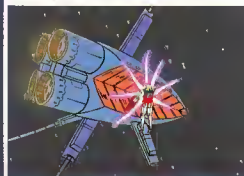
シャリア・ブルはガンダムの飛来をいち早く感知した。もはや逃げられない。ビームの交又する中、ガンダムがブラウ・プロに接近して来る。危機を知るシャリア・ブルは、ブラウ・プロの前にビーム砲を位置させ、迎撃体勢に入った。



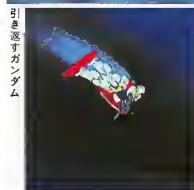
「やったか……？ し、しかし、ガンダムに、む、無理をさせすぎた」



播でビーム砲を上げるガンダム



「シャリア・ブルまで倒されたか……」
「今、すぐエルメスを出れば、ガンダムを倒せます」



引き返すガンダム



「ガンダムの操縦系が僕のスピードについてこれないんだ！ 今さっきのような敵がきたら、もうアウトだぞ……」

死角をついて突っ込み、ブラウ・プロの横にすべり込むや、ガンダムは敵の本体にビームを撃ち込んだ。ビームの直撃を受けてブラウ・プロは最期を上げた。かううじてガンダムは勝利したが、これが限界でもあった。ガンダムの操縦系がアムロのスピードについてこれない、今のような敵が再び現われた時の事を考えて、アムロは身の凍る思いをした。

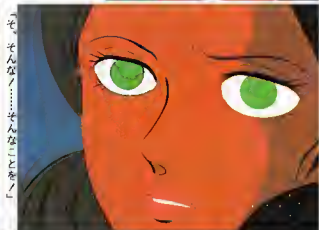
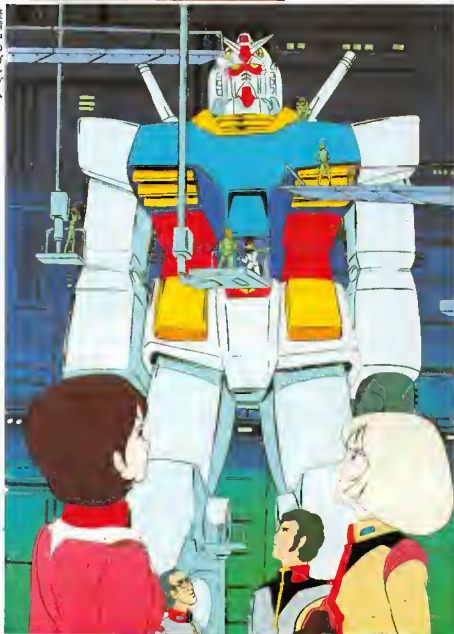
ザンバルではラアがこの戦いを見て、今が機会とばかり出撃しようとしたが、シャアはそれを引き止めた。連邦がガンダム以外



「あんなるな、ラアア……選判がニュータイプを戦に投入していると……ガンダム以外にも……」



整備中のガンダム



ソロモンの港



心配されていたガンダムの操縦系のひずみが現実のものとなった

にもニュータイプを実戦投入している可能性があり、危険は言えないというのだ。

シャアはラアアに、シャリア・フルはギレンとキシリアとの間にはさまれて、つらい立場であったとも告げた。

「ニュータイプは戦争が生み出す、人類の悲しい変種かも知れんのだ」二人はニュータイプの宿命を、ひしひしと感じていた。

一方、ホワイトベースでは深刻な事態に陥っていた。発達し始めたアムロの反射神経に、ガンダムがついてゆけなくなったのである。

40話 エルメスのララァ



「連邦軍に、手だてでもある
というのっ……」

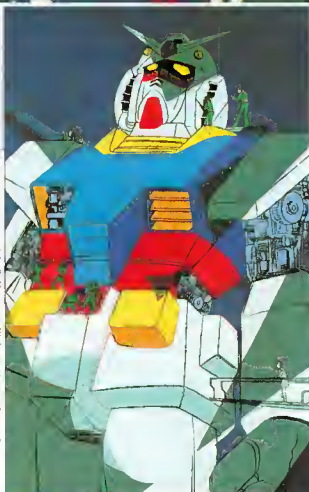
「アムロは違うんだ。かといって、
以前マチルダさんが言っていたよう
に、アムロがエスパーだなんて
話は信用せんよ」



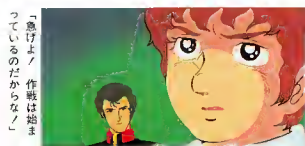
「でもさ、いいじゃない。アムロが強く
なってるんなら、ガンダム
だって強いんだろ？ パツカだな。
ガンダムがアムロについてい
けねえんじや戦えないじゃん」



ガンダムの動力系の整備が始められたが、それで解決のつく問題とはいえなかった。



ソロモンへ入港するホワイトベース



「急げよ！ 作戦は始ま
っているのだから！」



「ホワイトベースのメカマンはガンダムか
ら離れる！」



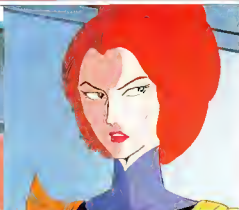
「なにをしようというのです」

「マグネットコイルに電気を
流して、ガンダムの駆動系を電磁
気で包んで動きを早くするのだと
さ」

「彼の理論を応用して、ガンダム
の動きを早くしようってんだ」

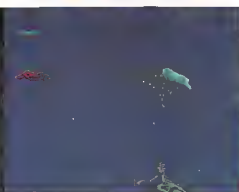
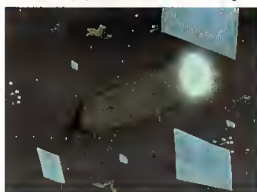
第40話 エルメスのララァ

ガンダムの動力系の整備が始め
られた。だが、アムロの操作に反
応しきれないレベルにまで到達さ
せるのは、容易なことではなかった。
「ひどく動かないというか……
先読みをするときがあるな？」
ブライトの問いに誰もがうなずく。
アムロは違う！ ホワイトベース
の乗員たちは、改めてアムロの並
はずれた才能を意識し始めた。
ソロモンに入港したホワイトベ
ースを待っていたのは、電磁工学



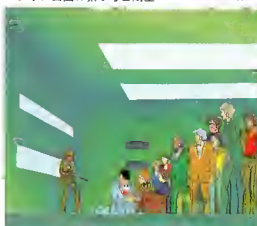
「これに、本国のソーラシステムを……」

「シャリア・ブルが敗れただと？」



ジオン公国の第3号密閉型コロニー・マハル

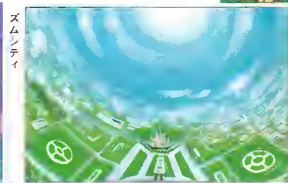
宇宙要塞ア・バオア・クー



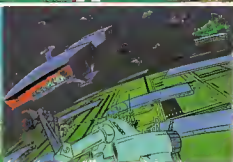
強制疎開させられる住民



コロニーを発進する小型艇



ズムシティ



ソーラシステムに改造されるマハル



「一般国民を疎開させるということは、軍人の無能を示すことだ」

の新鋭、モスク博士であった。
ガンダムは動きを早くするために、
駆動系を電磁気で包む新技術、マ
グネットコーティングを施すとい
うのである。
その頃、ジオン公国の第3号密
閉型コロニー・マハルでは、住民
の強制疎開が進められていた。月
面基地グラナダと宇宙要塞ア・バ
オア・クーを結ぶ線を最終防衛線
として、これにソーラシステムを
投入しようというのである。疎開
の理由の公表はされていないが、
本土決戦のためであることは、
誰の目にも明らかだった。

「貴公、知っておるか
アドルフ・ヒットラー
を？」



「地球連邦軍は、3つのコースか
ら侵攻することが考えられます」
「で……侵攻する連邦軍艦隊を
討つ」



「その前に、ソーラシステム
で……」



「ま、勝ってみせます ヒットラーの尻尾の
戦いぶり、ご覧下さい。
私は、ア バオア ク で指揮を取ります」

「サインをいただかなければ、この計画は実行できま
せん」
「やっておって、今さら」

グ
ニ
ナ
ダ
を
発
進
し
た
ザ
ン
ジ
バ
ル



「……ヒットラーは敗北したのだぞ……」



「やってみます。大佐」



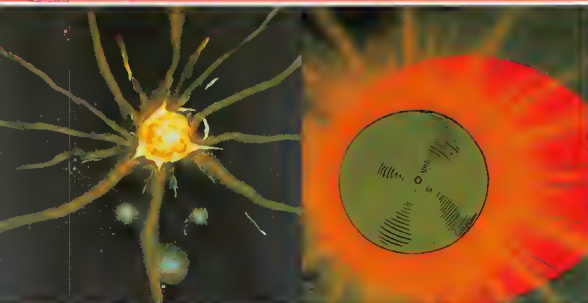
「無論だ！ ララアを特別扱いするなよ！」



「シャア大佐！ エルメスも出しますか？」

ズムシティでは、デギン公王が
ギレンをたしなめていた。
「そこまでして、勝って、どうす
るのだ?! ギレン」
「せっかく滅った人口です。これ
以上ふやさずに優良な人種だけ
を残す。それ以外に人類の永遠の平
和は望めません。そして、そのた
めには、ザビ家独裁による人類の
コントロールしかありません」
ギレンの返答に、デギンはヒッ
トラーの影をみた。公王制は国民を
まとめる方便であって、独裁が目
的ではないのだ。デギンの心には、
むなしさが残るだけであった。



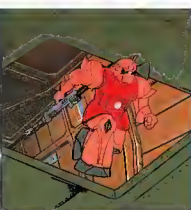


サラミス撃沈

「ダイブミサイル発射

「グラナダからの援軍はつ

「あと、5・6分でクワリブ



「左のサラミスを！」

ゲルググ発進

「上出来だ！ 私はゲルググで出る」

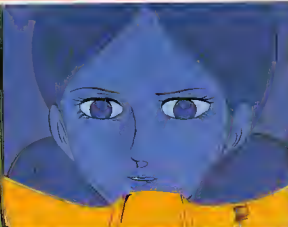


エルメスのビットに攻撃されるサラミス



一方、連邦の小艦隊を発見した
シャアのザンジバルは、先制攻撃
に移った。ドム二機とララアのエル
メスが出撃した。ララアにとつ
ては初めての实战である。ザンジ
バルをマリガンに任せ、やや遅れ
てシャアのゲルググも、ミサイル
の飛びかう中を発進した。ララア
の操作するビットから放たれたビ
ームが、サラミスのエンジン部を
直撃した。サラミスの爆発に安堵
するララア。だが、バタシャムら
はその戦力に驚異を感じ、混乱す
る戦場にエルメスを残して、援護
を放棄、後退してしまった。

「つ、ら、ら、ら、ら……」
「ま、まただ！」



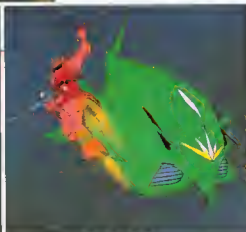
「大佐 / た、大佐がいれば……」



「ララア 援護するぞ！」



「次！」



「ララア、よくやった！」

「え、援護をして下さって……ありがとう……」

引きあげるゲルタグとエルメス



ビルから「星1号作戦」の命令を受けるフライト



続け、実戦の感じをつかもうとするララアのもとに、シャアのゲルタグが自ら援護に駆けつけた。
「大佐 / た、大佐がいれば！」
安堵したララアはたちまち集中力を取りもどし、ビームが正確に命中、サラミスが爆発していった。ため息をつくララアにシャアがいたわるように声をかけた。
「ララア、よくやった！」
その頃、地球連邦軍の最前線たるソロモンでは、次の作戦のための命令が下された。すなわち、ジオン進攻に向けての「星1号作戦」である。



ソロモンを発進するマゼラン



「君が生き残ったら、そういつてくれ」



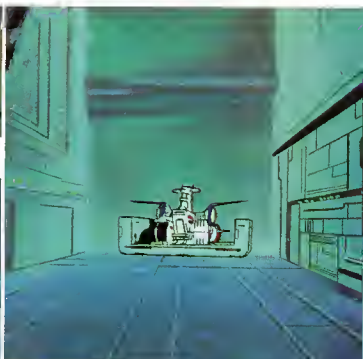
「理論的な自信だけはある。メカニク的な繊細は、すべて打ち消したはずだ」



「まったくだ。アムロ・レイ君。……君のガンダムに対するセンスに期待するよ」



「そうですね……博士は、僕らの救い主です」



「花を出たら最大戦速にうつる、先行する隊を追う」「了解」

ホワイトベース発進



「必ず、生き伸びてくれよ」「はい……データーを持ち帰るためにですね」



ソロモン周辺から、次々と連邦軍艦隊が発進して行く。だが、本来、もつとも先行すべき第13独立艦隊のホワイトベースの出港だけが遅れていた。

その要因であるガンダムの整備が終了した。モスク博士の説明によると、ガンダムのパワーを無視すれば、そのスピードは理論的には無限大に速くできるはずである。別れぎわに、モスクはアムロに、今後のガンダムの戦闘データの提出を要求した。アムロは苦笑してうなずく。アムロは戦闘のプロであり、モスクは技術のプロなのだ。

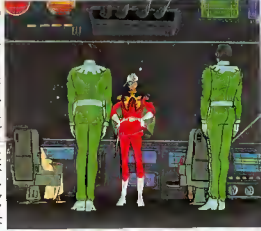




「その事実を知った時、我々は馬鹿しくなったのであります」



「ひょっとしたら、エルメスは、シヤア大佐のゲルググ以上でありましょう」



「ハッノ 大佐」



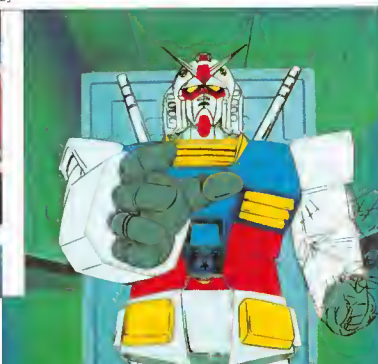
「中尉のおっしゃることはわかります」「そうしてくれ。中尉、いいな？」



「ララアに嫉妬しているのではないのか？」「なによりもニュータイプの実力に驚きました」



「なるほど、こりやすこいや。3倍以上のスピードがある」



ガンダムのテスト



「食事は、いまのうちにしておけノ。しばらくは戦時食しか食べられんことになる」

「ハッノ、この食い物が戦時食でないってんだからな」



「どう？ 調子は？」「良好ですけど、動きが速くなった分は、メカに負担がかかります。その辺のバランスのとおり方が、難しいですね」

月に向かうザンジバルの中では、先ほどザクで出撃した歴戦の勇士、バタシヤムがシヤアと話していた。「軍法会議も覚悟しておりますが、エルメスの出る時、後衛にまわることは認めて下さい」ララアの能力の前に、シヤアはその要求をのまざるを得なかった。ソロモンを出港し、艦隊との合流に急ぐホワイトベースでは、アムロがガンダムをテストしていた。3倍以上のスピードが可能になったが、その分、メカに負担がかかる。その辺のバランスのとおり方が難しいはずである……。

「大丈夫よ。その辺は自信をもって。アムロ」

「そうですか？」
「そうよ。アムロはニュータイプですもの」

「そう正面きっていわれると、いい気分のもじありませんね」

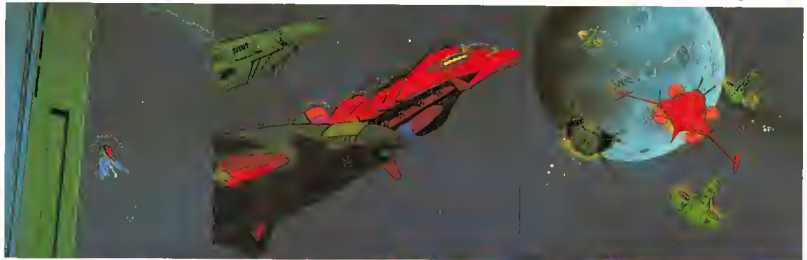


「ふむ……。見せて欲しいものだな
エルメスの働きを……」

「補給部隊の連中は、服で戦争をするのではな
かろうと、いつも……」



「気に入らん、その服は」



「モスク博士、たいしたものね。
「いや、アムロだよ。あれだけ使いこなせ
るというからは、ニュータイプ……存在
するのかも知れない」



「ブライトさん！ アムロ
が？」



セイラはアムロがニュータイプ
だと言う。
「タイプからいったら、古い人間
らしいけど」

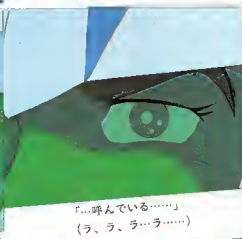
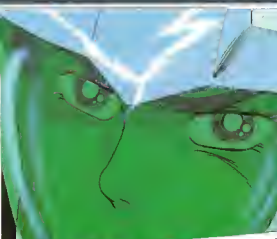
こう答えるアムロ。それだけ、
彼にはまだ余裕が残っていた。

サンジバルは大型戦艦グワジン
と合流し、シヤアはキシリアに、
ラアラが初陣でサラミス2隻を撃
沈したと報告した。満足するキシ
リアにシヤアは、ニュータイプ実
戦部隊の実現を示唆する。

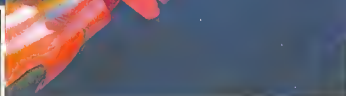
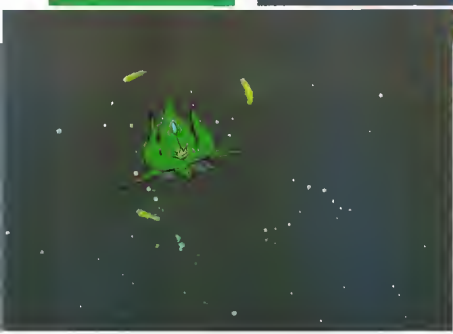
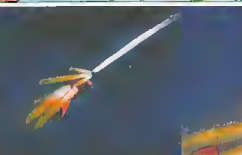
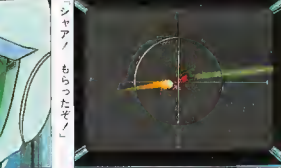
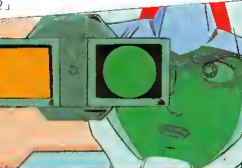
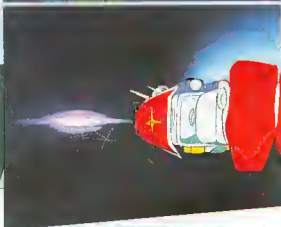
また、ホワイトベースでは、テ
スト飛行に発達したガンダムを見
て、ブライトがニュータイプの存



「対艦隊戦用意 / ガンダム以下急速発進 / 敵は大きいぞ /」



「...呼んでいる……」
(う、う、う……)」



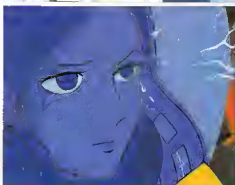
在を信じ始めていた。
その時、前方に閃光が走った。
艦隊との合流予定ポイントである。
それは、本隊が敵と接触したことを意味していた。ホワイトベースは艦隊戦準備を急ぎ、ガンダム以下各機が戦闘空域に急行した。が、アムロはまゆを曇らせた。なにかが呼んでいる感じなのだ。シャアの他にもう一つ、なにかがいる。それでもシャアを倒さねばならない。アムロはビームを撃つた。だが、シャアのゲルググにあたるかに見えたビームは、ラリアの操るビットに邪魔をされた。

「ガ、ガンダム!! き、きのうまでのガンダムと
まるで違うぞ!」



ドムを撃つガンダム

「大佐ノ、どいて下さい 邪魔で
す」



「あ!」



「うおー!」

マクネットコーティングのおかげで、今までとは比べものにならないほど、ガンダムの動きは速かった。それを見てシャアは驚く。
「ガ、ガンダム!! きんのうまでのガンダムとまるで違うぞ!」
ガンダムとゲルグクの戦いが始まった。アムロの反射神経に忠実に反応するガンダムは、ゲルグクの攻撃をことごとくかわしていく。
「大佐ノ、どいて下さい。邪魔です」
ララァは思わず叫んだ。このガンダムと戦うには全力を出さねば





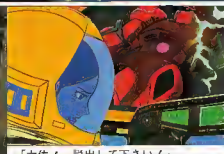
「うおーっ! ガンダム!」



「チーッ!」



「ラ、ラ、カッ!」



「エルメスにつかまらせてもらう! 攻撃は続ける!」

「大佐! 脱出して下さい!」

「大丈夫だ。この程度なら、ゲルググは爆発しない!」

「あう……! ああ……!」



「あ、頭が……おさえつけられるように……重いです!」

「……なんだと!?」

ならない。シャアが戦闘圏内にいることは、ラアラの精神集中の阻害要因にもなり得るのだ。ガンダムとエルメスの戦いは互角であった。そこへ援護のために介入したゲルググは、ガンダムのビームの直撃を左肩口に受けてしまった。シャアの身を案じて猛攻するラアラだが、ガンダムにはあたらな。肩口をスパークさせているゲルググから、シャアは攻撃続行をラアラに命じた。だがそのラアラは、アムロの強烈な精神波の干渉により、押さえつけられるような頭痛に襲われていた。

「悪い人だ……」
「なに？」

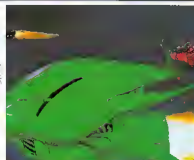


ビットを撃つガンダム



先行する第13独立艦隊と会合したホワイトベース

ゲルググを奥へ送るエルメス

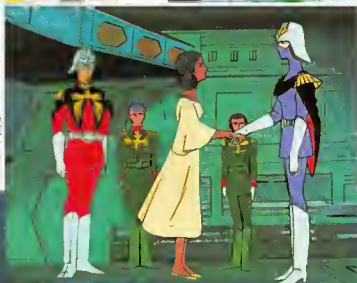


「シャアをいじめる悪い人だ……」
「誰が……悪い人なんだ！」

「しかし……ラアの離席の原因がガンダムのパイロットと関係があるようなら……事は、簡単にはすまん」



キシリア、ララアと握手する



月を背に進むキシリア隊

「悪い人だ！ シャアをいじめる悪い人だ！」

ララの思念にとまどうアムロ。そのすきに、エルメスは傷ついたゲルググを曳航して、戦線を離脱した。

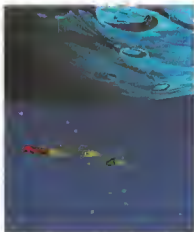
ホワイトベースは、先行する第13独立艦隊と合流したが、すでに3隻のサラムスが撃沈されていた。

そのうちの2隻はエルメスによるものである。すなわち、ララアは1日に4隻の艦を沈めたことになる。これは空前の快挙であった。

今、戦場は月の裏側へ移動しつつある……



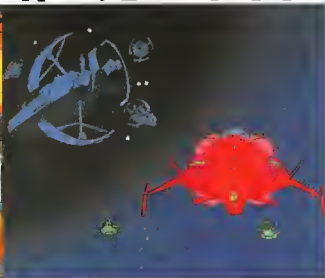
41話 光る宇宙



「デギン・ザビ公王は、自らの意志をはずれた局面を開闢すべく、ジオン公国を発進した」

「直接、我本國を襲撃するでしょう。あのレビルなら考えそうなことです」

「だからこそ、戦術回避の努力をせねばならぬものを、ガルマ……」



ジオンコロニー前のグレート・デギン



「私の？」



「フム、それが直りたい第2波の攻撃をかけよう」

「はい」

「本馬の隊を破ったら、直ちに、ア・バオア・クーへ向かう。情報では、レビルの主力艦隊はグラナダを無視するとみえた」

「お前の打倒ザビ家の行動が変わったのはなぜだ？」



「報告いたします。ソーラ・レイは可動体勢に入りました」

「よくわかった……準備を万全にな」



「よくわかった……準備を万全にな」



「いざとなると怖いものです。手の震えがとまりません」



「私は、4才ころのキャスバル坊やと遊んであげたことがあるんだよ？……お忘れか？」

第41話 光る宇宙

連邦軍がジオン本國を襲撃するのは目に見えていた。デギン・ザビ公王は、局面を開闢すべく、グレート・デギンでジオン公国を発進した。

一度しか使えぬソーラ・レイだが、2時間後には予定通りの出力で臨界点に達するとの報告に、ギレン総帥は満足していた。

一方、キシリアはシャアに、お前の正体を知っていると告げる。2人のかけひきが始まった。

となつては」

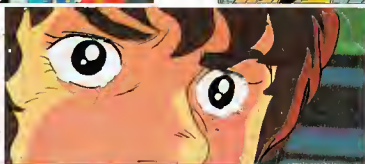


「ニュータイプか……超能力者とは違うというわけだな」

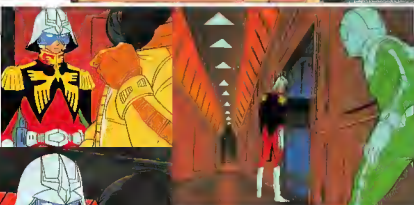


「そのあとのことはすべて、連邦に勝つてからのこと。よろしいか？」
「はっ／＼ 確かに／」

「でも／ ニュータイプといつても僕は特別な人間じゃありませんよ／ これだけ戦いぬいてこられたホワイトベースのみんながニュータイプです／ でなければ、勝ち抜けなかったはずですよ」



「私も、ゲルググで出る命令に従う」
「大佐……／」

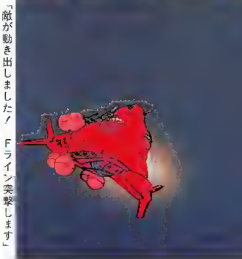


「大佐／ ダイヤモンド部隊とりました／」
「おう／ 各モビルスーツ隊、発進いそがしい／」

「今は、ララアの方が優れている」



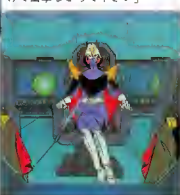
「それは…… そうかも知れん。しかし、アムロには特別なにかを感じるな」



「敵が動き出しました／ フライング突撃します」



「今日から、ノーマルスーツを着けて出撃なさって下さい」



「モビルスーツの発進終了／ シヤア大佐のサンジバルを先頭に突撃体制終了／」



ララアによって、ニュータイプの存在を信じ、打倒ザビ家以上のことを考え出したシヤアに、キシリアは相互協力の約束をほのめかした。どちらにしろ、連邦軍に勝つてからのことなのだ。
ホワイトベースでも、アムロをニュータイプだと信じ始めた。それでも考えねば説明がつかないのだ。アムロもエルメスとの戦闘を思いかえし、そう信じ出した。
キシリアの機隊では、モビルスーツ隊の出撃準備がなされた。ララアはシヤアに、ノーマルスーツの着用を頼んだ。シヤアはうな



「ニュータイプか………」

アムロとセイラは格闘庫へ向かう
「もう任せましょう」

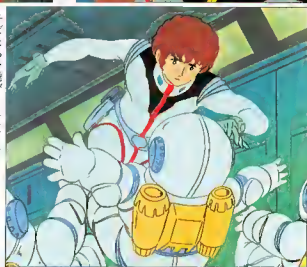


「シフトはどうするか!？」

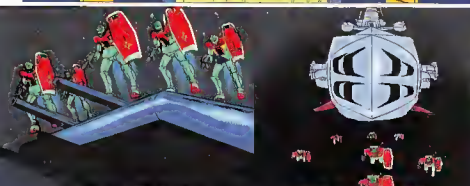
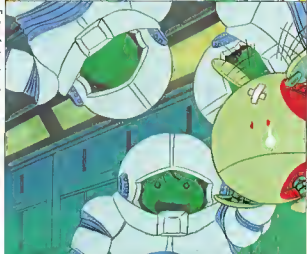
ホワイトベースを発進したモビルスーツ隊



チビたちを飛びこえるアムロ

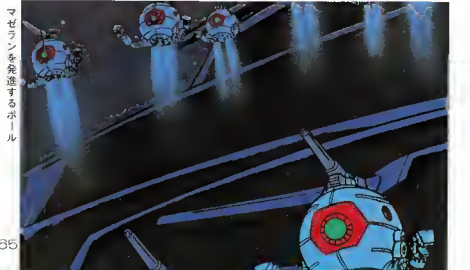


「もう、アムロつら!」



サラミスを発進するG.M

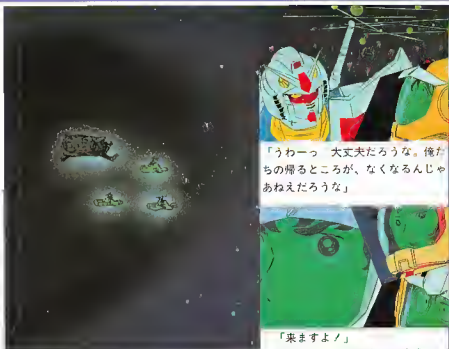
マゼランを発進するG.M



マゼランを発進するボール

ずいた。今はラアロの方がすぐれているのだ。次々とモビルスーツが発進してゆく。エルメスとゲルググも発進した。ホワイトベース艦隊に対するキシリア艦隊の、攻撃の幕は切つて落とされた。

敵の攻撃をキャッチした連邦軍も行動を開始した。ホワイトベースは第一戦闘配置を敷き、各機が発進していった。敵中にニュータイプ勇士がいることを知りながらも、戦いにおもむかねばならないのだ。サラミス・マゼラン艦より、G.M.やボールの編隊も出撃した。



ザンジバルとムサイ3機の編隊

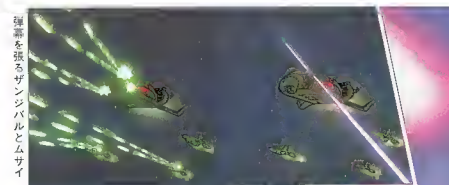
「うわーっ 大丈夫だろうな。俺たちの帰るところが、なくなるんじゃないかねえだろうな」

「来ますよ」

「右10度ノ | 時半の方向？」



主砲を撃つグワジン

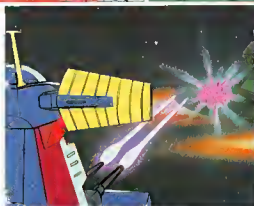


強事を張るザンジバルとムサイ

ビームの閃光がグワジンより連邦軍艦隊に向かって走り、幾多の爆発光がその空域できらめいた。

「うわーっ、大丈夫だろうな。俺たちの帰るところがなくなんじゃないかねえだろうな」

カイが思わず叫ぶほど、戦いは奇烈なものであった。ザンジバルとムサイの編隊がやってきた。アムロには敵の動きが正確に読めた。ガンダムがライフルを撃ち、ビームがザンジバルに命中する。ジオンのミサイルやビームの大群が飛来し、連邦の多くの艦を直撃した。そんな中であつて、戦いに慣れた



ムサイを撃沈したホワイトベース



「左舷ノ 4隻来ます」

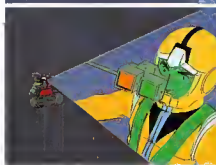
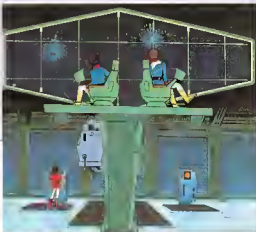
「弾幕を張れ」



「よし、対空砲火ノ 次はモビルスーツ 戦だノ 来るぞ」



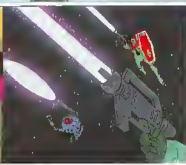
「相方2隻ずつ撃沈ノ 戦は回避行動に移りました」



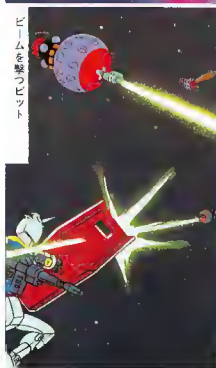
「このオノ」



「こいつ」



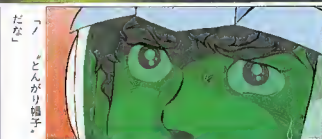
モビルスーツ隊の大砲火



ビームを撃つビット

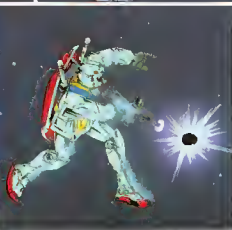
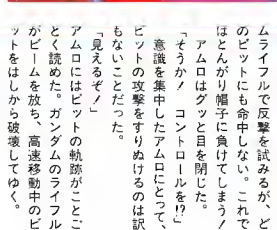
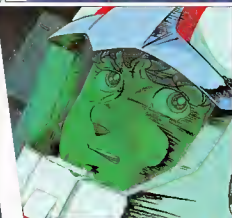
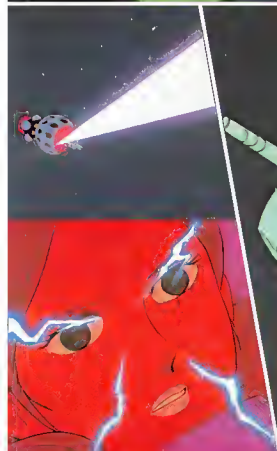
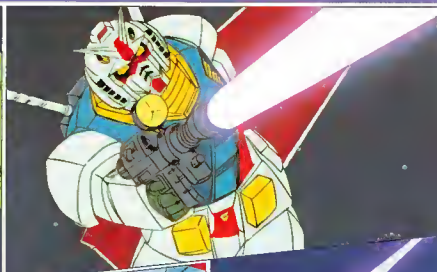


カンダムのまわりを飛ぶビット



「ノ、どんがり帽子。だ」

ホワイトベースは層雲に敵艦を撃破していく。
「よし、対空砲火ノ 次はモビルスーツ戦だノ 来るぞ」
十数機のドムが、GMやボールと交戦し始めた。ホワイトベースの各機もビームをよけながらドムを破壊してゆく。ジオンと連邦に入り乱れて戦う中、アムロはエルメスを見つけた。
「ノ、どんがり帽子。だ」
アムロにとって最大の敵である。ビットの群れが次々とガンダムの周辺を飛びかい、ビームを撃つ。アムロの必死の戦いが始まった。



次々におとされるビット



「チーノ」



「ラ、ラ!?」

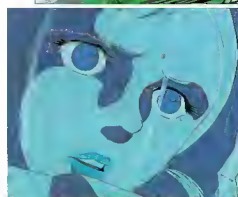


「アムロ!?」

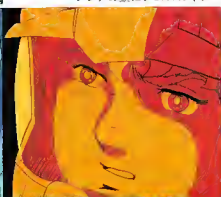
「ラ、ラ!?」



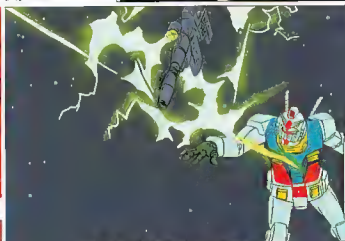
ララの頭にアムロのイメージが……



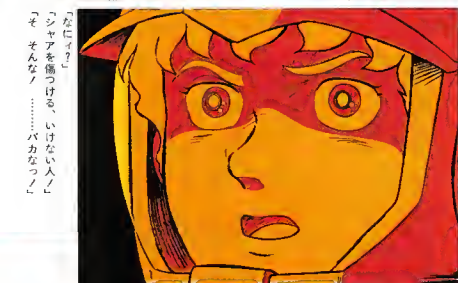
「シャアを傷つけるからノ」



「ララなら、なぜ戦う!?」

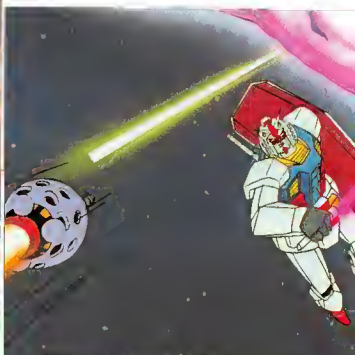


ライフルをはじき飛ばされるガンダム



「なにイ?」
「シャアを傷つける、いけない人ノ」
「そ、そんなノ……バカなんノ」

速くに、エルメスが現われた。
ラ、ラ……ラ、ラ……
例の響きがアムロの周囲でこだまする。なにかを感じてうめくアムロ。そこへエルメスが近づいた。ガンダムと接近戦に入るうとするエルメスに、アムロはララのイメージを見る。互いに攻撃と回避を繰り返しながら、2人はだいに精神感応状態に陥り、思惟を交差させた。
「ララなら、なぜ戦う!?」
「シャアを傷つけるからノ シャアを傷つける、いけない人ノ」
アムロはとまどうばかりであつた。



群れ飛ぶビットを切りまくるガンダム

「そのあなたの力が示している……あなたを倒さねばシャアが死ぬ！」

「シャア!? それ……!?」
「あなたの来るのがおそすぎたのよ」

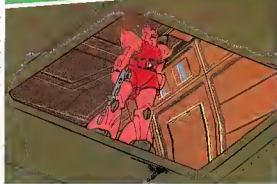
「なぜ、なぜなの? なぜあなたにはこうも戦えるの? あなたには守るべき人も、守るべきものもないというのに……」

「守るべきものがない?」

「私には見える! あなたの中には家族も……ふるさともないというのに……!」

「だ、だから……どうだというんだ!」

ゲルググ発進



「こいつ! こいつ!」

戦うガンキャノン

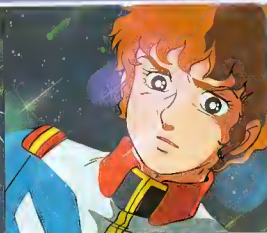
アムロとラアのイメージが……



大佐のためにアムロを倒さなければならぬ。その思いがラアを戦いに駆り出した。もはや敵として戦うしかないニュータイプの子の悲しい定めなのだろうか。アムロの出現は遅すぎたのか!? ビットやエルメスからビームが放たれる。巧みによけるガンダム。「なぜあなたはこうも戦えるの? あなたには守るべき人も守るべき物もないというのに……」アムロは愕然とした。
「ではラアはなんだ!?」
「私は救ってくれた人のために戦っているわ。……それは、人の生



「私は救ってくれた人のために戦っているわ」



「ではラアラはなんだ!？」



「守るべきものがなくて戦ってはいけないのか」
「それは不自然なのよ」



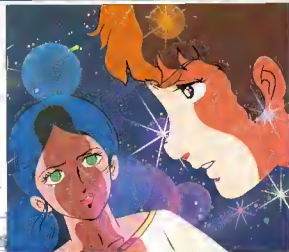
「ラアラ!？」

「アムロ!？」

「なぜ……!? なぜなの……それが運命だなんて……ひどすぎる」
「しかし、認めなくちゃいけないんだ ラアラ、目を開いて……」



「ああ……でも……なんでも……
今更になんて?」
「それが、人の背負った宿命なのだろうな……」



「ア、アムロノ、いけな
いわノ」



「ラアラ……
やつとのざれ事をやめろノ」

「さるための真理よ」
「ならば、二人の出会いはいはなんなのだ? ただ、戦うためにか?」
「いや、そんなことはないはずだ。アムロとラアラ、この、やつとめぐり会った二人のニュータイプは、彼らだけの形而上宇宙で意識を重ねあつた。」
「その様子をシャアとセイラが感知した。そしてホワイトベースのミライも……。現場に急行したシャアのゲルググが、共鳴する二人の間に割って入る。シャアにとって、アムロとラアラがひかれあうことは、許せないことだった。」



「あそこ…… 兄さん……」



「ラファ、私はガンダムを討ちたい！ 私を導いてくれ！」

「アアッ！ 兄さん、私よ、わからないの！！」



「……お手伝いします、大佐！ すまん！ ララア」

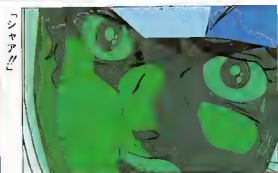


ゲルググと壮絶な戦いが始まる。ビームサーベルとビーム剣の応酬が続く。そこへ戦いをやめさせようとセイラがGフアイターで突っ込んできた。だが、シャアはセイラが乗っているとはつゆ知らず、Gフアイターを斬りつけ、キャタビラを破壊した。

「兄さん、私よ、わからないの」

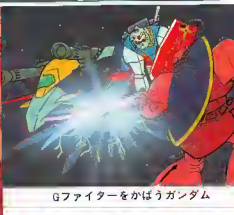
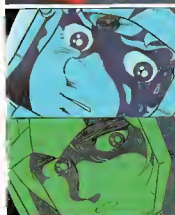
セイラの叫びも届かず、ララアに、ガンダムを討つための誘導を命ずるシャア。その願いをララアは受け入れる。シャアはゲルググでガンダムに突き進んだ。ララアを手離すわけにはゆかないのであ





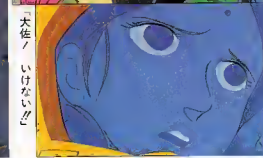
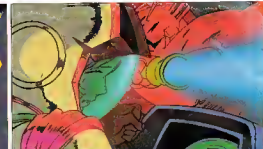
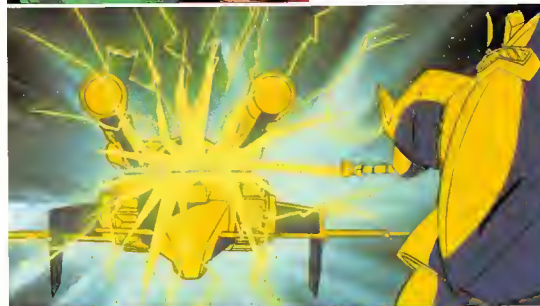
「シャア!!」

「今アラアを手離すわけには……ゆかん」



Gファイターをかばうガンダム

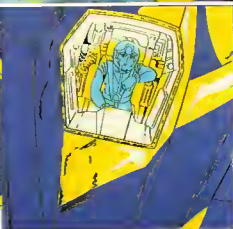
「大佐! 近づきすぎます!」



「大佐! いけない!!」



「アルティニアか!?!」



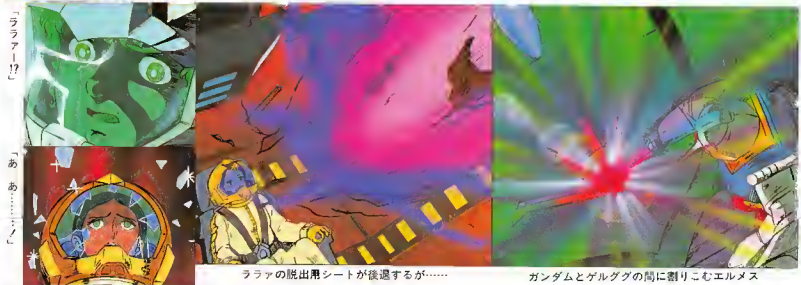
る。ガンダムにゲルググとエルメスの連携攻撃がなされた。そこへ再び突っ込んでくるセイラのGファイター。ゲルググの剣がGファイターを襲う。ガンダムのサーベルがギリギリの所で受け止めるが、Gファイターはターンして、なおも、突入を繰り返す。断りかかるゲルググの剣。事態を感知したアラアが叫んだ。
「!! 大佐! いけない!!」
剣がコクピットにくい込むとこそ、そこに妹アルティニアの姿を認めたシャアは、剣を振りかざす手を止め、離脱した。



「シャア 覚悟!!」

「チーッ!」

腕を切り落とされるゲルググ

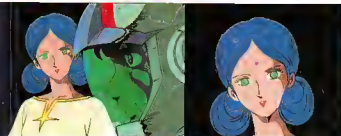


「シラァー!!?」

「あ あ……ッ!」

ララの脱出用シートが後退するが……

ガンダムとゲルググの間に割りこむエルメス



「そ そうだよ…… ラ
ラのいう通りだ……」

「人は空でゆくのね……
私たちと同じように……」

この一瞬のすきをアムロは見のがさなかった。ガンダムのサーベルはゲルググの腕を斬り落とし、さらにとどめを刺そうとした。が、シャアを救うためにゲルググをはねとばし、割り入ったエルメスのコクピットに、サーベルが突き刺さった。ララの意識はスパイクとなって宙を走り、波状となったアムロの意識も、ララを追って形而上宇宙に飛翔した。ララとアムロの思惟が、重なりあった。人は空でゆくのね……私たちが同じように……。アムロは本当に信じて?……



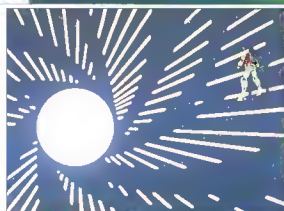
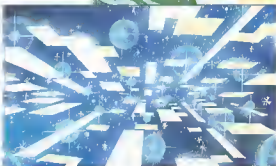
銀河を背に大地を走る二人



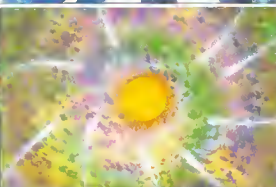
「アムロは本当に信じて?」
「し、信じるさノ、き、君ともこうしてわかり合えたんだから……人はいつか時間さえ支配することができさるさ」



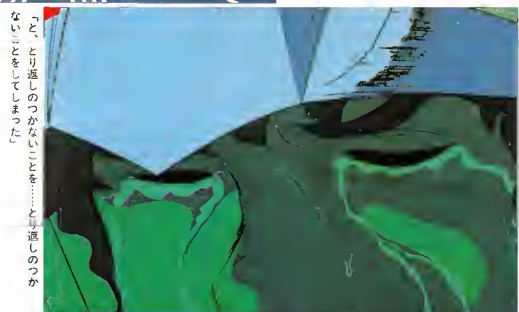
「ああ、アムロノ見える……」
「ああ、アムロノ見える……」



エルメスから飛び離れるガンダム



ひとつの核へすいこまれて行く精神



「と、とり返しのつかないことを……とり返しのつかないことをしてしまつた」



「こぶしを振りあげハネルをたたくシャア」
「ウーッッ」



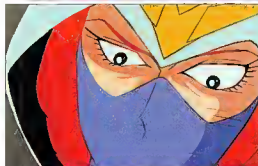
「ララ……ララア……」



「ザンジバルだ、ザンジバルだけに砲撃を集中しろ」

「木馬だけがいいノ木馬だけを……」

「し、信じるさノ……人はいつか時間さえ支配する事ができる」
悠久の時の流れを超えて、アムロとララアは、2人の目指すべき未来の姿をかみ見た。それは希望と至福の光に満ちあふれた世界だった。
我に帰ったアムロの目に映ったのは、光に包まれて消えてゆくエルメスだった。アムロの目にとめどもなく涙が流れる。
冷静なはずのシャアも、ララアを失った悲しみにふるえていた。
しかし、戦闘は、冷酷に打ち続けたのだ。

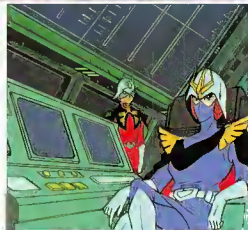


「……ソラー・レイを……30分後に使う
というのか!? 急ぎすぎるな、ギレンめ……
なにをたくらむのか?」

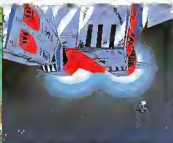


「キンリア様、ア・バオア・クーのギ
レン総帥より特命であります」

「残るはこのグワジンのみ。ひどいもので
すね。はい、ガンダムパイロットのニュ
ータイプの能力……拡大しつつあります」



「大丈夫です。戦えますから
だろ? ぼく?」
「アムロ、脳波レベル優良ノ
優良!」



先行するホワイトベース



「むりね。先行しませう?」



「本隊との集結時間におくれ
そうだ。ミライ、うしろのサ
ラミスがついてこられるかな?」



レビル將軍の指揮する、地球連邦軍艦隊

艦隊戦は連邦側の勝利だった。
キンリアの艦隊で残ったのは旗艦
グワジンのみであった。そのキン
リアのもとに、ギレンから連絡が
届いた。30分後にソラー・レイを
作動させようというのだ。キンリア
は急ぎすぎる作戦にギレンのたく
らみを感じた。
本隊との合流に遅れていたホウ
イトベースは先を急ぐ。その頃、
地球連邦軍の艦隊がア・バオア・
クーに対する第三戦闘ライン上に
集結しつつあった。レビル將軍は
全軍に攻撃目標を示した。ア・バ
オア・クーをたたき、ジオンに進



「グレート・デギンが和平交渉をと……」



攻撃目標はア・バオア・クー……

「ア・バオア・クーのギレンである。ソーラシステム最終目標を伝える」



レビルのサラムスに接近するグレート・デギン（グワジンタイプ）



ソーラシステム

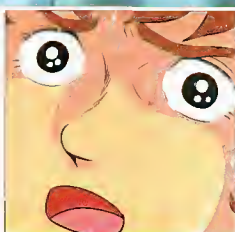
「ソーラ・レイを、ゲル・ドルバ照準に合せれば、敵の主力の3/4はしとめられるはずである。ソーラ・レイシステム、スタンバイ」
「了解であります」

「送受信システムのムサイ遅れ、影をおとすと出力が下がる」



ソーラ・レイビーム発射

「光と……人のうすが……と、溶けてゆくあ……」
「あれは憎しみの光だ」



攻めるのだ！ そのヘグレート・デギンが和平交渉に来た。ア・バオア・クーではギレンがソーラ・レイシステムの作動開始を命じた。敵は3つの隊に分かれているもの、これにより敵主力の3/4が仕止められる。今やソーラ・レイの本体となっているマハルが、巨体を動かし、照準を合わせた。収束ビームが発射され、宇宙を貫いた。アムロはそれを感じ、叫んだ。「前へ進んじやだめだ！ 光と、人の渦が……と、溶けてゆく。あ、あれは、憎しみの光だ！」





42話 宇宙要塞ア・バオア・クー



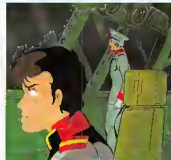
「これで、和平が……」



「うむ……」
「デギン公のようで……」



「熱源帯か？」
「あ？ なに？」



「うわ!!」

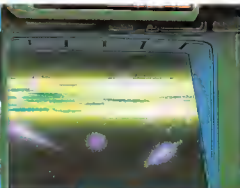
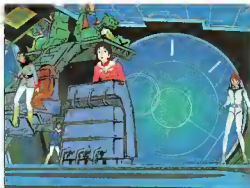


「あう!？」

光に包まれるグレート・デギンとマゼラン

「レビル艦隊の主力部隊のいると」
「こゝろ」

「なんだ、あの光は……」



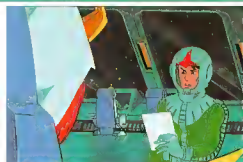
光の中に溶けて行く艦隊

第42話 宇宙要塞ア・バオア・クー

集結する連邦軍のレビル艦隊とグレート・デギンとの間に、和平のきざしが見られた時、マハルから発射されたソーラ・レイの巨大なビームが、その空域を光で包んだ。最終戦争を思わせる輝きの中、グレート・デギンが、レビル艦隊が、次々に爆発してゆく。この一撃で、レビル将軍を始め連邦軍前線の中核とデギン公王が爆死し、レビル艦隊の大半が消滅した。ア・バオア・クーへ帰還するグ

「ぜ、全滅じゃないけど……ぜ、全滅じゃないけど……」





「グレート・デギンの識別信号が、ゲル・ドルバの線上で確認されたのですが、どうも……」



「どういことなのか？ 第二戦艦配置準備中である。不明朗な会話はやめよ」



「ソーラ・レイ / ゲル・ドルバ照準で発射されました。な？ 聞いたス？」



「ああ、聞かえていたが……
そちらでも聞けたか？」



「グレート・デギンが？……
妙な……」



「ルザルはなんといっている？
「ホワイトベースを基点に、主力艦隊が集結をさせているから、動くなということだ」」



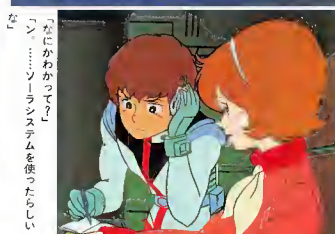
「だいぶ傷ついているのがあるわ」



空母ドロスを中心に展開するジオン艦隊



ア・バオア・クー周辺の艦隊



「なにわかって？」
「ん……ソーラシステムを使ったらしいな」

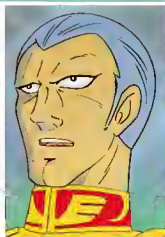
ワジンで、ソーラ・レイの通過線上にグレート・デギンの識別信号が確認された。キシリアはそれを不思議がった。

またホワイトベースでも、レビル主力艦隊のいる空域に、収束ビームが伸び、艦隊が次々と爆発するのを確認した。そのすさまじさに驚くブライトたち。とりあえず残存勢力は、ホワイトベースを基点に集結することとなったが、連絡通信がまだだいぶ混乱していた。

一方、ア・バオア・クーでは、総帥ギレンが、ジオン兵士に向けて演説をしていた。



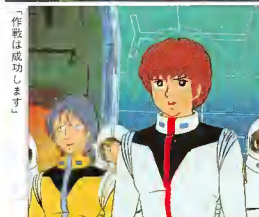
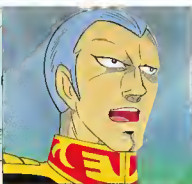
「今こそ、人類は、明日の未来に向かって
立たねばならぬとである、と！」



「決定的打撃をうけた地球連邦軍に、
いかほどの戦力が残っているか。それはすでに、形がよいである。あえてい
おう。カスである！」



「ジーク・ジガン ジーク・ジオン」



「作戦は成功します」

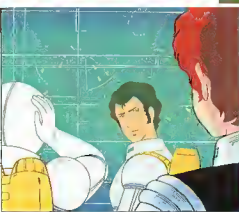


「いかにも戦力不足ね」
「こちらにもソーラシステムを使
えれば」

「第二大隊と第三大隊がポイントから
進攻します。我々は、ルザルを誘惑し
て残存艦隊をまとめて、Sポイントから
進みます」



「フラウ・ボウ、どんなことがあっても、
あきらめなやめないよ。こんなことで死
んじやつまらないからね」



「ニュータイプの動かし？」



連邦軍艦隊の半数がソーラ・レ
イによって宇宙に消えた。ギレン
はこれが、ジオンの正義のあかし
であり、連邦はカスだと訴えた。
「人類は我ら選ばれた優良種たる
ジオン国民に管理運営されて、
はじめて、永久に生きのびること
ができる！」
ギレンの言葉にジオンの兵たち
は陶酔し、士気を高めた。
決定的打撃を受けた地球連邦軍
は、残存艦隊をまとめて、最後の特
攻をア・バオア・クーへかけるこ
ととなった。作戦の説明を聞き成
功を保証するアムロ。ニュータイ



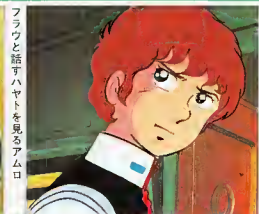
「あ、ありがとうアムロ。あきらめないわ、
絶対に」



「そりや結構 ビビビ……」



「ハヤトは？」
「お姉ちゃんどこにひっかかてる」



フラウと話すハヤトを見るアムロ



「さか立ちしたって人間は神様にはなれないからな」



「アムロ……さっきお前のいったこと本当かよ」
「うそですよ」



がんばってね、信じてるんだから



ドロスより発進するガトル



「敵はビーム擾乱機を張りつつ……」
「ミサイルで対抗しろ！ モビルスーツ隊は、まだ動かすな」



ミサイルを発射するバブリク

ブの勅によって、はげみを得、最後の出撃を覚悟する仲間たちであった。
出撃準備のさなかで、カイに真偽を尋ねられたアムロは、勅はウソだと答える。ああでも言わねば、こわくてみんな逃げ出していただろう。カイはうなずいた。
「そりやそうだな。逆立したって人間は神様にはなれないからな」
運邦軍は進撃を開始した。ジオン軍もア・バオア・クーや空母ドロスからバブリクやガトルを発進させ、ビームやミサイルの飛びかう戦乱が繰り広げられ始めた。



「『ジオング』を使ってみるか？ 80パーセントしか完成していないようだが」



「ミフィールドよりグワジン進入！ キンシア少将のものと思われます」
「しかし、妙だな、キンシアめ。出撃させてきた艦の数があわんが？」

降下するQMミサイルの編隊



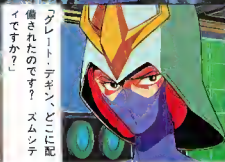
進ずる



「おそかったな」
「申しわけありません」



「沈んだよ、先行しすぎてな」



「グレートデギン、どこに配備されたのです？ ズムシレイですか？」

ア・バオア・クーにキンシアのグワジンが入港した。ゲルググはすべて出動しているらしく、キンシアの分は残っていない。キンシアは、ジオングでの出動準備をシアアに命ずる。これはまだ80%しか完成していないが、サイコミユを部分的に取り入れた強力なモビルスーツであった。

要塞の外では、連邦軍とジオン軍が入り乱れての激烈な攻防戦が展開されていた。ミサイルやビームを用いた艦隊戦から、モビルスーツ戦に、それは移りつつあった。キンシアは司令室におもむき、

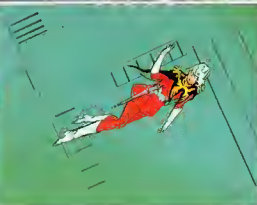


「脚はついていない」
「あんなの飾りです。偉い人にはそれが
わかんのです」

「80パーセント? 冗談じゃありません。現状
で、ジオングの性能は90パーセントです」



「タタタ……圧倒的じゃないか、我軍
は……」



「ありがとう、信じよう」



「気やすめかもしれませんが、大佐なら、うま
くやれますよ」



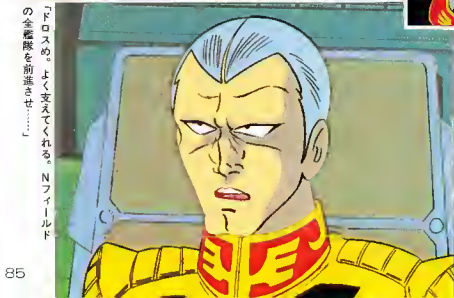
「フフ……。ここを攻めるには、
やはり数が少なすぎたようだ」



衛星ミサイルがサラミスに激突する



「ドロメ。よく支えてくれる。Nフィールド
の全艦隊を前進させる……」



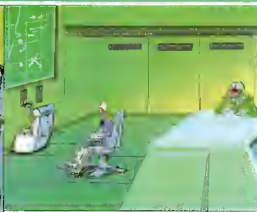
ギレンから、グレート・デギンに
デギン公王が同乗していたことを
聞いた。ある考えがキシリアにひ
らめいた。
戦いはジオン軍が優勢だった。
G.M.が、ボールが、サラミスが爆
発していった。空母ドロスの火器
と搭載するモビルスーツ隊の大活
躍で戦線が支えられていたのだ。
ア・バオア・クーを攻めるに
は、連邦軍艦隊の数が少なすぎる
のである。ギレンはこの情勢をみ
て、うすら笑いを浮かべた。
その時、反対側のフィールド上
に連邦の新しい艦隊が発見された。

ろ？」

「所詮は、生き残り部隊の最後の影あがきだろ？」



「連邦もよくやります」



「新しい艦隊だと？ 連邦軍のか？」
「Nフィールド線上です。計測します」



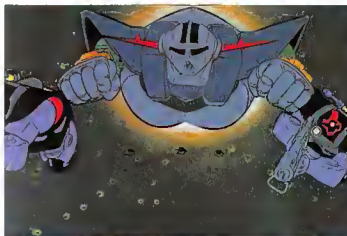
「父殺しの男が…」



「Sフィールドとて、このくらいの戦力なら支えられるな」



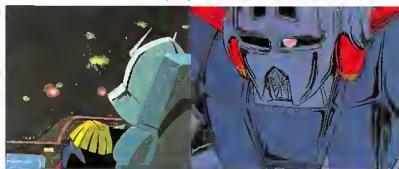
「Sフィールドに侵入する敵を殲滅します！」



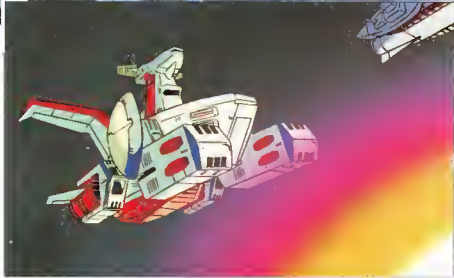
「沈めい！」



「私に、明確なニュータイプの要素があるかどうかだ…」



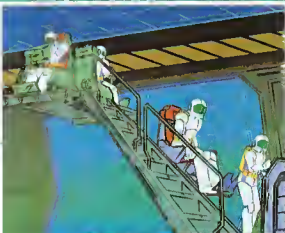
密着隊型のルザル艦



キシリアはシャアに、モビルスーツ隊と共にシオンでこれを撃滅するように命じた。このSフィールドの敵さえたけば、Nフィールドに空母ドロスがいるため、ア・バオア・クーは安泰なのである。安心してゐるギレンを見て、腰のレーザーライフルをなでながらキシリアは思った。

「父殺しの男が……」

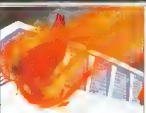
自身に明確なニュータイプの能力があるのかどうか、不安を覚えながらも、シャアはシオンで果敢に出撃していった。ミサイルとビームの激しい戦闘をくりくり抜け



「上角2度! 退避だ!」



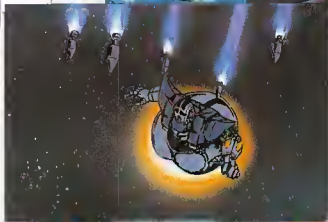
ホワイトベースにサ
ラミスの破片が突き
ささる



マゼラン爆発



「あ、……しかし、やつはど
ににいるのだ?」



「うっ、あれか?」



「……」

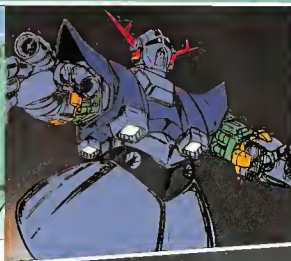
て、シヤアは連邦軍の艦隊に攻撃をかけてゆく。初めて扱うメカであったが、サイコミュ以外の戦法では彼は天才ともいえた。ジオングの指よりビームが発射され、マゼランやサラミスは破壊してゆく。その爆発の破片はホワイトベースを振動させた。その中、シヤアはガンダムを捜した。

「よし、しかし、やつはどこにいるのだ?」

彼は光の流れを見つけた。ZGMボールのモビルスーツ隊である。その中からガンダムが出てきた。ジオングはガンダムを追った。



「大物だ！ シャアか？」



「うしろから!?」
「なんだ? チ!」
「な」



「シャア以上のニュータイプみたいだ! しかし、今はア・バオア・クーにとりつのが先だ!」



アムロもジョングを見つけた。サイコミュを使用しているジョングの反応は素早く、ガンダム攻撃を巧みによけながら、攻撃をかけてくる。アムロはそのすばらしい反応速度に感心するが、相手をしている時間はなかった。一刻も早く、中樞にいる本当の敵を倒すために、ア・バオア・クーにとりつかねばならない。

そのア・バオア・クーでは、タイミングのずれた和平工作を阻止するためという口実で、連邦軍ともども父、デギン公王をソーラ・レイで殺したギレンを、キシリア

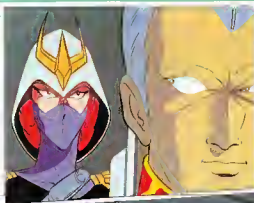


「本当の敵は、あの中にいる。シャアじゃない!」





「冗談はよせ……」
「意外と……兄上も甘いようだ」



「フフ……。Nフィールドは、ド
ロスの隊で支えられようだ」
「結構だ……」



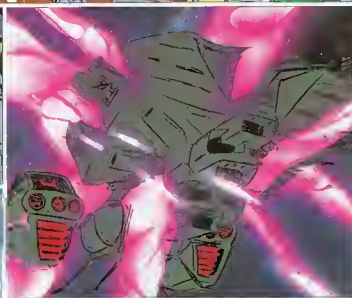
「ギレン総帥じゃないのか?」



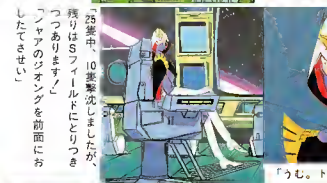
「ギレン総帥は名譽の戦死をされ
たノ、ドロス艦隊が破られたぞノ
キシリア閣下。御さい配を」



「父親しの罪はたとえ総帥であつ
ても免れることはできない。異議
のあるものは、この戦い終了後、
法廷に申し立てい」



ドロス撃沈



「25集中、10隻撃沈しましたが、
残りはSフィールドにとりつき
てあります」
「シャアのシオングを前面にお
して下さい」



「うむ。トワニング……。助かる」



ア・バオア・クーに接近するモビルスーツ隊

がビームで撃った。
指令室に重い空気が流れた。し
ばらくの間ではあったが、戦闘指
示がなされなかった。ギレンのか
わりに総司令となったキシリアは
戦闘の指揮をとるが、一時的にせ
よ中枢が麻痺したせいで、圧倒的
であったジオン軍が崩れ始めた。
そのために、キシリアの指示も乱
れた。
ついに戦闘ラインを越えて、連
邦軍が侵入を開始した。もはや
連邦軍がア・バオア・クーに
とりつくのは時間の問題だといえ
るところまできたのだ。

「いただきノ」



「いけエーノ」



「さすが新型」



「アムロノ」



「ラウ・ボウノ セイラのG
ファイターに、ホワイトベース
から離れないように伝えろ！」



「ミライノ さっき一時的に敵の防衛力
が弱くなったな」
「そ、そうね。何か妙だったわ。……」

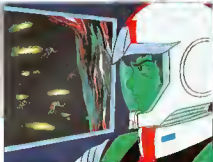
ガンキャンノン、ガンタンク、G
ファイターが、そしてGMやボー
ルの群れが、敵のモビルスーツを
一つ一つ撃破してゆく。
「ミライノ さっき一時的に敵の
防衛力が弱くなったな」
ブライトたちは戦況を的確に分
析していた。
「そうね。なにか妙だったわ。向
こうもうまくいっていないようね」
その時、ガンダムはゲルググか
らのがれ、敵艦を攻撃していた。
シヤアは見失ったガンダムを捜す
だけで、もはや戦線に参加してい
るとはいえなかった。弱まった



「なさないノ カンダムを見失う
とはノ どこだノ やつはノ」



「とりついた、ん?」



「シャアか?……こちらを見つけたな」



「やりますな、Nフィールドもモビルスーツがとりついてたようです」「うむ……」

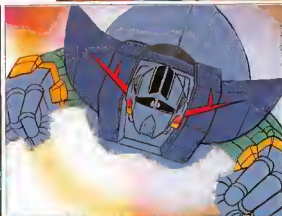
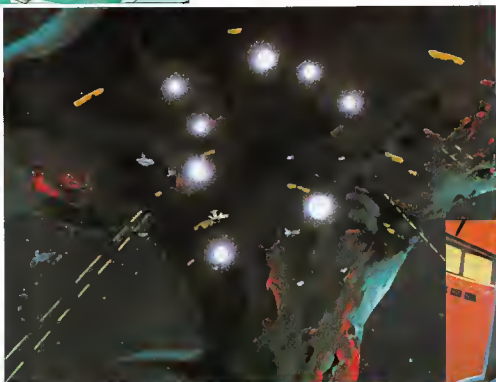
降下するGMとボール



防戦するザクとドム



ア・バオア・クーへ接近する連邦軍



「総帥が、ニュータイプにもっと早くお気づきであれば……」



「しかし、ゲルググ、ドムの動きがめだたないのは、どういうわけだ? トウニング」



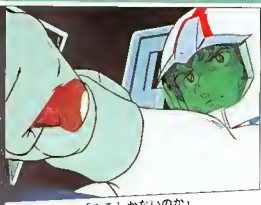
「は、ア・バオア・クーが、生徒動員のパイロットが多いようですから」



「見えるぞ! 私にも敵が見える!」

防衛のすきをつけて連邦軍のモビルスーツが次々とア・バオア・クーにとりついてゆく。
キシリアは、戦いが不利になりつつあることを読んだ。ジオンは戦線に大勢の生徒動員パイロットを投入しているのだ。不安ではあるが、残り少ない連邦軍を打ち破るには、敵をア・バオア・クーに引きつけ、しらみつぶしに攻撃をかけるしか手はない。キシリアはそう判断し、命令を下した。ガンダムはア・バオア・クーにとりついた。それを見つけたシャアが急行する。

「な、なぜ、出て来る」

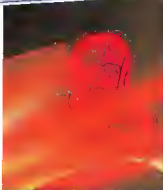


「やるしかないのか」

「逆方向から!?」



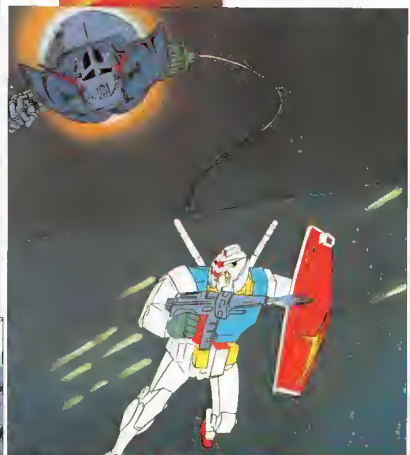
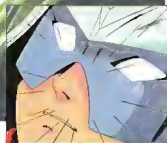
「あ!? ああノ 火、火が……ノ
か、かあさんノ」



ジオングのビームがザクに……

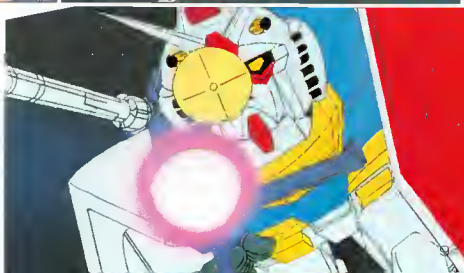


「チッノ」



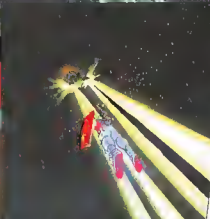
要塞に侵入するチャンスではあったが、アムロはシャアと戦わざるを得なかった。ジオングとガンダムとの戦いが始まるが、その間に学徒兵の操縦するザクが割り込み、流れビームにあたって火を吹いた。「あ、ああノ か、かあさんノ」パイロットの学生の叫びと共に、無残にもザクは散った。

味方とはいえ、ザクの邪魔がなくなったので、シャアはガンダムに改めて攻撃をかけた。ジオングの左手がはずれ、空中を自在に移動し始めた。ガンダムがライフルをジオングに向けてるが、後方

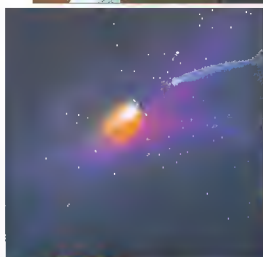




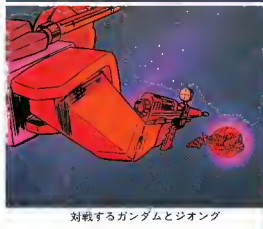
「チッノ、またかッ！」



「よけたのかッ！」



「しかしノ……私もニュータイプのはずだノ」

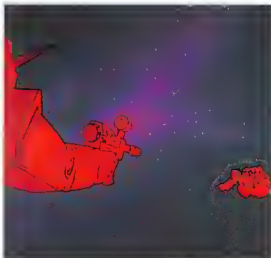


対戦するガンダムとジオング



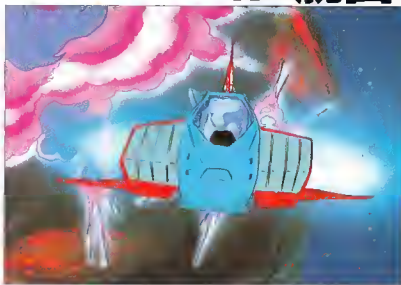
からのビームがガンダムを制した。ジオングと自在飛行する手の、オイル・レンジ攻撃なのだ。必死で攻撃を避けて、ガンダムは戦うが、ジオングの動きも巧みで、簡単に決着もつきそうでなく、膠着状態に陥った。

この状態にシヤアは、激しいあせりを感じていた。ニュータイプ用に開発されたジオングのパワーを、最大限に発揮できないのである。あのガンダムのパイロットは、確実に自分を追い込んでくるノだが彼は、自分もニュータイプであると信じたかった。



左右から近づくとジオン・ガンダム

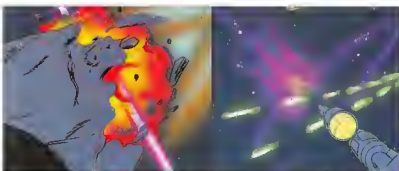
「一度しか使えぬジオンのソーラ・レイではあったが、地球連邦軍は、その戦力の殆どを失った。しかし、キシリアがギレンを殺したことがア・バオア・クーにすきを作ったようであった。地球連邦軍は攻勢に出た。」



ガンダム、ビームをよけて撃つ



ジオンがビームを撃つ



ガンダムのビームがジオンのスカート部分を吹き飛ばす

ジオンの手だけが迫り、ビームを撃つ

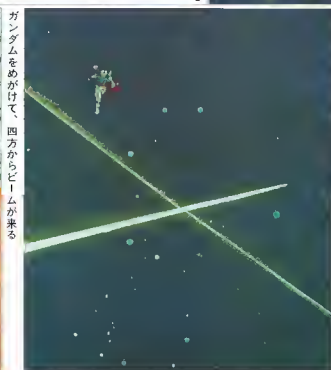


ジオン、ガンダムのビームをよける



「シャアアア」

「シノ 誰だ!?」

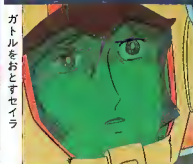


ガンダムをめぐって、四方からビームが来る



「うっ／＼ガンダムめ!」

ジオンの手が左右に分かれた



ガトルをおとすセイラ

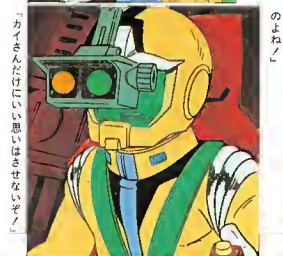
ア・バオア・クーでは激しい攻防戦が続いていた



「壁です。敵艦隊の入口に接近中です！」



「右舷の攻撃に集中させろ！ フラウ・ボウ！ ガンキャンノン、ガンタンクはどうか!?」



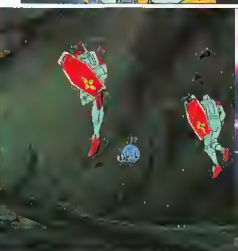
「カイさんだけにいい思いはさせないぜ！」



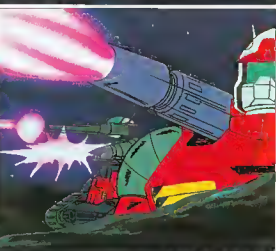
「外からドンパチやつたつて、ラチあかないのよね！」



「野郎、二匹の一番乗りは、俺だつてに！」



ボールとGMが飛び込む



ガンタンク、ガンキャンノンの砲撃に扉が破られた



ア・バオア・クー内部からの砲火が、2機のモビルスーツに集中する

「ホラみる！」

集中砲火に撃ち抜かれるG.M.とポール



ガンダムが接近する



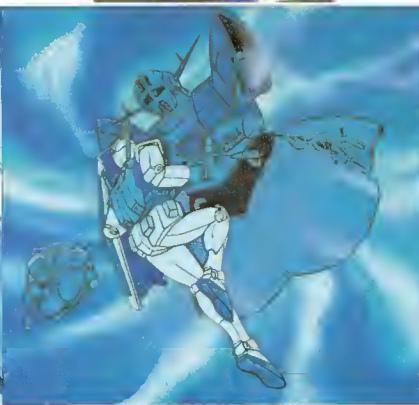
ジオングとガンダムが交戦する



「こう近づけば、四方からの攻撃はムリだな！ シャア！」



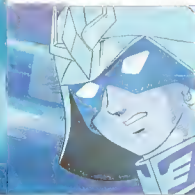
「なんだ？」



かさなりあうジオングとガンダム



ガンダムのライフルがジオングの左腕を吹き飛ばした

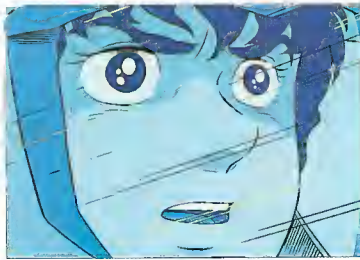


「ガンダム！」



「チーン！」

「なぜ、ラアアを巻き込んだのだノラ
ラアは戦いをする人ではなかった！」





「シャア！」

ジオングのビームに、桶の一部が吹き飛ばされる

ターンするジオングとガンダム



ジオングのビームがガンダムの左腕を吹き飛ばす



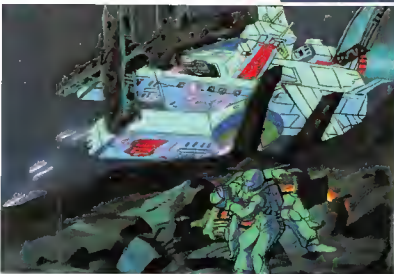
ジオングにあたるビーム



ア・バオア・クーへ降下するジオング



ジオングの腕を撃つガンダム



「おいノしつかりしろノ死ぬんじゃないぞ」



追うガンダム

「ラアノ 教えてくれ/どうしたらいいのだ」



ジオングに迫るガンダム

「ガンダムのパイロット アムロといったな、どうする? あのニュータイプに打ち勝つ方法は?」



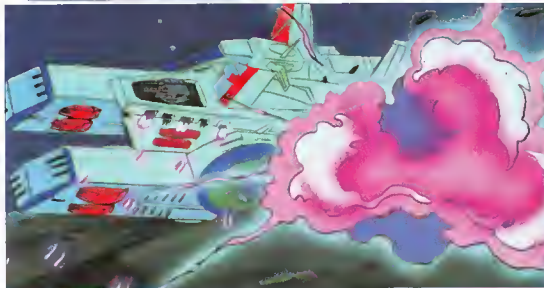
「左舷エンジン急速閉鎖ノ エンジン切り離せノ ミライ」



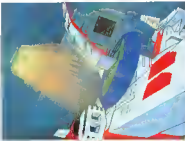
左舷エンジンを撃ち抜かれたホワイトベース



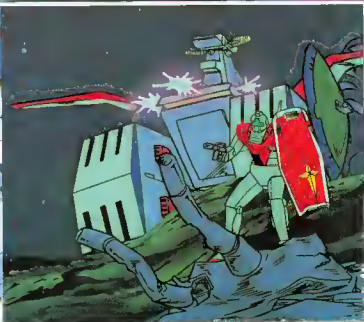
切り離されたエンジンが大爆発を起こした



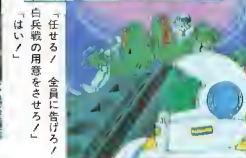
「コ、コントロールが……!」



港口の一つへ向かってすべり込むホワイトベース



徹底しようとするホワイトベースの防御にまわるGM



「任せるノ 全員に告げるノ 白兵戦の用意をせよ」

「はい」

「周囲に気をつけろ！ここから敵兵が出て来るかわからんぞ！」



ドムがバズーカを撃つ

ドムのバズーカが命中し、右舷エンジンも爆発する



「ああ!? の、乗組員のみん
なは!?」

「うっ!? ホワイトヘイズのエン
ジンが両方とも!?」



かけつけるガンキャノン

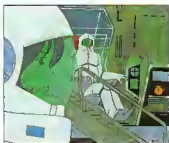


「ここだ!?
シャアマン」



ガンタンク降下

「カイとハヤトには援護
を頼め!
フラウボウもけん銃を！」
「はい！」

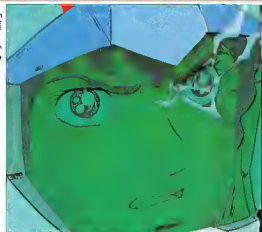


「ア!?」



ア・パオア・クーの一角から ガンダムにビームが来る

「通うか!?」



ガンダムが飛び出して来る



ビームを撃つジオング



「ガンダムっ!」



ジオングの首が脱出する



ガンダム ビーム撃つ

「うわっ! シャアめ!」

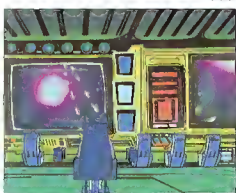


「まだだ! たかがメインカメラ
をやられただけだ!」

岩陰に隠れるジオング



ガンダムの首が吹き飛ぶ



「Nフィールド応答なし」

「Sフィールド応答なし、なに? ミサイルが!」

「Wフィールド24ブロックに弾丸を送れ!」

「スネークル! スネークル!」



「赤い彗星も地におちたものだな」



「私の脱出15分後に、ここを降服させるがいい。グラナダの戦力と本国の戦力が残っているうちに……」
 「し、しかし……今となつては脱出こそ至難のわざかと……」
 「私が生きのびれば、ジオンは失われる」「降服後、私の身柄は?」「捕虜交換のおりに、ひきあげよう。船の用意をさせろ!」「ハッ、直ちに!」



「ハッ、閣下!」

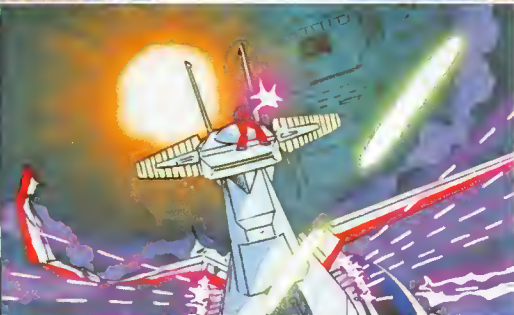


「しかし、ガンダムのパイロットがニュータイプとして異常発達したものでなければ、やむをえぬというところか? そうだな?」

「まるで、アリジヤあねえか!あつちこつちと!」



「頼の陸戦隊が出て来るぞ!総員バスター!ライフルで立ち向かえ!」



「ヤアだってわかつているはずだ!本心の出すべき相手がザビ家だ!ということき、それを邪魔するなど……!」



ジオングの首を造ってア・バオア・クー内部に侵入したガンダム



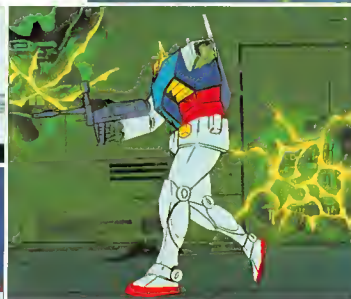
「シャア……いるな」



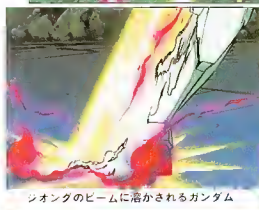
自動操縦されるガンダムを見るアムロ



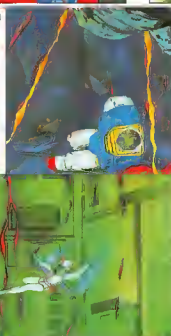
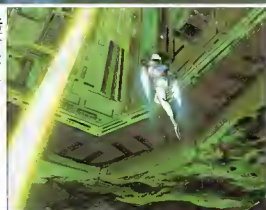
コンピューターにプログラムして飛び出すアムロ



進むガンダム



ジオングのビームに溶かされるガンダム



「貴様がララアを戦いに引き込んだ！」

「……今の僕になら本当の敵を倒せるはずだ」サビ家の頭領がわかるんだ」
「その力、ラアラが与えてくれたのかも知れん」あんりがたく思うのだな」



「それは理屈だ」



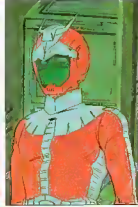
「戦争がなければ、ミラのニュータイプへの目ざめはなかった」



「なに?」



「それが許せんというのなら間違いだな……アムロ君」



「今、吾のようなニュータイプは危険すぎる……私は、プを殺す」



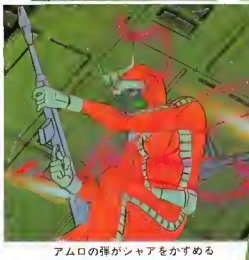
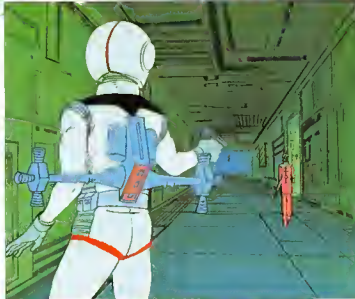
よけるシャア



火を吹きアムロのけん銃



「しかし、正しいものの方だ」
「それ以上近づくと思つぞ」



アムロの弾がシャアをかすめる



シャアとアムロ交差する

ハッチが閉じていく



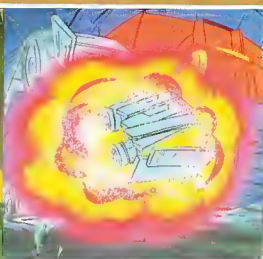
シャアを追うアムロ



間一髪ハッチをすり抜ける
アムロ



倒れるガンタンクのキャタピラが吹き飛ばされ、ハヤトが脱出する

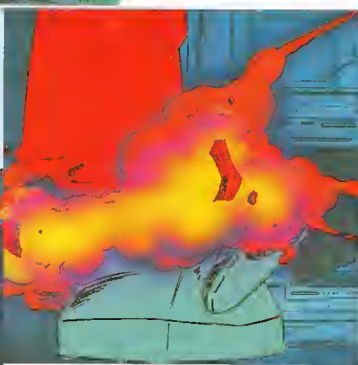


「うわーっ」

ガンタンクのキャタピラに直撃



そのザクを撃つガンキャノン



「ハカヤロ！ あれじゃあ、援護にならねえじゃねえか！」

白兵戦かよ



ザクの砲撃に足を飛ばされたガンキャノン



不降着するGファイター！



前進するセイラ



「あっ？ 兄さん!？」

飛び出すセイラ

「外には敵がうようよいんだ!」
「ドム中隊をまわせ!」
「くらなんでもサシバル」
「甚じゃあ……」



出港準備をするザンシバ



「急がせい! 他の兵に氣どられるな!」
「貴様が最強の兵だからだ!」
「本当の敵はザンシバではないのか!」



「ハッ!」



「あの……」



シャアの剣を受けるアムロ

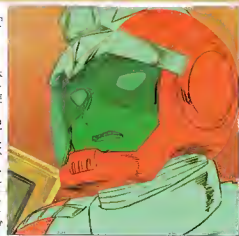


「私にとっては違うな!」



「チー!」

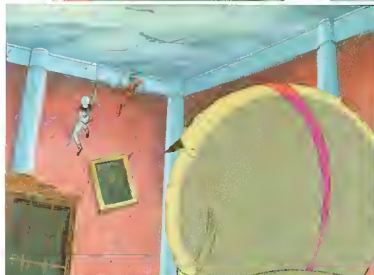
「そう、体を使うわざは、ニュータイプ
といえども訓練をしなければ……」



「ニュータイプでも体を使うこと、普通
の人と同じだと思うからだ」



「わかるか!? ここに誘いこんだ」



「やめなさい! アムロ/
やめなさい! 兄さん!」



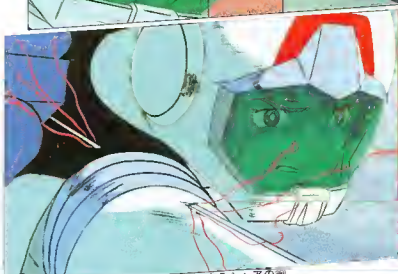
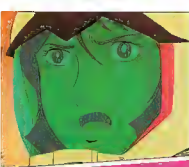
「そんな理屈!」



「テークン」



「二人が戦うことなんてない
のよ、戦争だからって、二
人が戦う」とは」



アムロの肩にささるシャアの剣

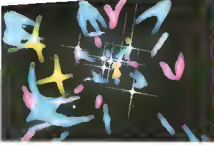


シャアの顔にささるアムロの剣



「あ? ああれ!」

2人の間にラファのイメ
ージがスパークする



「戦場では、強力な武器になるノ やむを得んことだノ」

「いま、ララァがいった……二、ニュータイプは、二、殺しあう道具ではないって……」

「貴様だって……ニュータイプだろうにノ」

「兄さんの敵は、ザビ家ではなかったの」

「ザビ家打倒をぞ、もうついでのことなのだ、アルテイシア。ジョーンさまとは、ニュータイプの時代だ。アムロ君が、この私のいうことがわかるのなら……私の同志になれ。ララァも喜ぶ」



爆風で煮られるセイラ



「やめて！ 二人が！ あノ」

「アムロノ 大丈夫？」
「ううー」



壁にぶつかるアムロとセイラ

「アルテイシア！」「兄さん！ やめて下さいノ アムロに恨みがあるわけではないでしょうノ」「しかし、敵にするわけにはいかん相手であれば倒せるときに……」



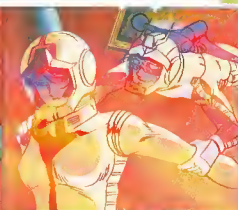


爆風で吹きとばされる3人

「なにに!?」
「兄さん! なん(ん)と……!」



「に、兄さんノ…… ひ、私の傷は?」
「ヘルメットがなければ、即死だった」



炎の中のシャアとセイラ



セイラを救おうとするシャア

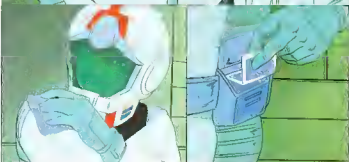


剣先をぬこうとするアムロ

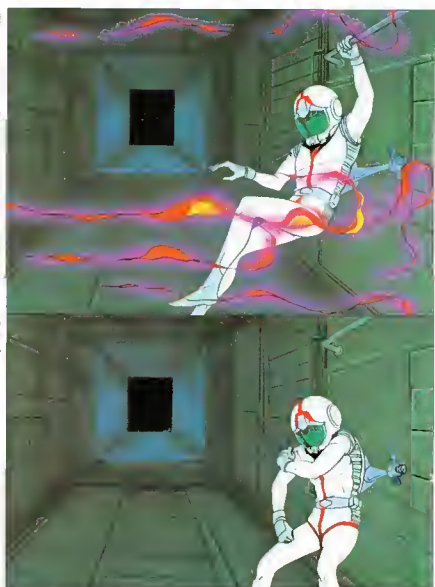
壁にたたきつけられるアムロ



「あつ、うっ」



ノーマルスーツ用のレスキュー・テープを肩にはるアムロ





「あ、ありがとございます。う、うわさのやけどは、ごめいせんな……フ……」



「安心しろ、貴様にかわって、閣下の……」



「サビ家の人間は、やはり許せぬとわかった。そのケリはつける」
「に 兄さん……」
「お前も もう大人だろ？ 戦争も忘れろ」



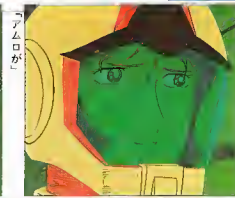
「こもたひぶ空気が薄くなってきたアルテイシアは脱出しろ」
「兄さんはどうするのです？」



「キ、キンリア様が脱出されるので……」



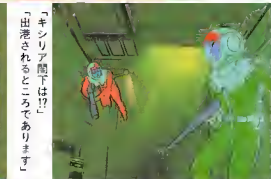
上昇するシャア



「アムロが」



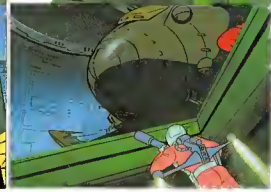
「いい女になるのだな……アムロが呼んでいる」



「キンリア閣下は!?」
「出港されるのであります」



「土曜サラミス接近中、急遽発進」
「すれんものは、床に伏せさせろ」



残されたセイラ

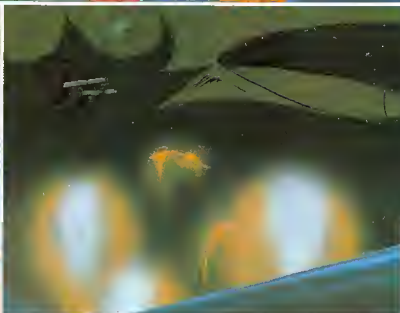
「シャアか？」



「ガルマ、私のたむげだ。姉上と肩よく暮すがいい」



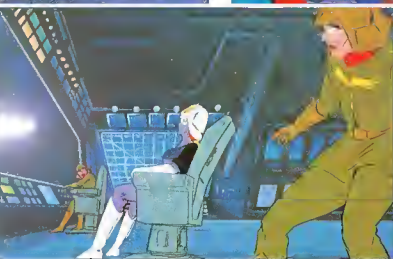
バズーカを構えるシャア



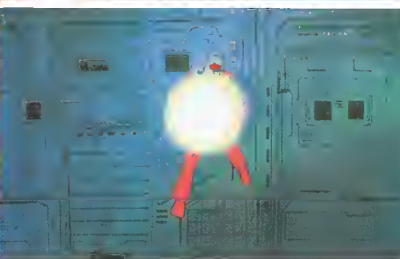
上昇するザンジバル



驚愕するキシリア

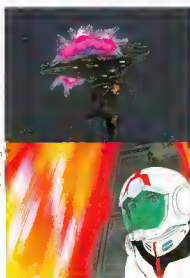


キシリアを襲う弾



バズーカ発射

燃えるア・バオア・クー「だめか？」



港内へザンジバルの船底がたたきつけられる

上昇／火を吹くザンジバル
サラミスのビームがザンジバルに集中する





「うわっ！」

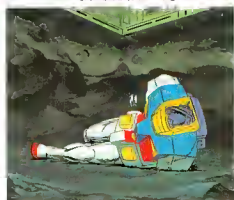
「み、みんなのところに……い、行かない……行っちゃって……生きのびた……兄さんが……」



「ま、まだ助かる？」



「ち、畜生……。こ、ここまでか」



ガンダムにたどりついたアムロ

倒れているガンダム

降下するアムロ

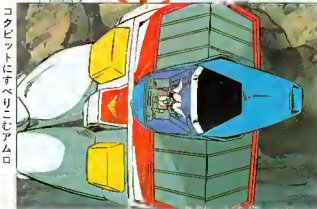


「は、しかし、ホワイトベースのみんなは？ セイラさんは？」

動力ボックスの陰に身を隠す

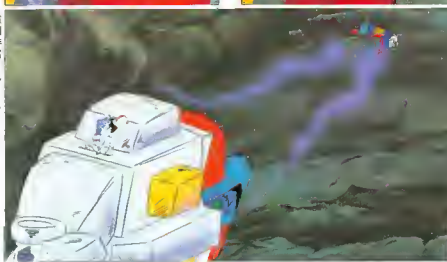


強制排出スイッチを入れる



コクピットにすべりこむアムロ

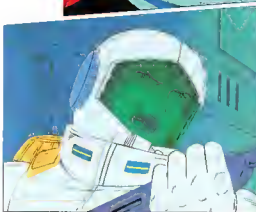
強制排出されたAパーツ



「え……そ、そうだな、どうすればいい？」
「フフ、アムロとは、いつでも遊べる……」
「ララァ」



「ララァのどこへ行くのか？」
「殺しあうのがニュータイプじゃないでしょ？」

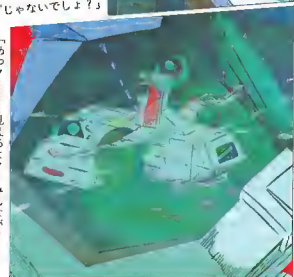


どなるブライト

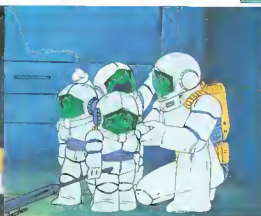


銃を撃つハワードたち

「あつノ……見えるよノ、みんながノ」



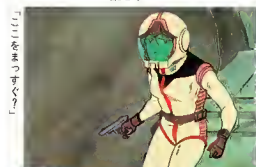
銃を撃つハヤト



フラウとチビちゃん



泣きそうな表情で走るミライ



「……」をまつすぐ？」

「せ、せいらさんノ、た、立つたノ、立つたノ」



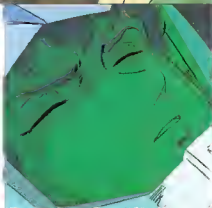
「アムロ!? アムロなの? でも、こゝはどこだかわからないのよ!」



「わ? アムロなら見えるわ」



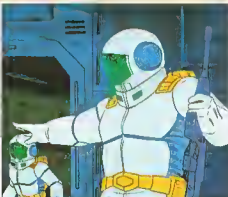
「そうですノ、そして500メートル行つたら、左へ90度まがって下さい」



「アムロ? ゼ、そうね
の先遣準備をさせるわ!」



「第16ハッチは封鎖だ!」
「はい!」



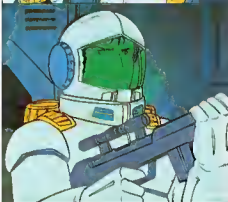
「00メートル行つて」



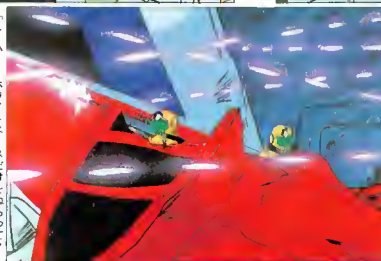
セイラのけん銃が火を噴いた



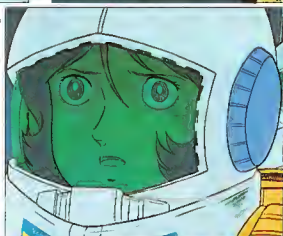
「アムロ?」
「退却命令を出さないと
全滅する!」



「えい! ホワイ特ベースだけをねらつて!」
「この船めだちますからな!」



「アムロ!」
「僕の好きなフラウ! 次に銃撃がやんだら……一気に走りぬけられるよ!」
「アムロなのね? どこにいるの?」
「ランチのところへ行くんだ! いいね」



「あたしが走ったら走るのよ、いいわね」
「うん!」



「……………」
「聞こえましたか?」
「あ? あう? アムロだ!」



「ここはもう撤退ですって!」
「そう思うな」
「連邦軍は優勢らしいし」
「勝つとなりや、ニコを引き上げて
もよからう」
「じゃあ!」

ランチの方へ走る4人



「あーッ」



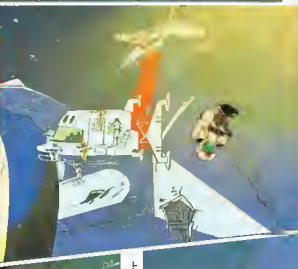
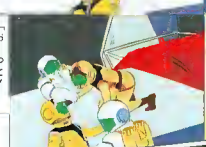
「ホワイトベース」



「セイラさん、こっ
ちよ」
「セイラ」



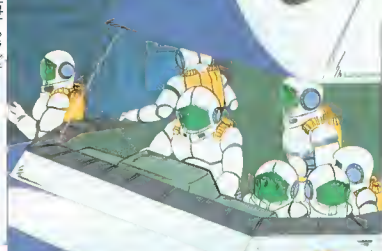
「おーっど」
「カイ」
「よし、いいゼ」
「や」



脱出する2台のランチ



上昇するランチ



「ホワイトベースが沈む……」

「ホワイトベースが……」

「アムロが呼んでくれなけれ
ば、我々は、あの炎の中に焼
がれていた」



背後の爆発の中に包まれるホ
ワイトベース



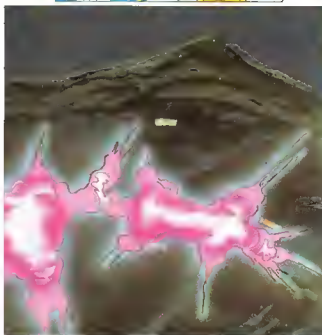
「いない。セイラやミラーの方が、聞こえるんじゃないのか？」



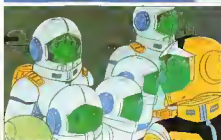
「じゃあ……このランチにアムロはいないの？ プライツ！」



爆発が続くホワイトベース



爆発の続くア・ハオア・クー



「アムロだけいないんだ。わからないかって」
「そ、そんなこといったって……」
「さっき、アムロ兄ちゃんの声聞こえたろ」
「ん！」

「私がホワイトベースにたどりつくまでは、あれほどに……アムロ……」



「え？」
「ジオンの忘れがたみのセイラの方が我々より、よほどニュータイプに近いはずだ！ 捜してくれ！ アムロを！」

「でも……どうやって？ わ、わからないわ！」



ランチの上に出るカツ・レツ・キッカ



「アハノ クク……」
「そうノ ちよい右ノ」
「キッカノ」



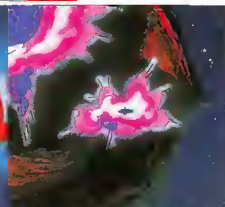
「ハガ！ そんなに便利になれるわけ……ない……」



「わかるの!? ど、どこ!!」



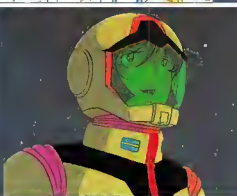
「アムロ!!」



爆発光の中からコアファイターが……



「うわーい!」



「ああ!」



「み
み
ん
だ
は?」



「アムロォーノ」



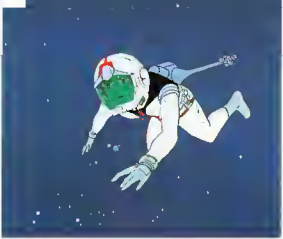
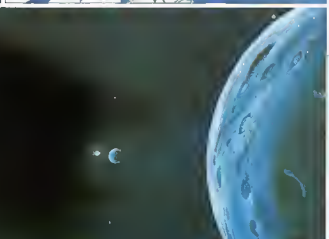
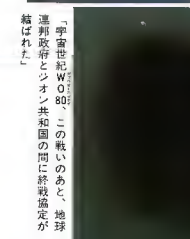
「うっ、う………」



「ア………」



ハヤトの出す発光信号



「めんよ……まだ 僕には帰れると
ころがあるんだ……こんなうれいこ
とはない……わかってくれるよね。ラ
ラには、いつでも会いに行けるから」

大勢に向かって歩いて行くコアファイター！

コアファイターから飛び出すアムロ

「宇宙世紀W.O.80、この戦いのあと、地球
連邦政府とジオン共和国の間に終戦協定が
結ばれた。」

●マ・クベ戦闘服 (37話)

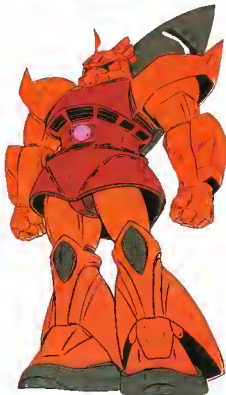


37~43話キャラクターシート



●ピット (39話)

●エルメス (39話)

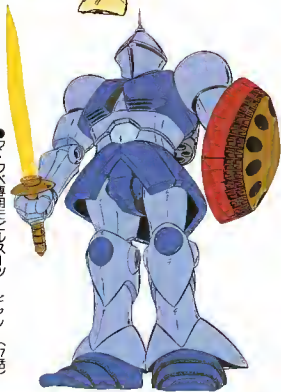


●シャア専用モビルスーツ グルグ (37話)

●ララァ・スン宇宙服



●マ・クベ専用モビルスーツ
ギャン (37話)



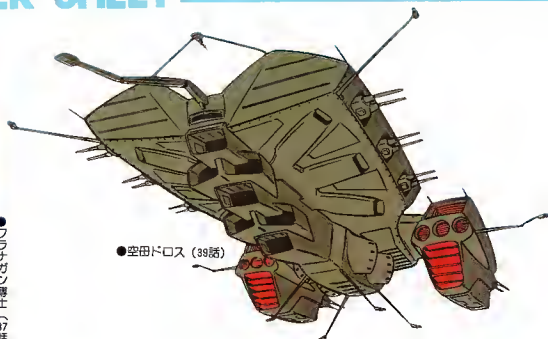
CHARACTER SHEET



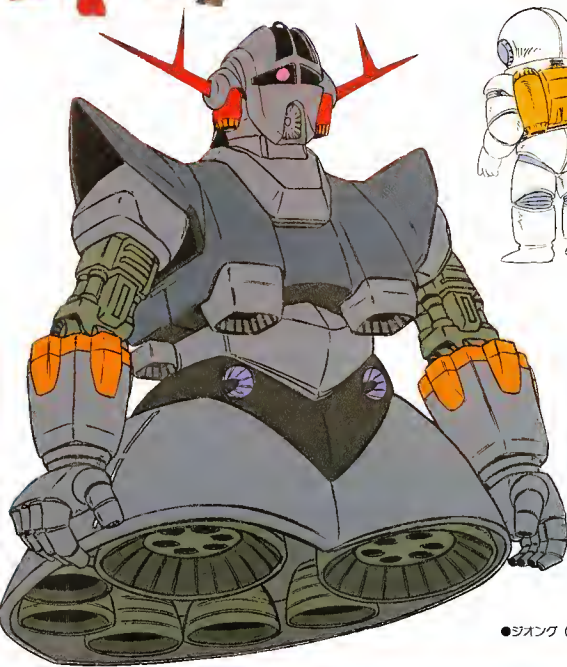
●モスク・ハン博士 (40話)



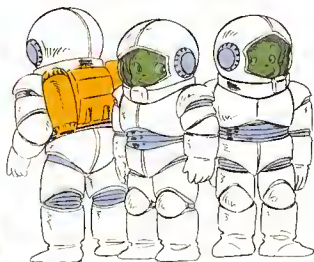
●フィナガン博士 (37話)



●空田ドロス (39話)



●ジオング (42話)



●ノーマルスーツの3人 (42話)



●シヤリア・プル大尉 (39話)

機動戦士ガンダム 名場面 迷場面

記録全集では、ストーリーを重視してフィルムを選んだために、どうしてもオチコボレカットが出てしまいました。それらの捨てがたいカットを集録してみましよう。



キッカのセミヌード (17話)

あらあらキッカちゃん、セミヌードでどうしたの？ え、ホワイトベースのおフロ場でお洗濯をしていたら、水道の蛇口がこわれちゃったの？ まあ、それはタイヘン！ ありやうや、おフロ場は洪水だ。――水道のどっ手はどこ？ え、洗面器の中だつて……ああ、あったあったと……。これでよし……じゃあね。



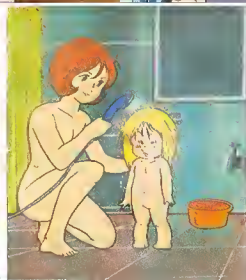
入浴中失礼します、ミライさん (17話)

キッカの騒々しい声を聞きつけて、何事かとばかりにバスルームの奥から出てきたミライ。アムロの姿を認めて一瞬身をひくが、すかさず、「アムロ、まだだいて。蛇口みてやっ」というあたりさすがはミライさん。ただはずかしがつてとりみだしたりなんかしません。状況判断は適切です。アムロの視線を感じて顔を赤らめながら、たすかったわアムロ、ねえ、もう安全さ。」とくるあたり、実にステキな女性であります。



ハモンさんの入浴 (21話)

「何としてもラルの仇をうちたいのです!!」(ハモンの台詞より)
愛する夫ランバ、ラルの遺志を継いで、ホワイトベースへ特攻をかける決心をしたハモンは、ラルス内にこめました。目にもと隊の残り少ない残存兵力を全て結まらぬ早さでバスルームを体集した。カーゴのバスルームから出てきたハモンは大きな私室の中らがつぶやく。「命びろいので、今やたった一人でとり残されたのいいおフロだったのだからのぞくその表情には断固としり入つていてよ、セイラさん……オネガイ！」



入浴中のキッカとフラウ・ボウ (22話)

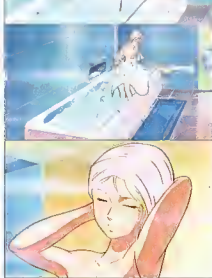
ハードなガンダムの世界の中で、三人組のチビちゃん達やハロ、そしてその世話をするフラウ・ボウが登場する日常的なシーンが出る。何となくほつとさせられる。入浴シーンも美にはのほのとしていてヨカッタ。写真だけみてもとても宇宙戦艦の中とは思えないもんね。

「きれいになったでしょ」(フラウ・ボウの台詞より)

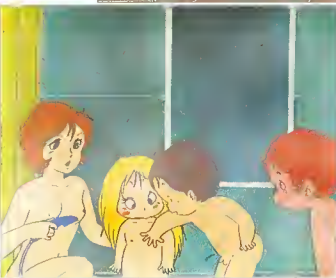


セイラの入浴シーン (37話)

連邦軍はソロモン攻略戦に勝利を収めた。ホワイトベースは脱出した敵艦の掃討作戦につき、セイラ達パイロットも少しの休息を得た。しかしそれも長くは続かず、総員集結の号令が鳴り響く。目にもと隊の残り少ない残存兵力を全て結まらぬ早さでバスルームを体集した。カーゴのバスルームから出てきたハモンは大きな私室の中らがつぶやく。「命びろいので、今やたった一人でとり残されたのいいおフロだったのだからのぞくその表情には断固としり入つていてよ、セイラさん……オネガイ！」



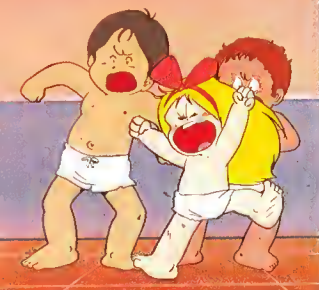
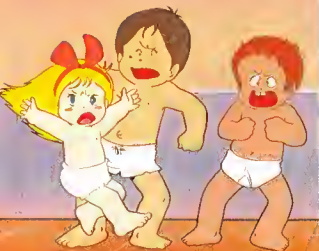
オマセなカツとレツ (22話)
「キッカもお姉ちゃんも同じ女だろ。なのになぜキッカはベツタンコなんだ？」(ミライ)。
「カツ」(カツの台詞より)
こんな時には見るべきものはちゃんと見て、くらべるべきところはちゃんとくらべているんですね。ただキッカとフラウの胸をくらべるのはチト醜ですね。
「オマセ！」(フラウの台詞より)





シャワーを浴びるシャア（6話）

ガンダムの本編中、男性の裸体が描かれたのはシャアのシャワーシーンのみだ。当然飯面もはずしてアセを流しているわけだが、意外と無用心で部屋には鏡がかかっておらず、その間にガルマが部屋に入ってくる。「二三言、ことばをかわしたガルマはシャアの「おれも協力する……友の手助けができる」とは、こんなうれいことはない……」というセリフを信じてすぐに部屋を出ていった。しかしシャワールームから出てきたシャアの目には謎めいた光が宿っていた。



海水浴をするカツ、レッツ、キツカ（13話）
遊びざかりのカツ、レッツ、キツカにとつて、ホワイトベースの中は狭すぎる。生まれつて初めて本物の海で泳いで大はしゃぎ。ここでなら思いきり遊んでも誰にもしかられないもんね。三人共水泳の素質は生まれつき充分だったらしく、実に見事な泳ぎぶりをみせてくれました。もしかしたら、サイド7にプールが何があったのかな？ でもサイドでは水は貴重なはずだしね。



水着姿のセイラとミライ（13話）
「太陽の光が一個所からくるってわざとらしいわね」（セイラの台詞より）
ホワイトベースは日本の、とある海岸でしばしの休息をとった。ビーチパラソルの下で体を休めるセイラとミライ。ふとセイラがもらったセリフを受けてミライもつぶやく。
「でも、これが自然なのよね……」
しかし、それにしてはサングラスをかけたセイラはどうも何となくシャアに似ているなあ。（当然かな？ 兄妹だもんね）それとどうしてミライはピキニなのにセイラはワンピースなのかなあ。



水着姿のカイ（13話）
「ヘッ、裏切られたな。奴（アムロ）もエリート族かよ」（カイの台詞より）
カイさん、ちよつとくだらない事でいじけてないで早くどいてくれないかなあ。セイラとミライの水着がよく見えないじゃないですか。チビちゃん達と一緒に泳ぐか、リュウウやハヤト達と柔道でもしてた方が健康的よ。



身体検査をいやがるハダカン
ボの三人（29話）
連判軍本部ジャブローへ着いたホワイトベースの乗組員たちは、身体検査を受ける事になった。しかしカツ、レッツ、キツカの三人組はそれをいやがってパンツ一丁で逃げまわった。カツとレッツが、「この体のどこが悪いっていうんだ!!」と大声で抗議する。キツカもそれに加わって「そうだ、それに加わって「イヤハヤ……」でも三人は一枚上手の女医さんの手によって結局検査を終了し、結果は……勿論異常ナシノ



ガルマとイセリナキのキスシーン (10話)

ニューヨーク市のパーティ会場のテラスでお互いの想いを確かめあうふたり。若さゆえに真実であり、情熱的であつたふたりの恋は、その背後にからむ様々な人間の立場や、陰謀の中にあつて、あまりにも激しく素直に燃え上がつてた。しかし、それゆえにこのふたりへ与えられた結末はその身を死へ至しめるのみであつたのだ。純粋な恋を語りあうふたりの姿はさながら古典劇のロマンスをみるようだ。



出撃前のキスを交すラルとハモン (12話他)

ガルマの仇討ち部隊として地上に降りたランバ・ラル隊の隊長ランバ・ラルは、新型モビルスーツ「グフ」に自ら搭乗し、ホワイトベースに闘いを挑んできた。夫の出撃を控えてラルの妻ハモンが、「やはり指揮官らしくおさまっているあなたに、こうやつて出撃なさる時のあなたをみる方が好きだわ。」それに答えてラル、「私もそうだ。この方が似合っていると思つて」に続いてハモン、「出撃前のキスを贈る。まるで洋画にも出てくるような職業軍人の夫婦だった。」



幼い頃のアムロと母さん (13話)

「……ごめんねアムロ。あたしは宇宙の暮らしてなじみもなくなくてね。」(カマリアの台詞より)

わが子に建設中のスペースコロニーの姿をみせておきたいと願う父につられて、地球に残る母と別れて暮らす事になった幼いアムロ。数百年に地球の美家を訪れたアムロの脳裏に幼い頃の思い出が鮮かに甦る……。母さんのキスはすぐくつたかったなあ……。



ミライとスレックのキスシーン (36話)

ソロモン攻略戦のさ中、ミライは自分の気持ちを素直に見い出すことができた。ホワイトベースに一時着陸したスレックのものとへと彼女は走る。スレックはそんなミライの心を察せないヤボな男ではない。が、「オレは少尉の好意を受けられるような男じゃあない」と拒むような態度を示す。その時ホワイトベースは敵の攻撃を受けてゆれ、ふたりの男女の体は接近した。お互いのくちびるに暖いものを感あうふたり……。



ラアとシャアのキスシーン (41話)

いよいよホワイトベースの隣に艦隊特攻をかけるべく、エルメスのラアが前衛となつて出撃する。ラアは何やら不吉な予感を感じ、シャアにノーマルスーツを着用しての出撃を要請する。シャアは「ラアがそういうのなら……」と答えはしたものの、ほとんど聞き流すようにして、ラアの顔を自分に近づけると、唇を重ねた。シャアの去つた後、ラアはぬくもりを確かめるように指を唇につつとそえるのだった……。



フォークにビククリのリユウ (4話)

ルナツーの電源部分がシャアのノーマルスーツ特殊工作隊によつて破壊された！ 遠心重力装置もストップしてしまい、ルナツーは突然無重力状態となる。おりしもホワイトベースとガンダムを勝手に使用したかどで拘留されている少年達は食後だったが、急に人間も食器もバラバラを失ってしまった。フォークが目の前にとんで壁につきささつたのを見て、さすがに仏頂面のリユウもマツ青！



フラウ・ボウのアッカンペー (9話)

「あなたはエスパーかもしれない……」。と、後にして思えば、大きく意味を持つてくる言葉を残して去つたミデア輸送隊のマチルダは、アムロにとって初めて女性の香りを感ぜさせてくれた女性だった。彼女にインギンに敬礼を返すアムロ。そんなアムロに女の直感でただならぬ緊張感を感じたフラウ・ボウ。マチルダがエレベーターに消えるやアムロに向つてアッカンペー。乙女心は複雑なよネ。



間男のいる情景 (13話)

傑作として名高い「再会、母よ……」のラストで、アムロとカマリアが別れるを交すシーンでの一カット。カマリアのバックにとまてくくさうな男がじつと2人のやりとりを見ている。この男こそ実はカマリアの「間男」(ハムロ)が結局仲間達のもとへ戻つたように、母にも母の人生のある事をさりげなく示してみせてくれた名シーン。



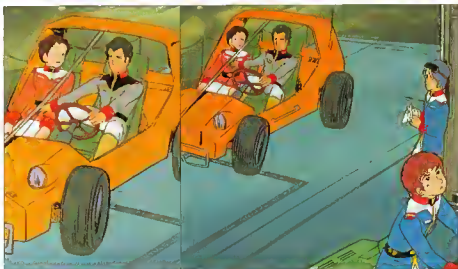
下着姿のアムロ(15話)

ポイント305の島へコアファイターで向ったアムロは島で一機のザクと遭遇し、やられてしまった。アムロが次に気がついた時そこは小屋の中だった。しかもランニングとパンツだけの下着姿。(アムロは綿のガラパンを愛用しているのだ。下着姿は1話でも披露している) 気をとりなおしたアムロは小屋の外にとびだし、そこでロラン・チュアインという少女に出会った……



ジオンの探掘基地をのぞくフラウ(18話)

フラウちゃん、わー！ すばらしい力です。ホワイトベースを脱走したアムロを追ってきたフラウ・ボウがアムロの発見したジオンの探掘基地をのぞくと、驚いたガンダムの手的小指をこじあけるシーン。ガンダムの指の関節は、女の子にも持ち上げられるほどスラムズに動くのだ。モビルスーツと人間の大きさの対比がよくわかる場面だ。



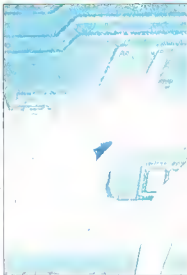
ムツツリスケベのフライト(31話)

ホワイトベースはジャブローで、正式に連邦軍に編入された。第13独立部隊——これが彼らに与えられた名称である。しかし早い話がまたオトリ部隊である事にかわりはなかった。会議も終え、バギーをホワイトベースへ走らす車中でフライトの欲求不満はついに屈折した形で爆発した!? フライトの手はミラの胸にのび、しだいに下の方へと……。ラインチャット。これはノーマルなスピードで描かれた作画の某氏(正確に誰かは不明)によるオアシスの一つである。ゆえにフライトの人間性その他は一切無関係ですでおまちはいなぎきように……でも意外とミライに婚約者(カムラン)がいた事を聞いた後だったのでツバをつけておく意味もあったりして……



ふたりのセイラ(20話本編と19話予告編)

この二カットのセイラの表情、似ていると思われない? バックにブルーのスクリーンパネルのある方のセイラは、20話「死闘! ホワイト・ベース」の本編で、ランパールの壮烈な死に様を目撃したセイラが、驚きに目をみはって、涙をふせるシーンで、もう一つの赤い心理効果の線がバックに入っている方のセイラは、19話の最後で20話の予告編に、同じシーンとして放送されたもの。各話の作画プロダクションが異なること、こういう事も、絵描きが変わると、ずいぶん絵も、それを見た印象も違ってくるものですねえ。物好きな人は、それぞれの絵描きさんが誰かも当ててみる?



ふきとんだキシリアの首(43話)

最終回、ザンジバルでア・バオア・クーから一人逃げようとするキシリアを、シャアのバズーカ弾が撃ち抜いたシーン。イヤハヤなんでもおぞましい……。首が見事にふっとんでいったんですねえ。……実はこのシーンには二ばれ話があります。このシーンはラッシュウの時にはもつとはっきりと見えただけです。でもあまりにもドギツイという事で白く光らせたんだとか……。



宙に舞うキシリアの胴体(43話)

バズーカで首をふきとばされたキシリアの体も当然反動で、ザンジバルのコクピット内にくずれ落ちたのであるが、次のカットではナント、キシリアの足首が宙に舞い、また次のカットでは、キシリアの骨と内臓のみえた胴体が画面を横切ったのであります。まあ、つまりキシリアの最期はバラバラだったんですねえ。このカットはいくらでもなく後者の胴体の方であります。あらまうよくみて、気分を悪くしないように……。



エドウィン、ダイターン3から出張（14話）

「ジオン公國の勝利を折つて」といって、ステッキから花を出し、その花の中からハトを出すマジックを披露した奇術師エドウィン。彼は「無敵鋼人ダイターン3」のエピソード27話「遠き日のエリス」に登場したゲスト、コマンドー・エドウィンである。今回はジオン軍の前線基地に配備された若い軍人達のキャンブを訪れる船間奇術師の役である。もっとも軍人たちにはヤジられどおしだった。



ルバン三世、ノーマルスーツを着る（31話）

巨大な戦場の持ち受ける宇宙へ再び発進するべく、ホワイトベースのドッキングロケットが解除された。ジャブローの整備員が解除OKの合図をおくる。おや……ちよつとまでよ……。この2人の整備員の顔はどこか似たことがあるぞ……。あつ、そうだ。ルバン三世と次元大介のコンビじゃないかノ。これも作画のオアソビだけれども、もしかしたらルバンと次元の子孫……カモノ？！



宇宙とぶ鉄人28号（43話）

ライディーンやダイターン3などと共に、再び宇宙にその勇姿（少し小さいけど）を現したのは、博物館から狩り出された（？）鉄人28号！（モチロン元祖の方だよ）操縦しているのは、やはり金田正太郎君の子孫でしょうか。ガンダムとジオングの緊迫した闘いのさ中、やはり目にも止まらぬスピードで、画面を飛び去っていったのであります。



地球に帰ってきていた破嵐万才!!（14話）

「おもしろくねえよ」と仲間たちがやじっているエドウィンの奇術を、実におもしろそうにながめている一人の男。この男こそ何をかきそう「ダイターン3」のヒーロー、破嵐万才だノ。幼き日に夢を与えてくれたエドウィンのマジックを再びみるためにジオン軍に入隊したのか？ だけどそうすると後にダイターン3が連邦軍のモビルスーツ隊にいたのはおかしいなあ。うーん……。



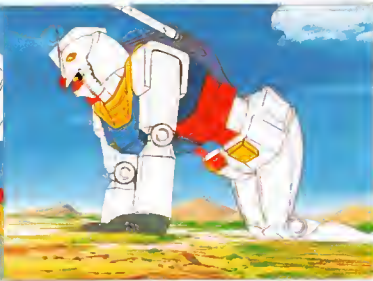
カム・ヒア！ ライディン&ダイターン3（35話）
新兵器ソーラー・システムによって、戦況に突如として開いた連邦軍は、ジオンの宇宙要塞ソロモンに、モビルスーツの大編隊を出撃させた。GMやボールに交って飛んでいるのは、ライディーンとダイターン3。（どこにいるかは自分よく見て探してね）地球の危機を聞きつけるやいなや、自らの使命感に目覚めて戦線に加わった（？）そうです。よく目をこらして見れば、まだ何か飛んでいるカモノ！



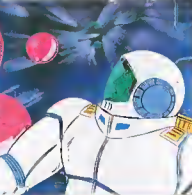
階段をのぼるハロ（1話他）

ボク、ハロ。ボク、カイダン、ノボルノハアンマリスギヤナインダ……。ケツコウ、モーターガイタムシ、アシムスベルンダモノ……。ダカラ、ボクドチラカイト、カイダンハ、オリルボウガイナ……。ダツテソノボウガシヨウエニモナルシ、ナントイッテモ、ソノボウガボクニムイティルンダモノ……。ネエ、キミモソウオモウデシヨ。ボク……。ハロ……。ボク、キヨウモゲンキ……!!

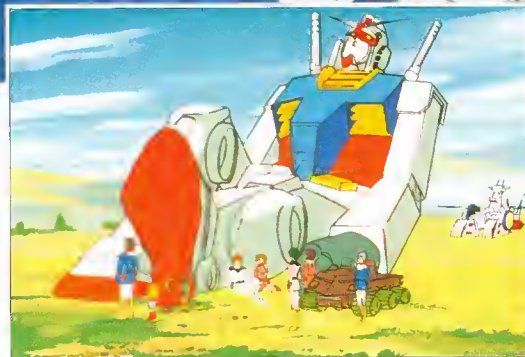
コアファイターを離脱するガンダム（15話）
 ガンベリイからのガンダムの空中機転の練習の後、アムロにコアファイターでの偵察命令が下った。地上に四つんばいになったガンダムの上半身がはずれ、コアブロックが下半身から離脱する。コアファイターが飛び去った後、ガンダムパーツを収容しながらガンベリイを操縦するリュウがつぶやいた。
 「まったく……ガンダムのこんな姿、みたくもない……」



応急ウオール・フィルム処理（2話他）
 流星やスターダスト、そして戦術による外傷をコロニーや宇宙船が受けた場合に用いる壁面補修用特殊フィルム。その取り出し口からは風船状の形で放出され、傷ついたコロニーや宇宙船内部の空気流出とともに被損箇所へ流され、亀裂に触れると共に割れて瞬時に凝固する。これによってそれ以上の亀裂と空気の流出を防ぐことができるが、あくまで応急のものであり、後に完全な修復を必要とする。



巨人ガンダムと小人のクルーたち（14話）
 ガンダムと人間の大きさの対比がハッキリとわかるシーン。こんな場面をみると、やっぱりガンダムは「ズーツ」というより、巨大ロボット。と呼んだ方がふさわしいような気がします。さらされます。それにしても、何ともほほえましいフインキの漂うカットではあります。か。（ストーリーの前後はこの際無視して）あのガンダムのリラックスしたポーズと、その下にむらがるホワイトベースのクルーたち。まるでガリバー旅行記でもみるような感じ。遠くにあるホワイトベースが、本当に「木馬」そっくりで、なんだか巨人（ガンダム）の乗る木馬みたい……



PRESENT FROM FAN

ファンからの贈りもの

マチルダ・アジャン
着せ換えセット（アップスケール）

○日本サンライズ第一スタジオには、放映当時からガンダムファンのプレゼントが数多く届けられていました。小さなもので紛失してしまったものもありますが、終了後も保存されているスタッフお気に入りの品を紹介してみましよう。これらの品は手紙やファンジンと同じようにスタッフを励ましてくれたそうです。

（品物だけを保存していたので贈り主が不明になってしまいました。贈り主の方はサンライズ企画室まで連絡して下さい。）

企画室・飯塚あて。）

このボードは、1スクの人気者でした。
マチルダ変身セットとも呼びましようか。

☆ちょっと服をかえて
みましようか。
どの服もマチルダに
ピッタリ(?)

これが水着の下の本体です。

下着姿です。（ドレスかな?）

本編に登場したマチルダ。どういうわけかこの服はセットに入っておりません。



海のマチルダ！



ドレス姿です。(カツラ着用)



信じられないでしょうが、ガンダム放映中に富野氏が着用された服だそうです。どの服もうらおもてがあるんですよ。

まさかと思う着物姿。



マチルダ・アジャン 愛をうたう

第一回 リサイタル

中野実アラン



企画 中野実

演出 中野実

マチルダ・アジャン 愛を歌う

第一回 リサイタル

演出 中野実

リサイタルセット

このポスターとパンフレットは実物大の大きさで、1スタに長い間かざられていました。



♡一瞬、安彦氏のイラストかと見あやまるようなパネルです。



歴史の古いなる魂火の中の

星々のほろろと燃える

ひとりひとりの人間が

それを見るものがあるはずなのに...

それは 夢や希望の光をたどるうちに

人を驚かす時 心と魂と流れる

——星々の光を——それは一瞬の魂火に燃える

がいて 星々の 魂の光を意味するものをい

それは 夢や希望の光をたどるうちに 夢や希望の光を

心と魂と流れる 心と魂と流れる

K.T

※説明文がうら面に
書いてありました。

◇ファンジンの中には二色や四色カラーで印刷されたものも (P199参照)

広島
ガンダム
F.C
1979.7月

※説明の必要もない巨大おしゃもじノ



★ガルマ・ザビ一周忌に贈られた紫色の千羽鶴
グラデーションがみことです。

祝
日本サンライズ
機動戦士
ガンダム放映

宮島

《コアファイター、ちゃんとコアブロックに変型できます。



アイキャッチャー、パターンI

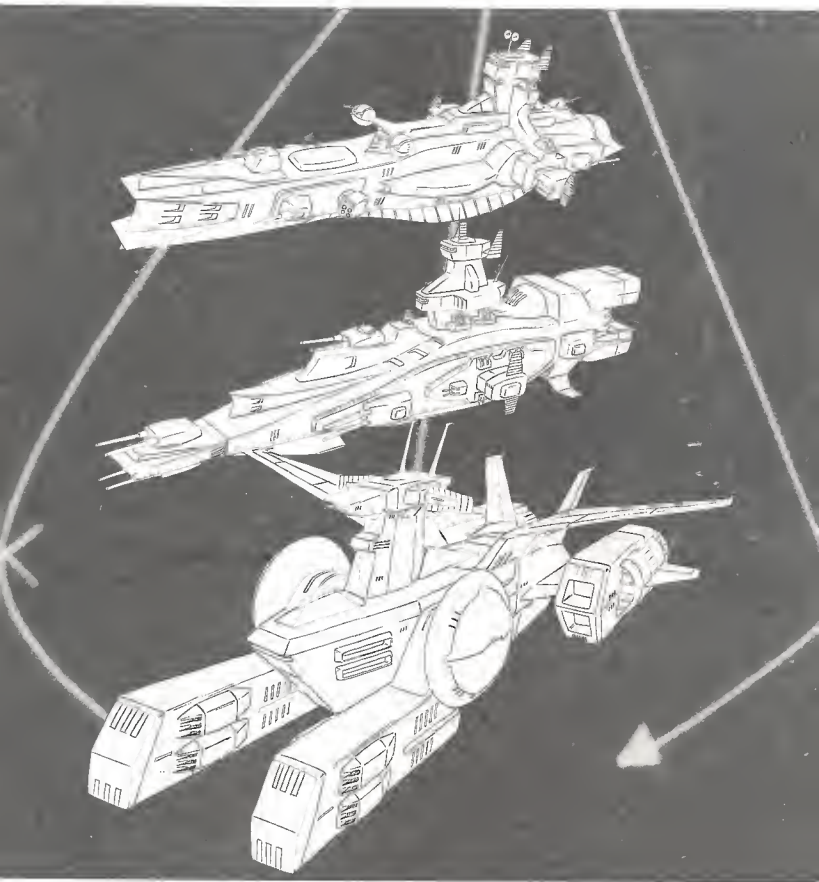
I話から11話まで中CMを間にはさむアイキャッチに使用された。光が走るようになったのは3話からで、初めの頃は最後のタイトルのみであった。なお第1話だけはBGMも2話以降のものとは異なっている。黒地に白いGマークが印象的な、力強くスマートなアイキャッチャーだった。12話からはパターンIIのアイキャッチに変更されたが、最終回ではこのパターンIを再び使用した。

アイキャッチャー、パターンII

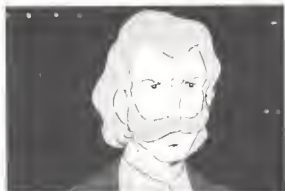
12話から42話まで使用されたアイキャッチャー。ガンダムがビームサーベルを抜く動作をバウフルに表現している。Aパートの終わりを示すアイキャッチャーは、ビーム光が十文字状に閃くところから始まり、Bパートの始まりを示すアイキャッチャーは、つかの部分がみえる所から始まる。最終回で使用されなかったのは、ストーリー的にガンダムが破壊された後という事を考慮してのことだろう。



設定・資料編



●人物設定 1



●フラナガン博士〈37話〉

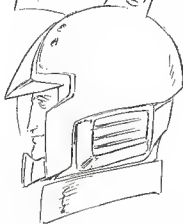
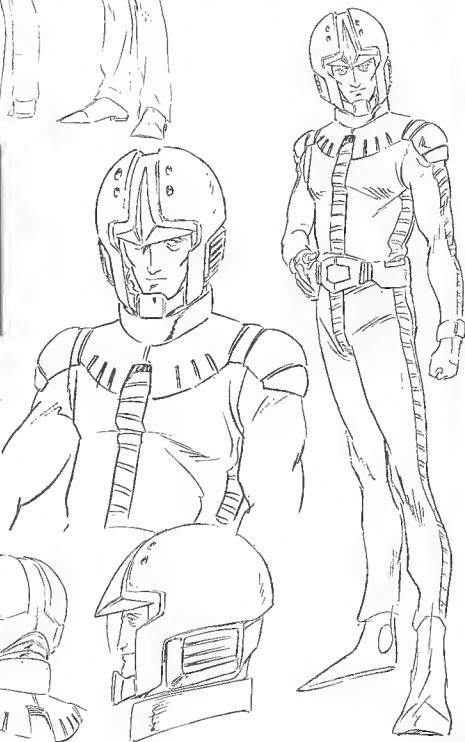
ジオンのニュータイプ研究機関であるフラナガン機関の責任者。ブラウ・プロ、エルメスの開発者でもある。



●マ・クベ(戦闘服スタイル)〈39話〉

専用に開発されたモビルスーツ、ギャンに乗った時のもの。巧妙な作戦でガンダムに挑むが、つけ焼き刃的技術のマ・クベでは、アムロにかなうはずもなかった。

北宋の壺を死ぬまぎわまで忘れなかったくだけは、狂気じみたものを感じさせた。





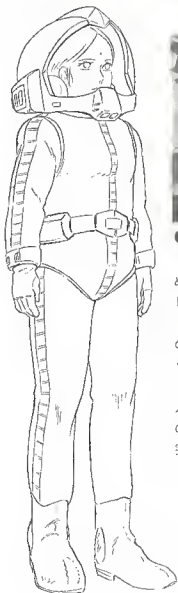
●バロム大佐<38話>

ジオン宇宙軍大佐。ホワイトベースと膠着状態にあったデラミン艦隊の救出に向う途中、ワッケインのマゼラン艦と接触、砲撃戦の末敗れた。



●デラミン艦長<38話>

マ・クベ艦隊、チベの艦長。ホワイトベースと対立していたが、救援に来たバロムの危機を知り、急速発進したところを集中攻撃されて全滅した。並段慎重な分、速断が身を滅ぼした人。



●ラファ・スン(軽装宇宙服)<39話>

エルメスに搭乗する時着用したもの。大きなヘルメットはサイコミュ用で、これを通じて脳波をビットに送り自在に攻撃をかける。

アムロとの意識の邂逅は、新しい人類の姿の象徴だったが、ラファはシャアを慕うあまり、ガンダムに闘いをいどむ。

そしてアムロとラファの意識が時を越え、人類の未来をかいま見たときには、エルメスのコックピットにガンダムのビームサーベルが突き刺さっていた。

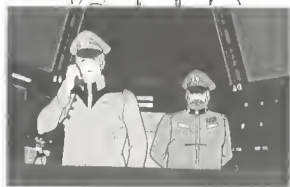
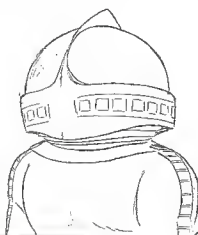
●ラフ・スケッチ





●シャリア・ブル大尉（軍服、ノーマルスーツ）〈39話〉

本来は木星から重水素を運搬するエネルギー船団の指揮官であったが、眠っているニュータイプの素質を買われ、ブラウ・プロをまかされた。ニュータイプの力を発揮し、ガンダムに善戦するが、アムロには勝てなかった。



●連邦軍士官〈39話〉

ソロモンを制圧した際、基地司令官として着任した人。





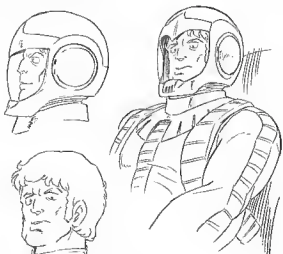
●モスク・ハン博士〈40話〉

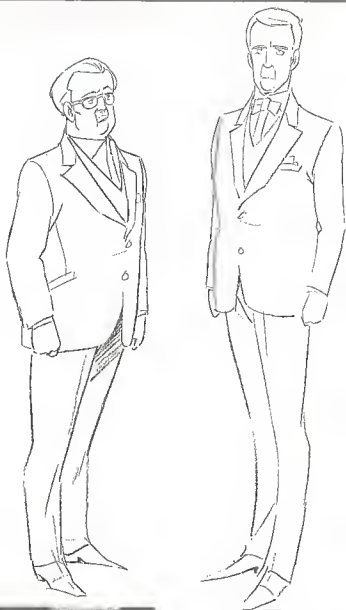
電磁工学の新鋭。ガンダムにマグネットコーティングという新しい技術をもたらした。アムロに「君は死んでもデーターだけは届けてくれ」と本音を吐いた。



●バタシャムとその同僚〈40話〉

ドムのパイロット。ララの援護が役目だがエルメスの働きにコンプレックスを感じ、途中で任務を放棄した。典型的一般人。





●ジオンの老人〈40話〉

ジオンのコロニー、マハルの住民。強制疎開で子供と離れ離れになり、それを訴えたため兵士になぐられてしまった。



●カツ・レツ・キッカ（ノーマルスーツ）〈42話〉

ア・バオア・クー進攻に際し、特別に作ってもらった子供用宇宙服を着ているところ。



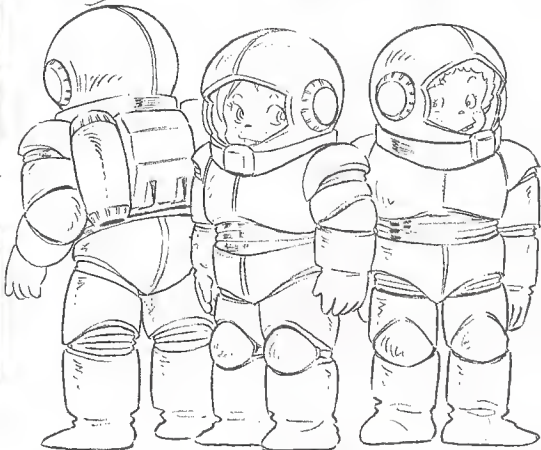
●アサクラ〈41話〉

ジオンの技術士官、ソーラ・レイの担当責任者。



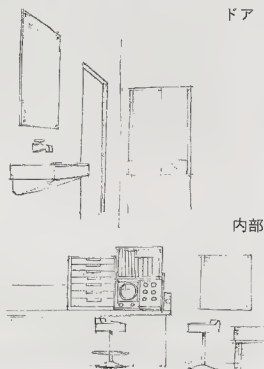
●トワニング將軍

ア・バオア・クーの將軍の一人。ギレンを殺したキシリアを助けて脱出させようとした。



●医務室〈37話〉

ホワイトベース乗員の簡単な健康診断を行ったりする。担当はサンマロ。



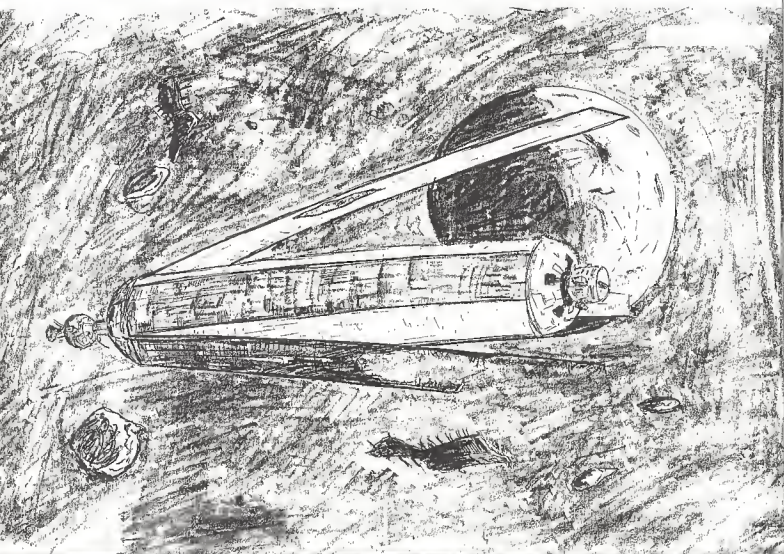
●美術設定 1

●ホワイトベース バスルーム〈37話〉 重力ブロック内にあるバスルーム。

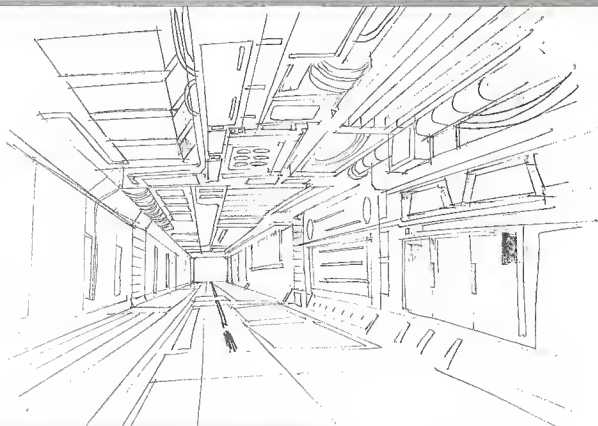


●テキサスコロニー（外観）〈37話〉

もとは観光、牧畜専用のコロニーだったが戦争の余波でミラー調節がきかなくなり、8ヶ月以上も夕暮れのままで、内部は砂漠化が進んでいる。管理の役人しかおらず、無人コロニーに等しい。



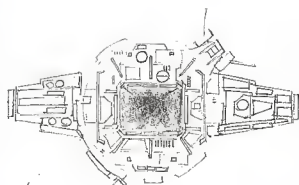
● 港内



● 内部

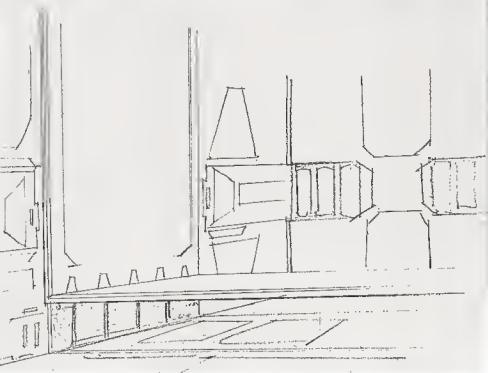


● 港外観



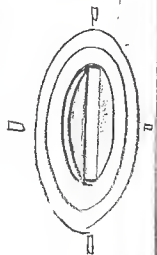
●ハッチ

コロニーの空気を逃がさないため、港には4重ものハッチがある。



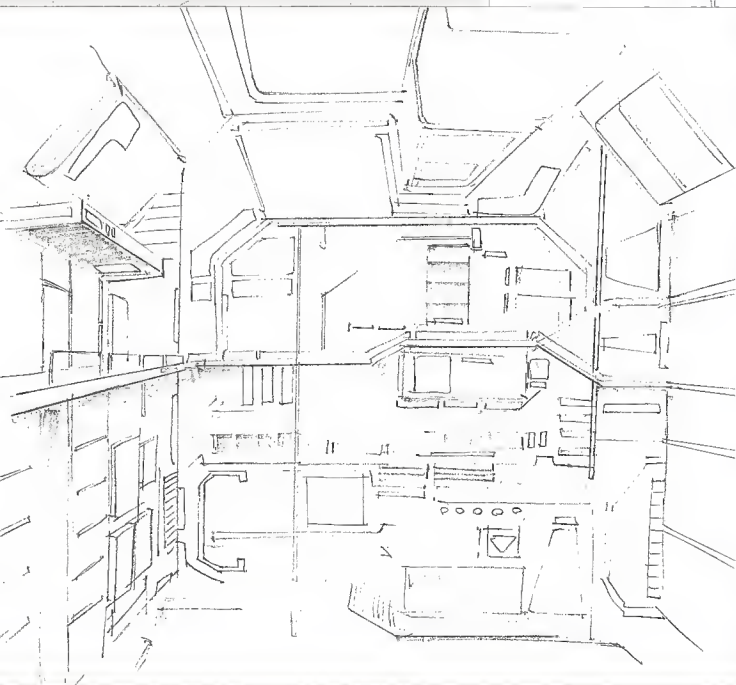
●美術設定2

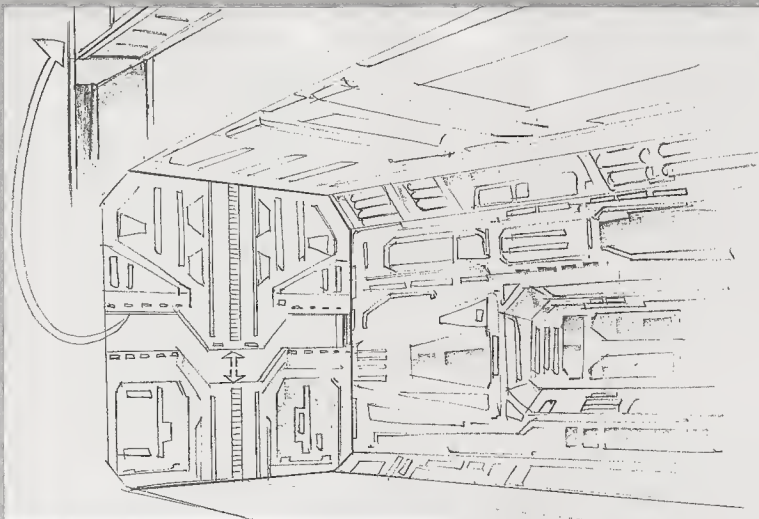
●
ノブ



●港内部 (37話)

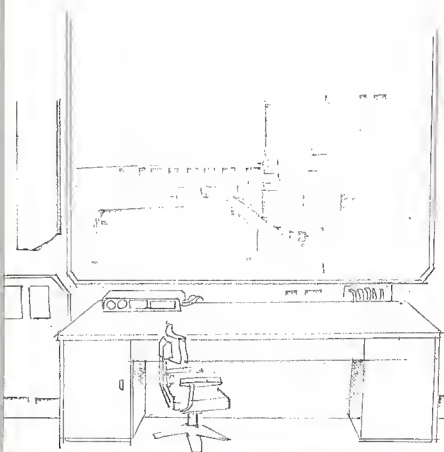
ホワイトベースが停泊している港の反対側でザンジバルが停泊していた港の内部。





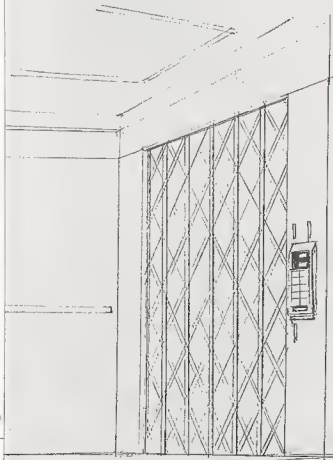
●監視所〈37話〉

港に出入りする艦の監視所だが、だれもおらず、荒れほうたいになっている。



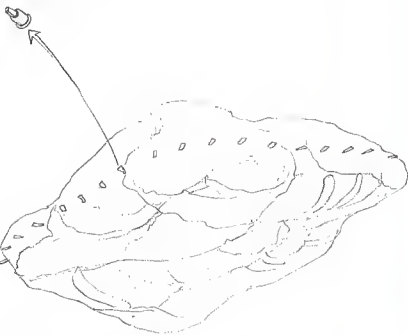
●エレベーター内部〈37話〉

コロニー内部の地表から港まで通じているエレベーター。



●爆弾つき岩塊 <37話>

浮遊岩塊に信管と爆薬を取りつけたものでガンダムを誘いこんで爆破しようとした。



●美術設定 3

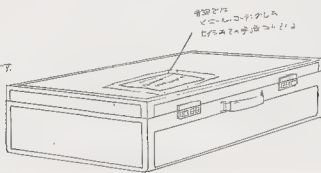
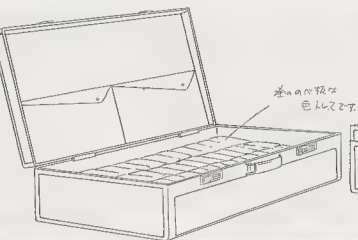
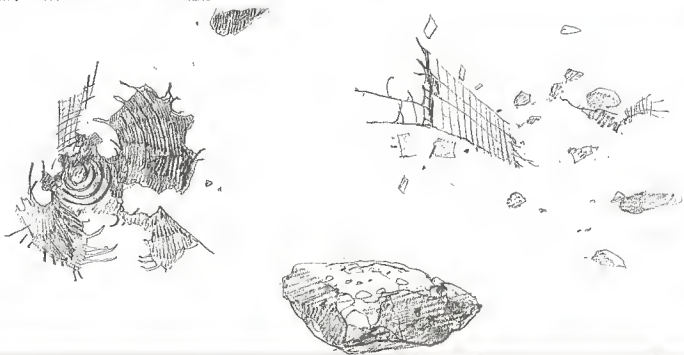
●マ・クベの壺 <37話>

マ・クベが室のようにしていたもの。



●コロニーの残骸 <38話>

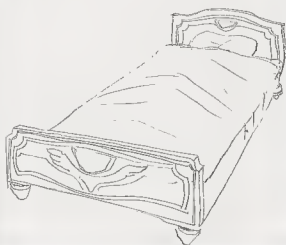
戦争で破壊されたコロニーの残骸。



●金塊の入ったトランク <38話>
セイラあてにビニールコーティングした手紙をつけて、シャアがテキサスの港に置いていったもの。中には多量の金ののべ板が入っていた。

●ジオンのベッド〈38話〉

ジョン・ズム・ダイクンの臨終の床となったベッド。



●ジンバ・ラルの家〈38話〉

ジンバ・ラル夫妻が幼少のシャアとセイラをマス名で育てていた地球の家。



●テキサス内の牧場〈38話〉

今は無人となっているレジャー用牧場。

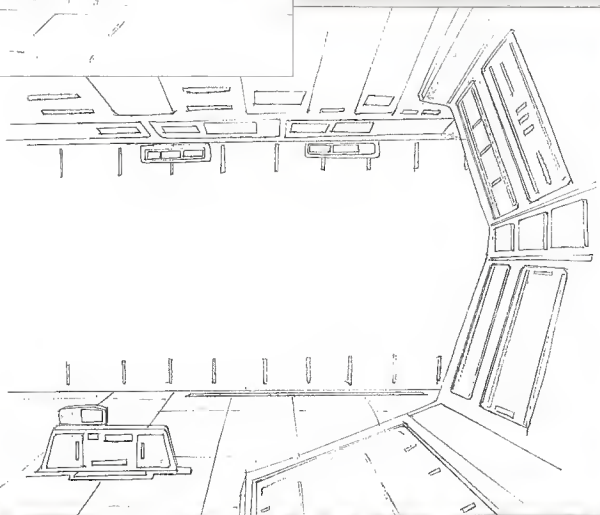


●ザビ家、ギレンの部屋〈39話〉

サイド3内のギレンの執務室。シャリア・ブルに戦闘におもむくように命じた部屋。



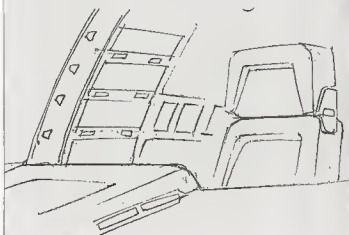
●グラナダ基地 宇宙港〈39話〉
空母ドロスが着陸した港。



●美術設定4

●ブラウ・プロの砲主席〈39話〉

ここからサイコミュを通し、4つの砲を自在に操縦する。

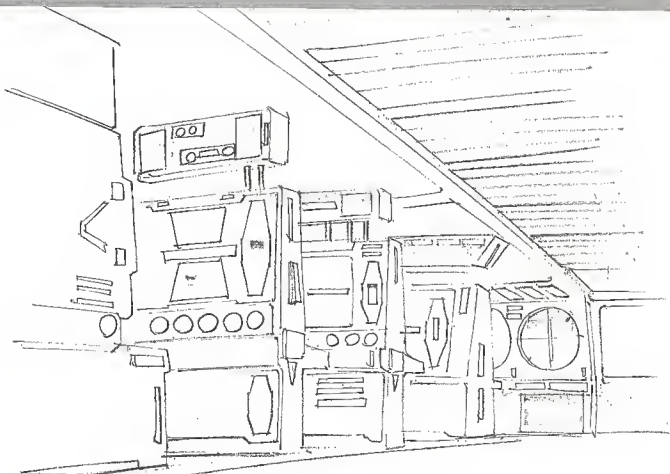


●操艦席

ブラウ・プロ本体はここで操縦される。

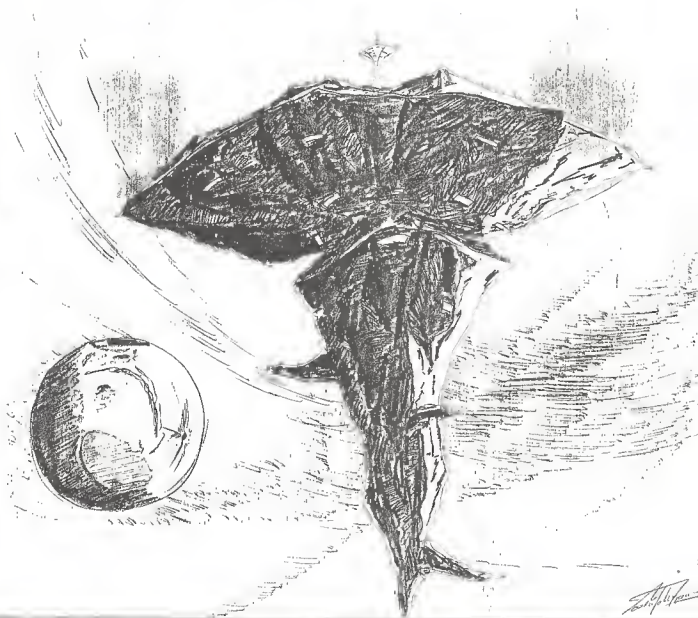


●管理装置群
〈39話〉



●ア・バオア・クー
〈40話〉

ジオンの宇宙要塞。ここと月のグラナダ基地を結ぶ線はジオンの最終防衛線になっているため、その分この軍事力は強化されている。連邦との決戦の舞台になった。

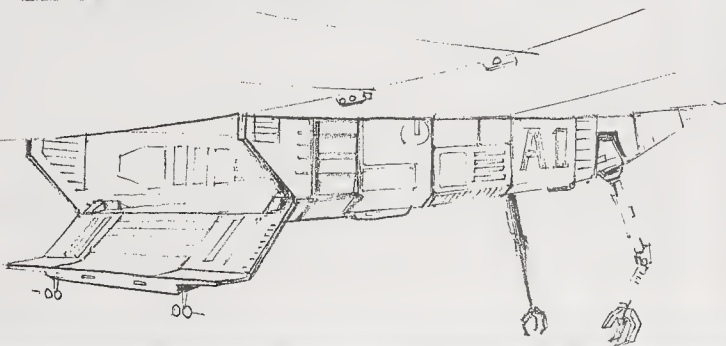


●ジオンのスペースバスの入口〈40話〉

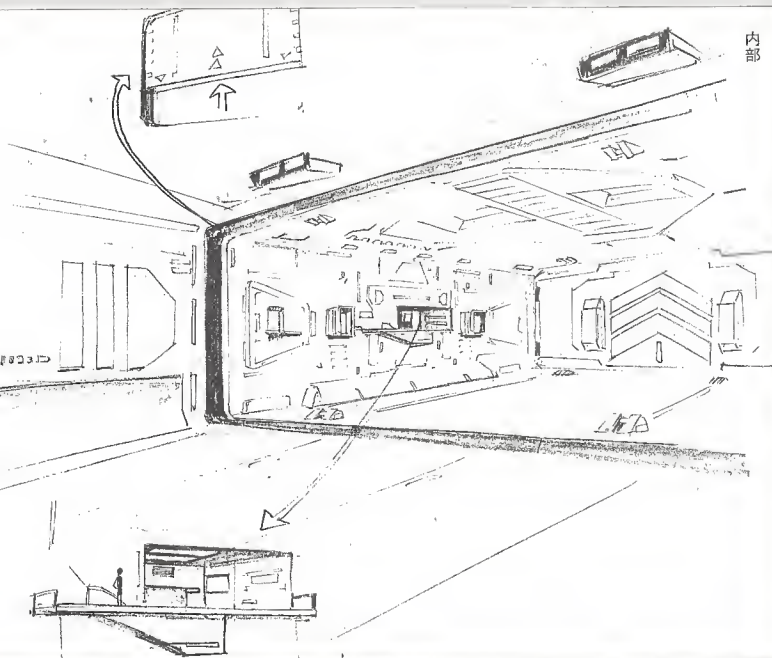
スペースバスの乗り場。コロニーの回転でバスを飛ばすもので、
近距離の移動に使われる。このような発着港は、コロニーの外壁面にいくつか作られている。

●美術設定⑤

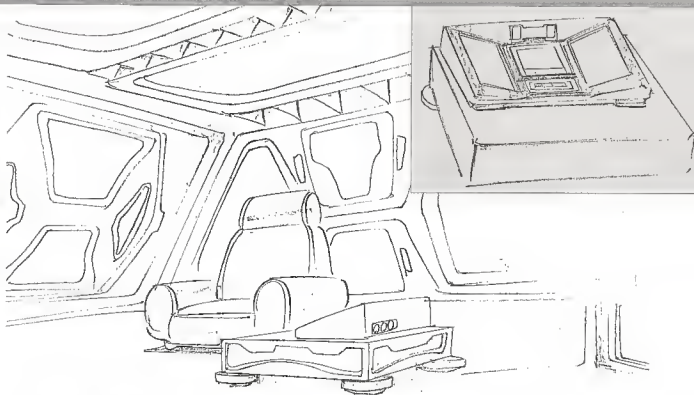
外
観



内
部

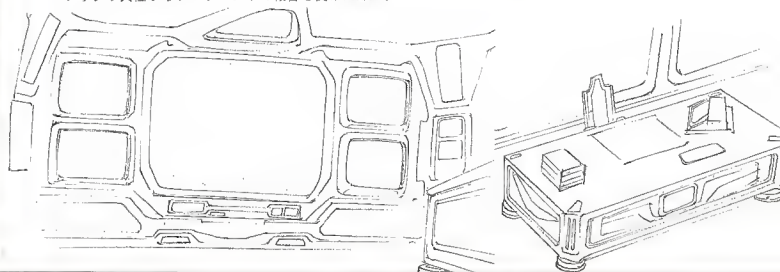


●グワジン内、デギンの居間〈41話〉
グレート・デギン艦の居室。横にビデオコーダーが置
いてある。



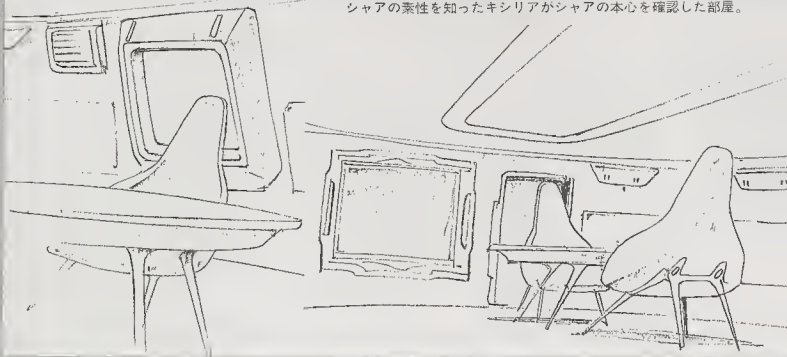
●ギレンの執務室〈41話〉

アサクラ大佐からソーラ・レイの報告を受けた部屋。



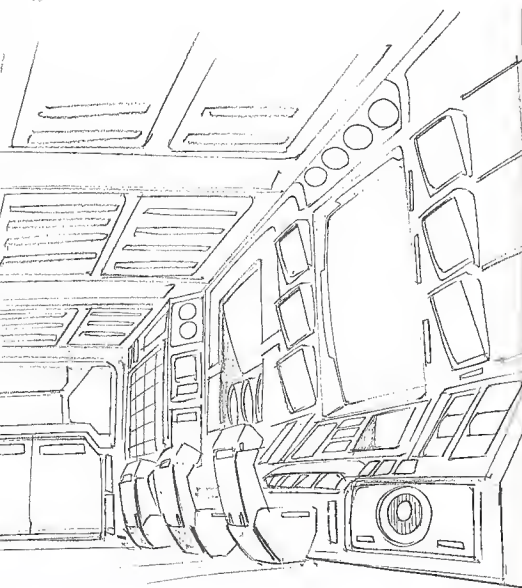
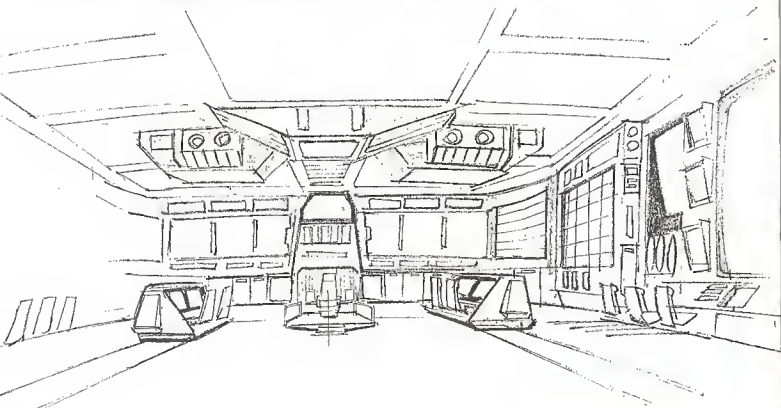
●グワジン内、キシリアの個室〈41話〉

シャアの素性を知ったキシリアがシャアの本心を確認した部屋。



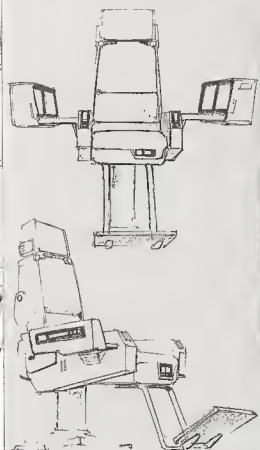
●ア・バオア・クー ギレンの司令室〈41話〉

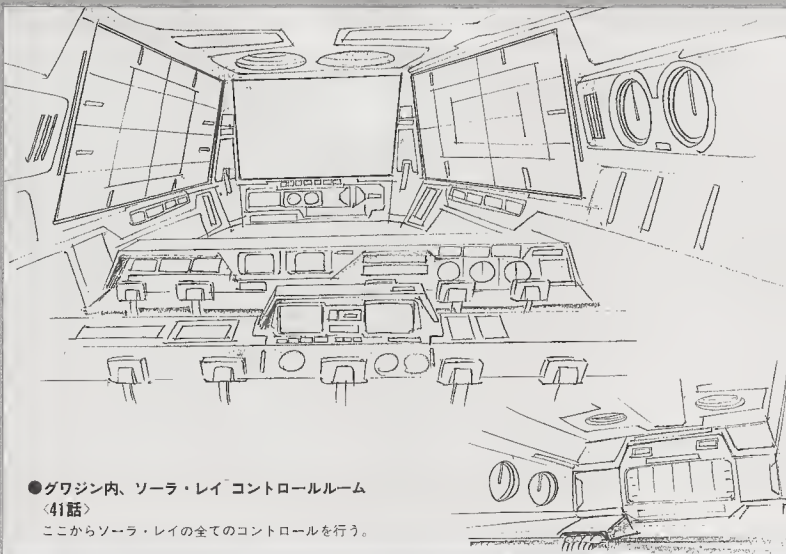
ア・バオア・クーの中枢部。ソーラ・レイ発射もここから監視していた。



●美術設定 6

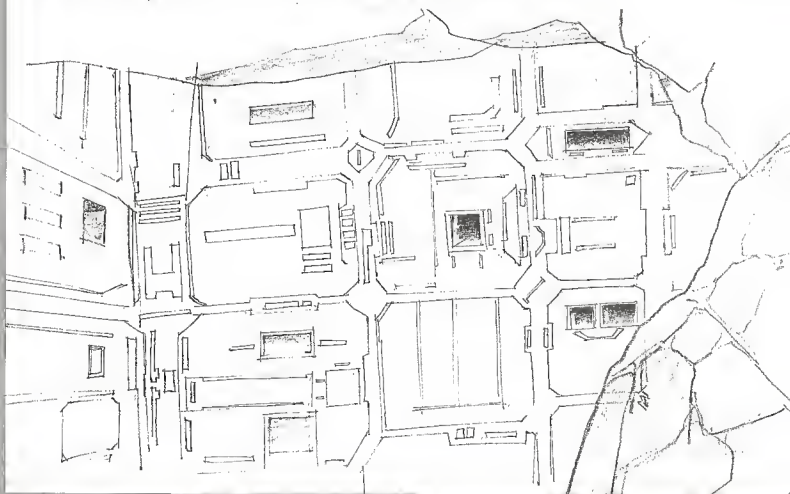
●ギレンのイス〈44話〉



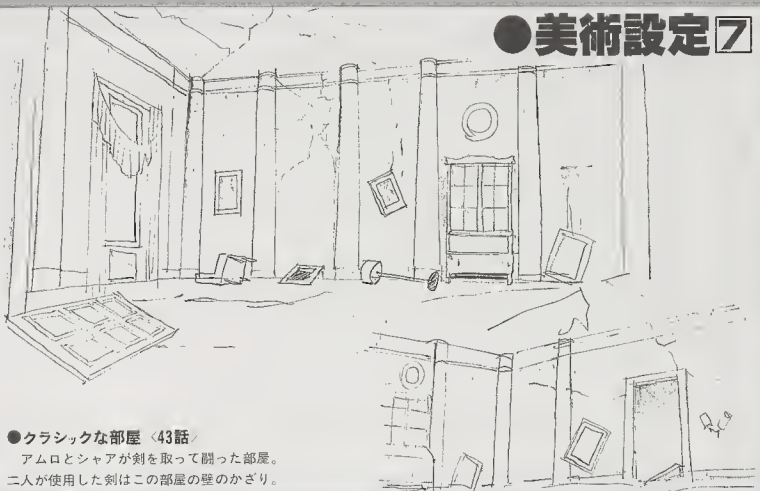


●宇宙港 <43話>

エンジンを切り離れたホワイトベースが不時着した場所。壁面に多数の通路がある。



●美術設定 7

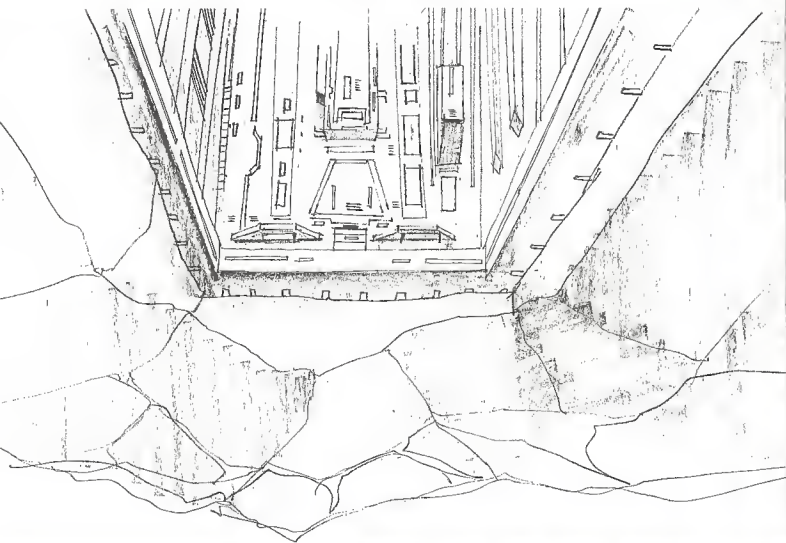


●クラシックな部屋〈43話〉

アムロとシャアが剣を取って闘った部屋。
二人が使用した剣はこの部屋の壁のかざり。

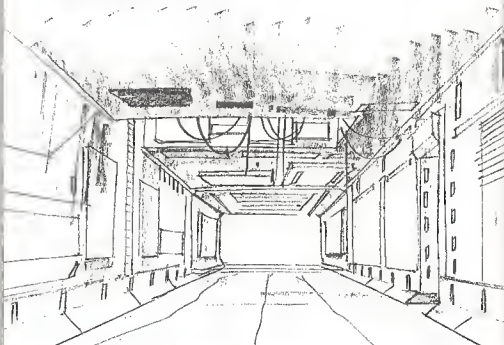
●ガンダムが半壊した通路〈43話〉

ジオングとガンダムが相討ちになり、相方とも稼動不能に陥った場所。



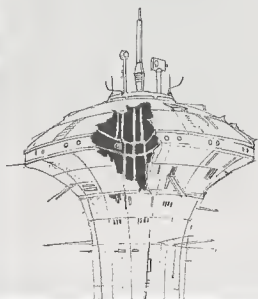
●通路〈43話〉

アムロとシャアが出会った所。

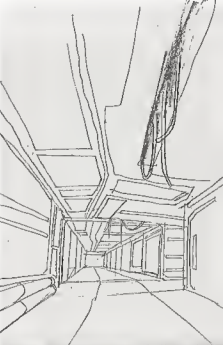
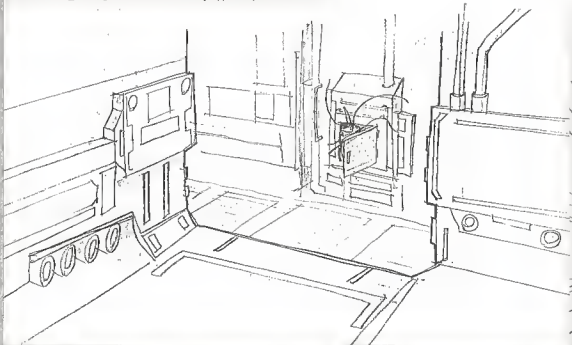
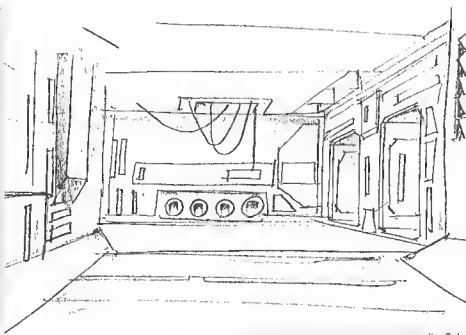


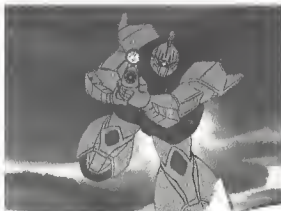
●ア・バオア・クー セントラル
タワー〈43話〉

ア・バオア・クーの上部にある監視塔。



●セイラが侵入した通路〈43話〉



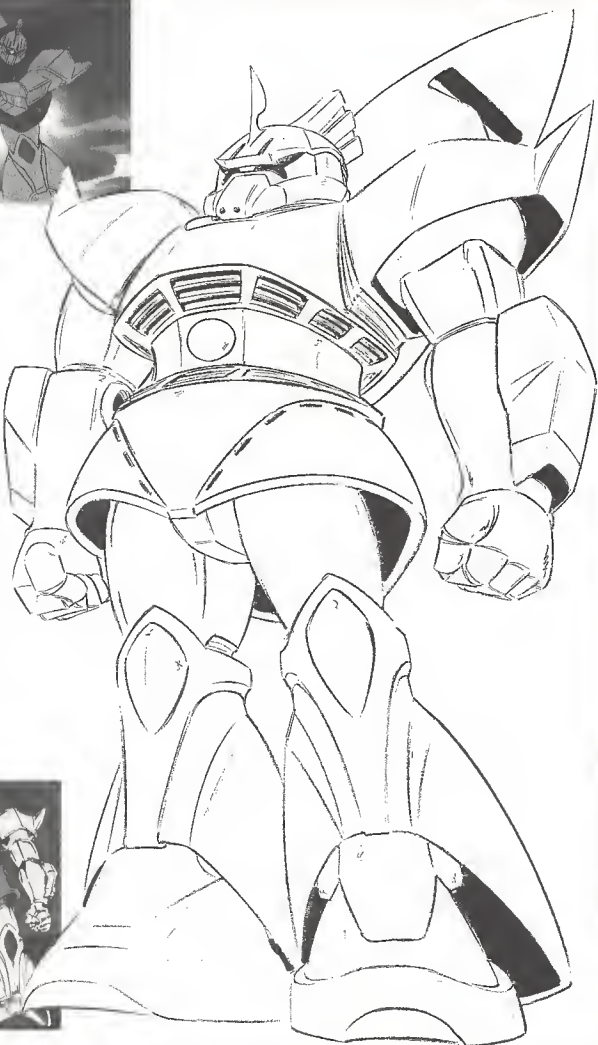
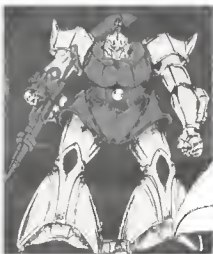


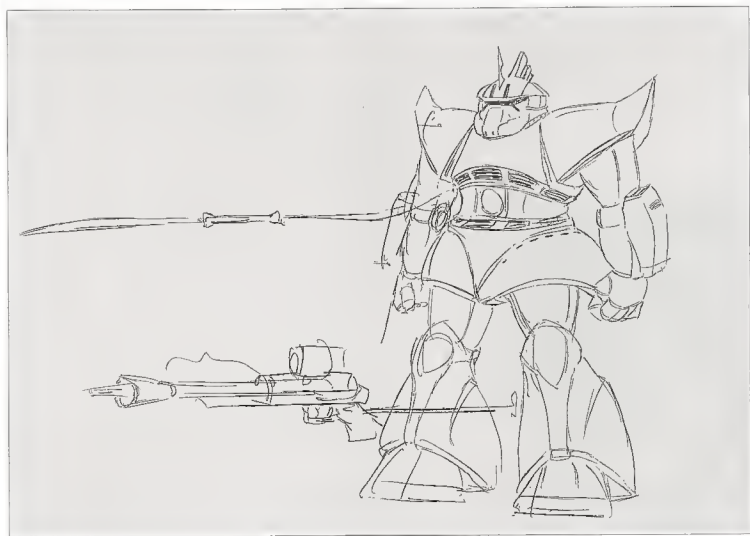
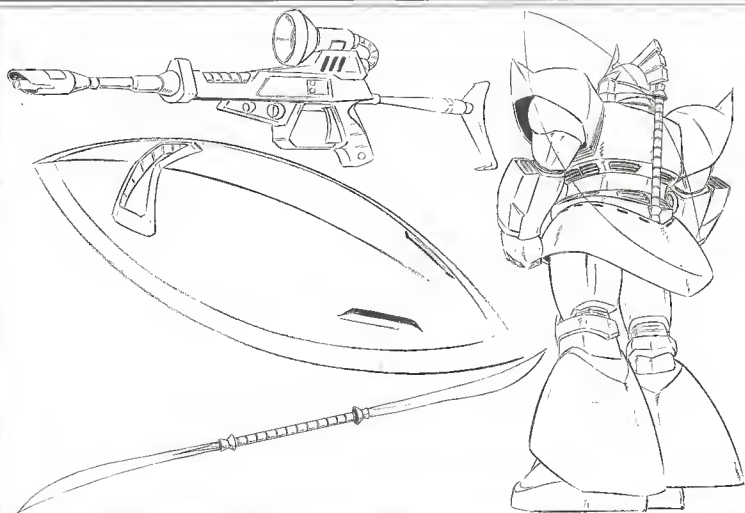
●ゲルググ〈37話〉

ザク、ドムに続くジオンの新型宇宙用モビルスーツで、シャアのものによって赤く塗装されかざり棒がついている。試運転を兼ねて、テキサスでガンダムと戦って以来、何回か剣を交えている。

のちにこの量産タイプは、ア・バオア・クーに配置され防空にあたった。

ゲルググの使用するライフルは、ジオン最初のモビルスーツ用ビームライフルであり、その性能はガンダムのものと互角である。ビームサーベルの類似兵器として、2つの刃をもつ、なぎなた状ビーム剣を使用。総じてガンダムのジオン版という感じである。

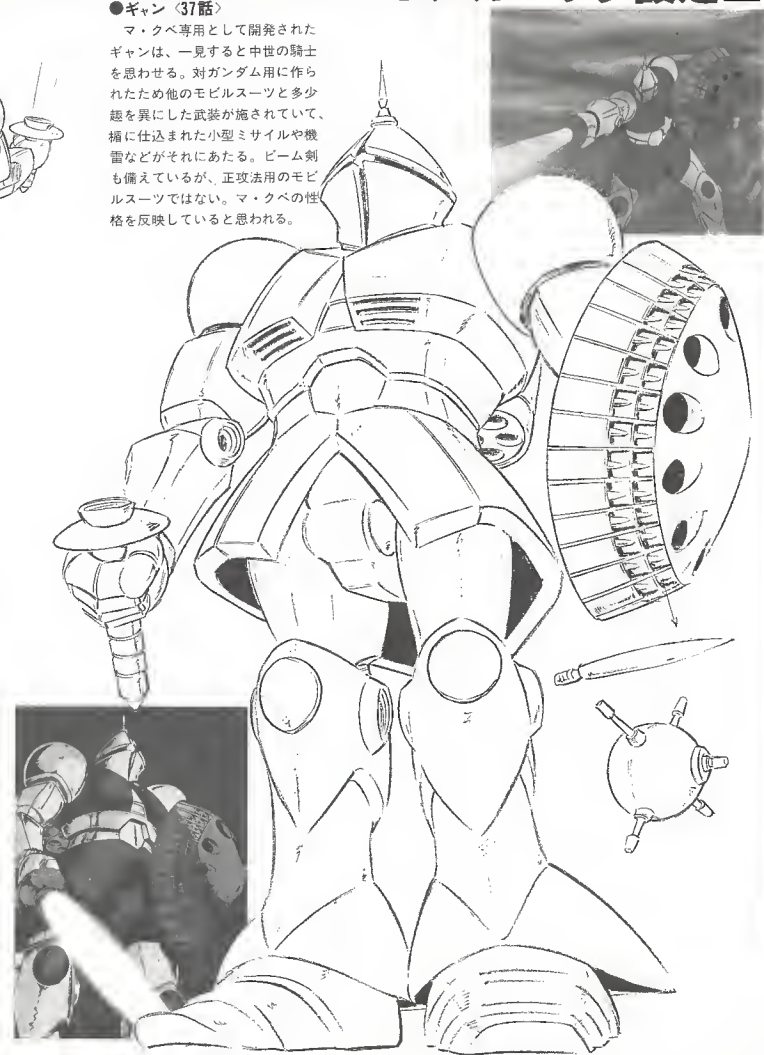


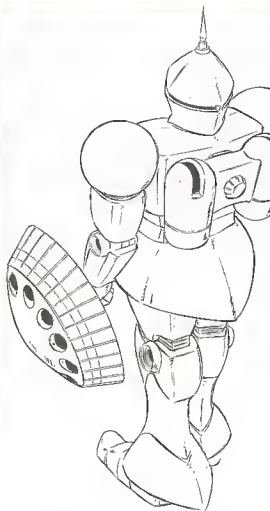
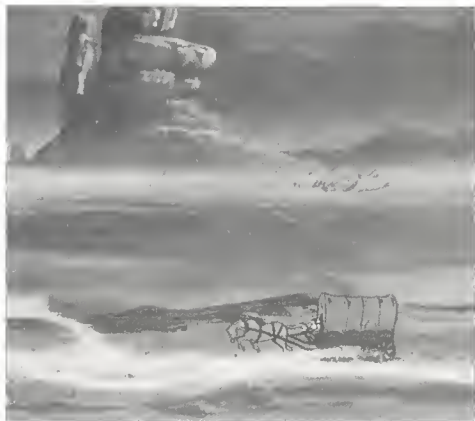


●メカニック設定②

●ギャン〈37話〉

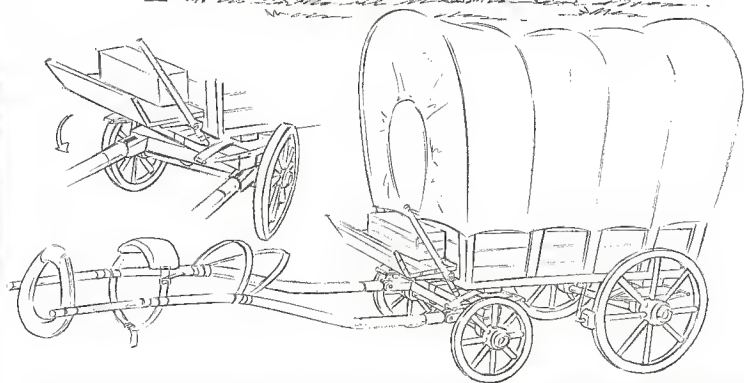
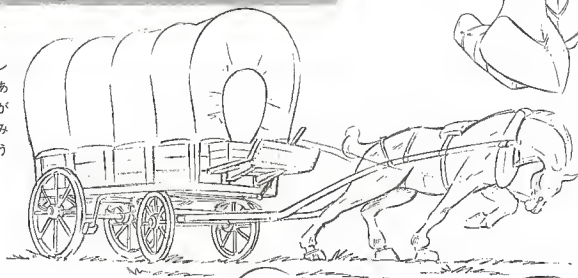
マ・クベ専用として開発されたギャンは、一見すると中世の騎士を思わせる。対ガンダム用に作られたため他のモビルスーツと多少趣を異にした武装が施されていて、楯に仕込まれた小型ミサイルや機雷などがそれにあたる。ビーム剣も備えているが、正攻法用のモビルスーツではない。マ・クベの性格を反映していると思われる。



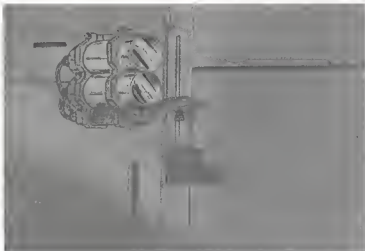
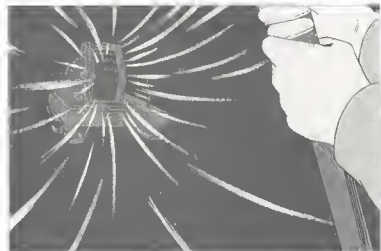


● 幌馬車 〈37話〉

もとはテキサスのレジャー用の幌馬車であったが、フラナガンがサイコミュを積み込みララのテストを行うのに使用した。

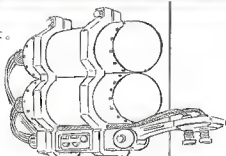
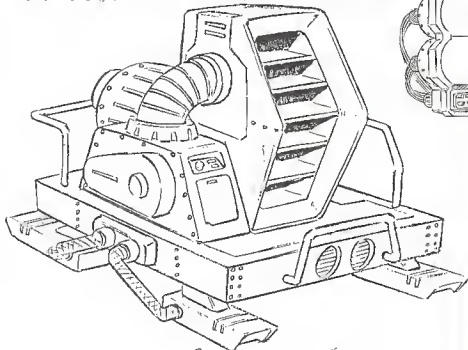


●メカニック設定3

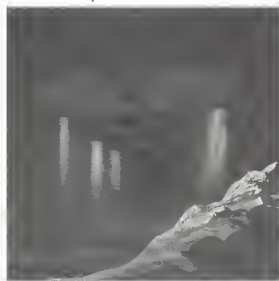
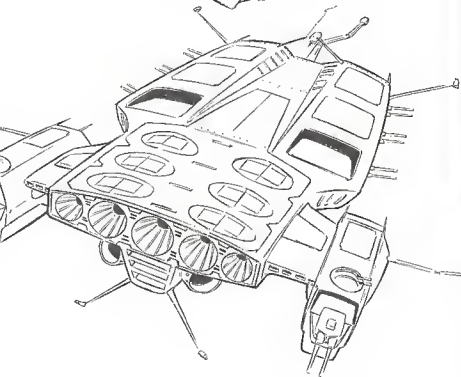


●送風機〈39話〉

ジオンから奪ったソロモンに、空気を送り込むのに使用した。

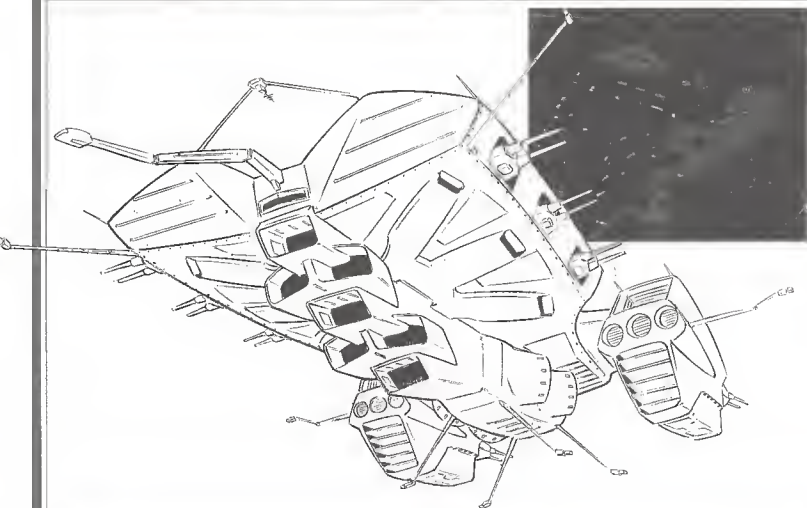


●爆弾〈37話〉
マ・クベがテキサスの港のハッチに仕掛けたもの。一定のところまで開くと爆発するようにセットされていた。



●空母ドロス〈39話〉

ジオン本国からシャリア・ブルを月のグラナダ基地まで送るのに使われたほか、ア・バオア・クーの主力艦ともなった。おもにモビルスーツ、モビルアーマーの運搬、整備等に使われ、前部の発進口からモビルスーツを次々に発進させる。搭載している多数のモビルスーツと本体との総合戦闘力は強大で、連邦軍艦隊を寄せつけなかった。



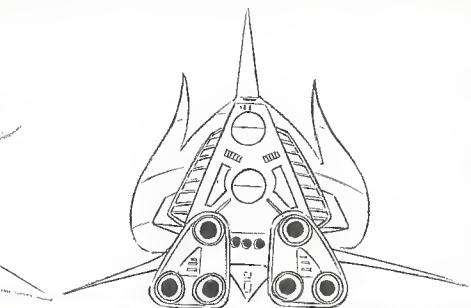
●メカニック設定4

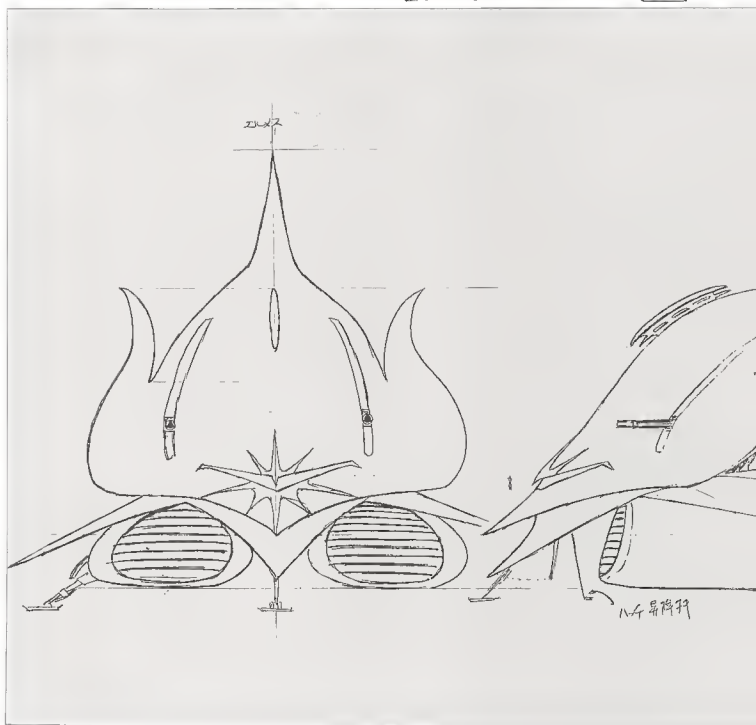
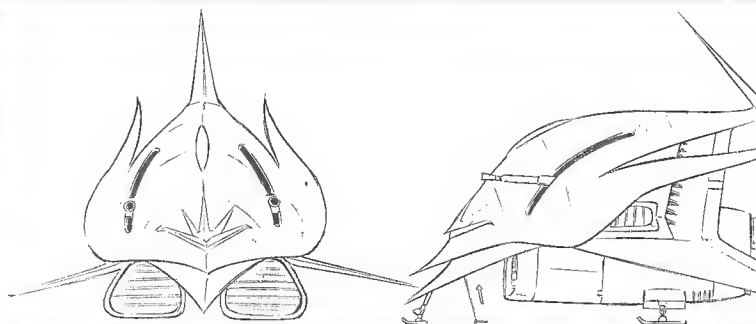
●エルメス、ビット〈39話〉

ジオンのニュータイプ用モビルアーマー。ニュータイプにだけ反応するサイコミュ（脳波伝導メカ）を通じ、攻撃メカ、ビットを自在にあやつり、攻撃をかける。

本体のエルメスにはビーム砲が2門あるだけで、後部に2基のビット収容口があり、10数基のビットを収納している。パイロットはララァで、専用の大型ヘルメットを着けて操作する。

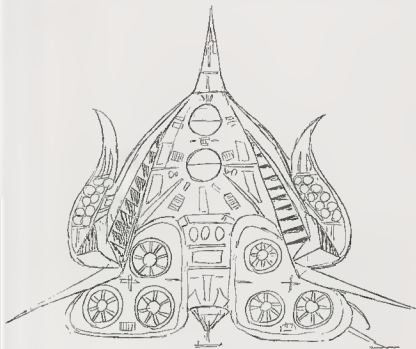
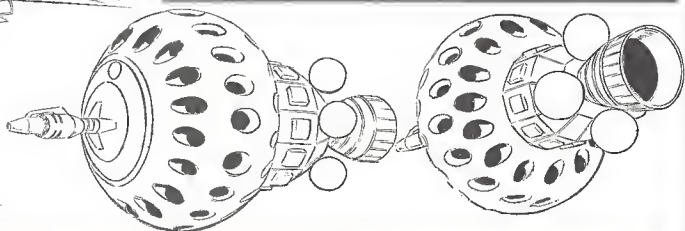
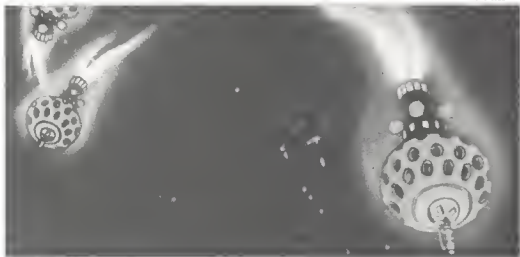
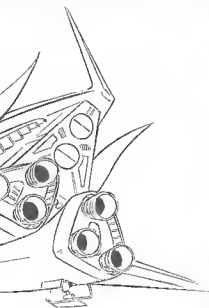
攻撃用のビットには多数のバーニアノズルがあり、飛行、方向転換が自由自在で、敵に捕えられることなく先端のビーム砲で攻撃をしかけられる。

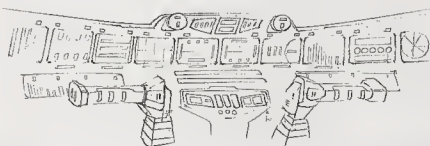
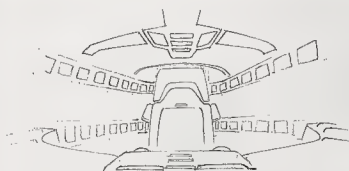
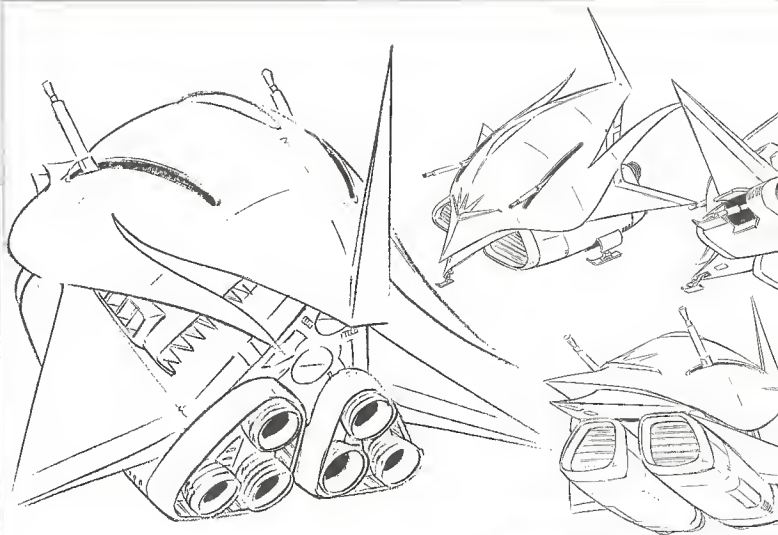




●メカニック設定⑤

●エルメス、ビット〈39話〉





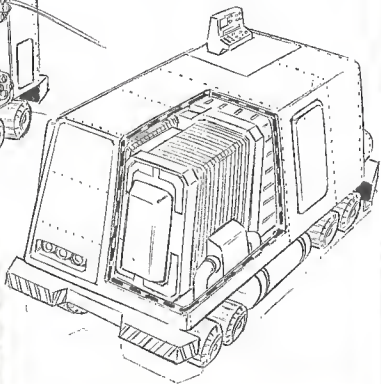
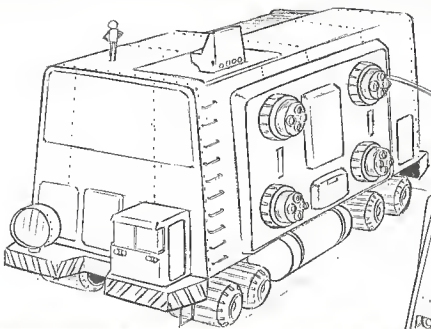
● コクピット (39話)

二本のレバーは操縦用で、多数のモニターはビットの状態を示すものである。

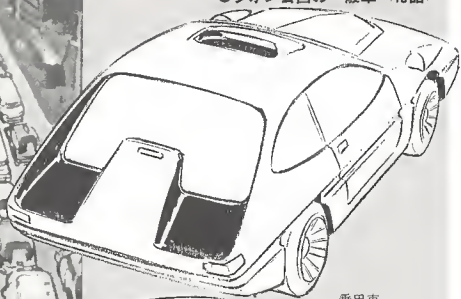
●メカニック設定⑥

●マグネットコーティング車〈40話〉

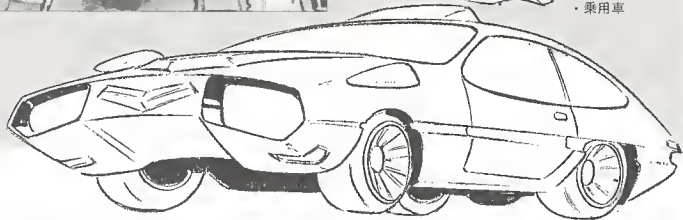
モスク・ハン博士が、ガンダムにマグネットコーティングしたときの工作車。

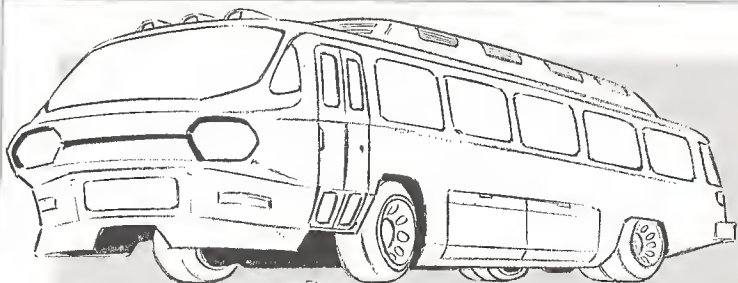


●ジオン公国の一般車〈40話〉

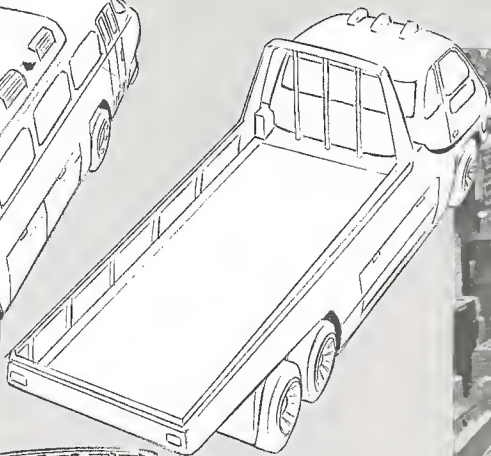
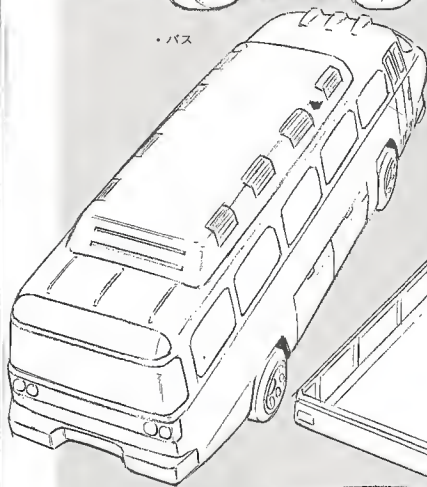


・乗用車

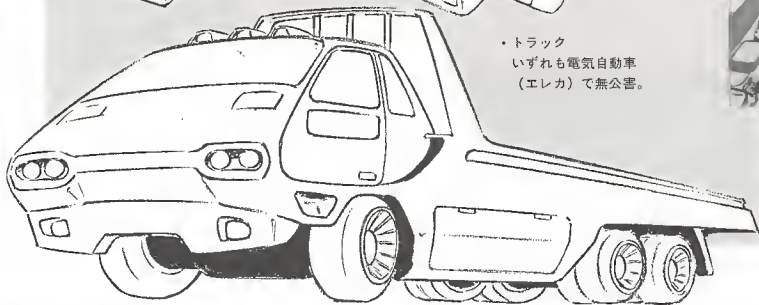




・バス



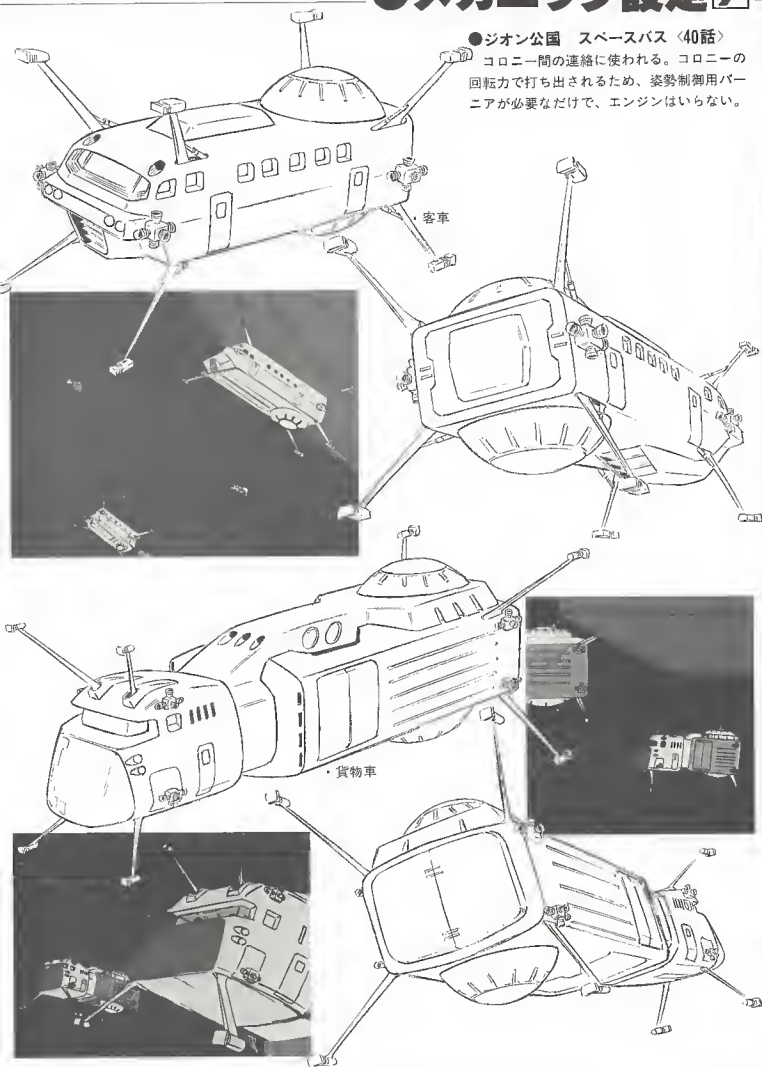
・トラック
いずれも電気自動車
(エレカ)で無公害。

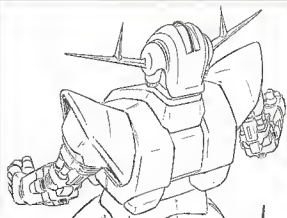


●メカニック設定7

●ジオン公国 スペースバス〈40話〉

コロニー間の連絡に使われる。コロニーの回転力で打ち出されるため、姿勢制御用バーニアが必要なだけで、エンジンはいらない。





●ジオング〈42話〉

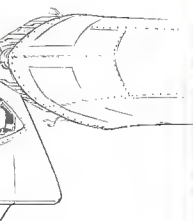
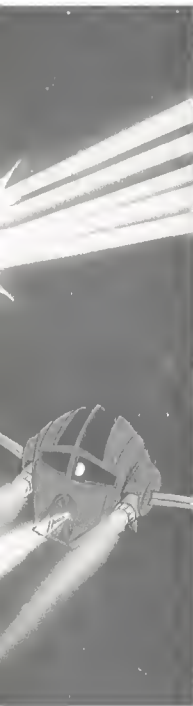
脚はついていないが、ニュータイプ用の戦闘機能を備えた、ジオン最後のモビルスーツ。腕が本体から切り離され、指先のビームで相手に攻撃を掛ける。そのほかに胸に2基、口の部分に1基のビーム発射口がある。コクピットは頭部にあり、頭だけで本体から離れて飛行することができる。

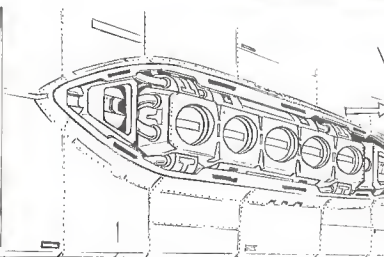
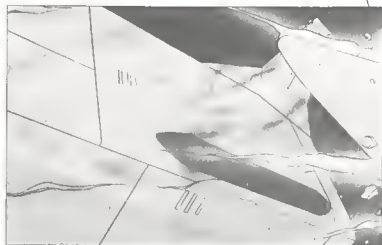
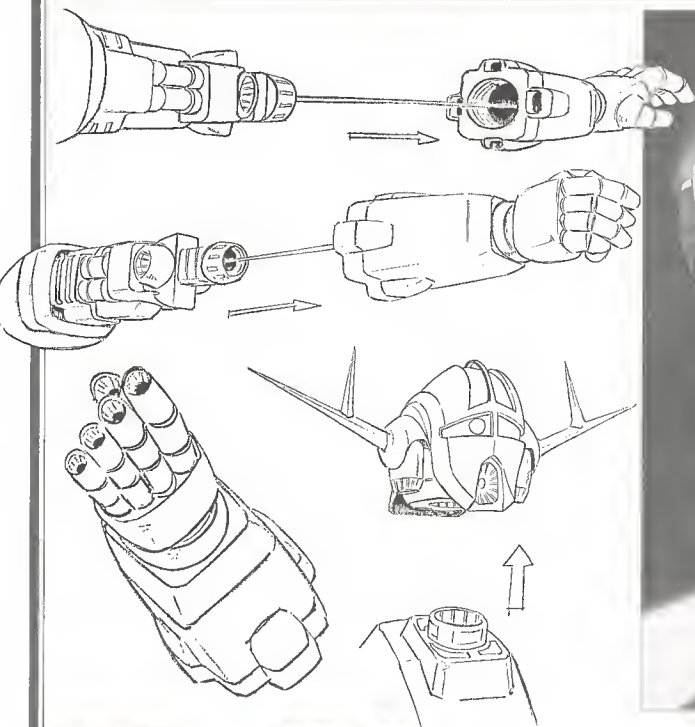
モビルスーツの形態、機能をとどめながらも、ブラウ・プロのメカニズムを組み込んだもので、モビルスーツとモビルアーマーの長所を兼ね備えた新しいタイプのメカだった。



●メカニック設定8

●ジオング〈42話〉

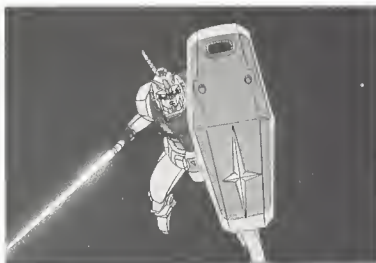




●ホワイトベース エンジン切り離し部分 <43話>

エンジンに被弾・爆発のおそれがあるため、支持架から切り離したところ。

制作スタッフ ● 放映記録



第38話 再会・シアアとセイラ

昭和54年12月22日放映

●脚本／松崎健一 ●演出／絵コンテ／藤原良二 ●作画／長崎重信・鍋島修・板野一郎・前島和子・戸川俊信 ●背景／安西徹夫・長野ゆかり・広瀬正明 ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン(杉山志津江・秋元ひろ子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ(平田隆文) ●編集／鶴淵友彰 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／豊住政弘 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊

第39話 ニュータイプ、シャリア・アブル

昭和54年12月29日放映

●脚本／山本優 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／久野弘 ●作画／多賀かずひろ・兵頭敬・清水恵子・前島和子・戸川俊信 ●背景／アッブル(渡辺毅・波部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト(森山政子・三橋則子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ(齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／草刈忠良 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊

第40話 エルメスのララ

昭和55年1月5日放映

●脚本／荒木芳久 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／関田修 ●作画／鈴村一行・石田実・井田明・伊東京一・田村茂 ●背景／マジック・ハウス(中村名里・桑村茂子) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン(青木千代子・川崎マユミ) ●特殊効果／山本公 ●撮影／旭プロ(平田隆文) ●編集／鶴淵友彰 ●小谷地文男 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／深田節雄 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊

第41話 光る宇宙

昭和55年1月12日放映

●脚本／松崎健一 ●絵コンテ／演出／貞光紳也 ●作画／青井芳信・伊東誠・板野一郎・笹木寿子・清水恵子 ●背景／アッブル(渡辺毅・波部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト(三橋則子・長谷川悦子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ(齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／植田益朗 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊

第42話 宇宙要塞ア・バオア・クイ

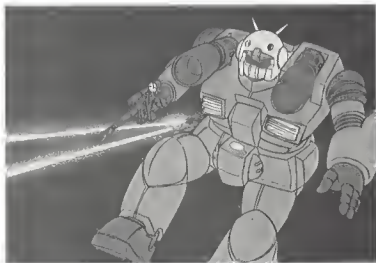
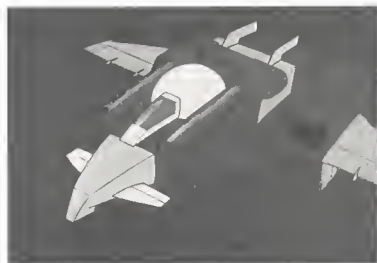
昭和55年1月19日放映

●脚本／星山博之 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／藤原良二 ●作画監督／中村一夫 ●作画／中村プロ(西城明・小林大介・伊藤昌宏) ●背景／安西徹夫・長野ゆかり・広瀬正明 ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン(満江敏雄・福井加奈子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ(平田隆文) ●編集／鶴淵友彰 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／豊住政弘 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊

第43話 脱出

昭和55年1月26日放映

●脚本／星山博之 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／関田修 ●作画監督／山崎和男 ●作画／前島和子・板野一郎・戸川俊信・清水恵子 ●背景／アッブル(渡辺毅・波部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト(加藤紀子・松井一美) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ(齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰 ●現像／東京現像所 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●録音／整音スタジオ ●制作進行／草刈忠良 ●設定制作／円井正 ●AP／神田豊



キャスト& 声優リスト



第38話 再会、シャラとセイラ

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シャラ／潘恵子●ウラガン／戸谷公次●シャア／池田秀一●ワッケイン／曽我部和行●バロム／滝雅也

●ナレーター／永井一郎

第41話 光る宇宙

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シャア／池田秀一●ララア／潘恵子●ギレン／田中崇●キシリア／小山まみ●マリガン／戸谷公次●アサクラ／広瀬正志

●ナレーター／永井一郎

第39話 ニュートタイプ、シャリア・プル

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シャア／池田秀一●ララア／潘恵子●ギレン／田中崇●キシリア／小山まみ●シャリア・プル／木原正二郎●將軍／佐藤正治●シムス／松沢和子

●ナレーター／永井一郎

第42話 宇宙要塞ア・バオア・クー

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シャア／池田秀一●ギレン／田中崇●キシリア／小山まみ●レベイル／池田勝●トワニング／佐藤正治●士官／二又一成

●ナレーター／永井一郎

第37話 テキサスの攻防

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●ララア／潘恵子●マリガン／戸谷公次●シャア／池田秀一●マ・クベ／塩沢兼人●ウラガン／二又一成

●ナレーター／永井一郎

第40話 エルメスのララア

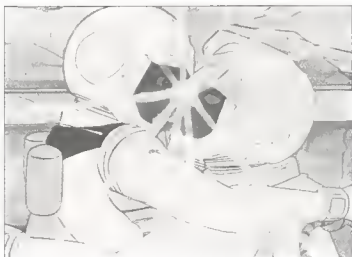
●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●シャア／池田秀一●ララア／潘恵子●ギレン／田中崇●キシリア／小山まみ●モスク／徳丸完●バタシヤム／政宗一成●將軍／佐藤正治

●ナレーター／永井一郎

第43話 脱出

●アムロ／古谷徹●ブライト／鈴置洋孝●カイ／古川登志夫●ハヤト／鈴木清信●フラウ・ボウ／鵜飼るみ子●ミライ／白石冬美●セイラ／井上瑤●ララア／潘恵子●キシリア／小山まみ●シャア／池田秀一●トワニング／佐藤正治●士官／二又一成

●ナレーター／永井一郎



——無骨な中にある豊かな人間像を演じてみました。やはり人間は顔じゃありません——

ですよ。

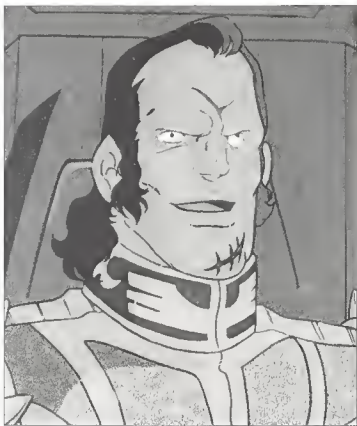
スタジオに入ってから役の中味を聞いて、中将という大役に、驚きました。最初の頃は台本によると、部下にどなりちらす役だったので、あの印象深い恐ろしい顔と相まって、豪傑に見えました。そこで、恐い顔をしたドズルの絵に自分が引きずられないように、やや抑えた感じで声を出すように努めました。

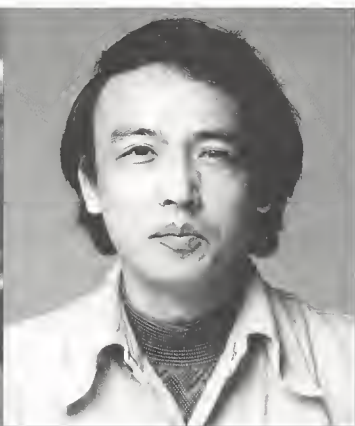
第35話・36話のソロモン要塞の攻略戦の時に再び登場しましたが、実に気持ちのいい役で、彼の心にある男らしさの中のやさしさにふれてうれしく思ったものです。ああいう風に豪快に生きて死ねたらいいなあ、といううらやましい気持ちがありましたね。

シリーズの始めの方で出た時には負けて帰った部下にどなった男が、今回はその部下と同じような立場に追いこまれつつある。「おそらく俺は負けるだろう、そして死ぬ」ドズルはそう予感していたんだと思います。だから妻と子を脱出させた。ドズルは軍人として連戦連勝だったんでしょね。負けるということとは彼の自尊心が許さなかった。だからこそ自らビッグ・ザムに乗り込んで戦ったんでしょ。戦うために生きてきた男の死に場所はそのにしかなかったのです。おそらく、軍人として戦いながら散りたかったんでしょね。彼はサムライでした。やはり顔じゃあないん

このアフレコの際は録音監督の松浦さんからOKをもらいましたが、大事なシーンだからもう少しゆっくりと、もう一度録り直させて下さいと言われましてね、僕も燃焼しつくしましたね。久しぶりに満足感を味わいました。「カッコイイ男だなあ」とその時だれかが言っていました。同じように感じた人は多かったです。たまたま別の仕事でスタジオに来ていた田中崇さんが僕に「いやあすごいねえ。僕もギレンを頑張らなくては……」と言ったのを覚えています。

もっと出番があればドズルの人間像をもっと出せたんじゃないかとも思いますが、僕の持た役としては、最後まで一人の人物を演じきったのは初めてでした。一生懸命にやっているうちに終わってしまった気がします。これからもドズルのような、無骨な中にもある豊かな人間像を演じてゆきたいですね。





——典型的な、外国映画に登場する日本人です。だから型にはめて演じました。——

アサクラというのは職務に忠実な実務型の人間でした。外国映画によく出てくる日本人俳優が演ずる一般的な型の役であるといえるでしょう。これは録音監督の松浦氏にも、ほぼ同様の説明を受けましたから間違いありません。だから型にあてはめて演じたので、比較的やりやすかったキャラです。

ソーラ・レイ・システムの技術面での統制官のようなのですが、そのために、計器の読み上げのシーンで、尋常でない用語を緊張した雰囲気を持たせながら連続して言ったので、つい、とちってしまったことがあります。でも、彼のようなキャラはもつと多く出てきてほしかったと思います。

他にも、ギルガワットというのはエネルギー出力の巨大な単位と違って下さいなどという風に、用語の大きな意味なんかを松浦氏から教えていただいた記憶があります。録音監督にすいぶんお世話になりました。

実際に演じてみて、作品の背後に流れている設定がすいぶん類推できました。たとえばこのアサクラの立場からすると、技術面は完全に技術者にまかせてしまうということですから、しっかりした技術力とジオン軍内部における信頼関係、ひいてはその組織力の大きさも感じることができます。これもまた僕

の推測ですが、この作品の時代には、現在使われているところの「国」というものはずでなく、その複合体としての存在が（連邦、ジオン、サイド6など）あると思われます。こんな楽しみ方もできる作品でした。

この作品で描こうとしているのは、敵も含めた上での「人間性」なんだと思います。それがものすごい人気の原因の一つではないでしょうか。

もし、再び「ガンダム」のような作品が作られるなら、僕もぜひとも参加したいですね。特に、男らしくて思い深い、あのランパールのような役をね……。



——シャリア・ブルのような参謀的なキャラは、私の肌合っていましたね。——

話によると、総監督の富野氏はシャリア・ブルの役に当初から私を想定していたらしいですね。私はアニメーションの仕事にそんなに多くはやっていません。芝居をする一つの形式として、いくつかのアニメーション作品にかかわったことはありますが、それも一話だけで消えてゆく敵側のゲストキャラが主です。そんなわけで、今となつては似たような多くの役柄の一つということで、そんなによくは覚えていないのが現状です。

乏しい記憶ではありますが、シャリア・ブルというのは、自分から大将になろうとは決してしないであろう控え目な性格の男だったと思います。前線にはあまり出なかったのではないかとも思えますが、木星へ資源を取りに行ってきたことからして、歴戦の勇士であることは間違いないでしょう。相当危険な任務であったでしょうから。彼のような参謀的なキャラは、私の肌に合っていましたので、シャリア・ブルの役に決めましたこと自体は、そんなに難しくありませんでした。ただ、

我々の住むこの世界とは、時代も場所も状況も異なるフィクションの世界でしたから、それらの内容を台本を読んだだけで理解するのは、まず無理でした。特にニュータイプというものの概念はあいまいでしたから、それに

関してはスタッフの方に色々質問したことを含めてもはつきりと覚えてます。

それにしても、作品を観る子供にとっては、ニュータイプという概念を始めとして、非常に難しい作品であつたろうと思います。

録音監督の松浦氏とは知り合いましたから、話がしやすいので気は楽でした。総監督の富野氏とも、以前一緒に仕事したことがありましたので安心してやれました。何よりも、録音監督を信頼しているチームワークは兄事としかいいようがありませんでした。





——フェリーニの「道」のヒロイン・ジェル ソミーナのような生き方を演じてみたかった ですね——

オーディションを最初に受けました。その時点では、ララアはアムロの恋人という設定だけだったんですが、いつの間にかその設定も変わり、ただアムロの相手ということになりました。役が決まった時も、ララアの実際の台詞すら定まっていませんでした。つまり、ララアがどんな人間なのかという具体的内容は、私は知らなかったんです。いざスタートしても、初めは、彼女は予知能力を持った女性であるということしかわからなくて、今までとは違う役だなあとしか思いませんでした。

台本をいただいた時に、このシーンはこうですとスタッフの方に教えていただいたり、何回か役を演じているうちに、ララアがどんなキャラなのかやっとわかったんです。彼女はただキレイキレイのお嬢さんじゃなくて、人生の裏までも知りつくしている人間なんです。また、シヤアと一緒にいる人間に対して冷たい態度をとります。でも、だからといって悪人ではありません。人間の善と悪の両方を持った人なのです。ですから、演技の上では善も悪も両方出せるように気を配りました。

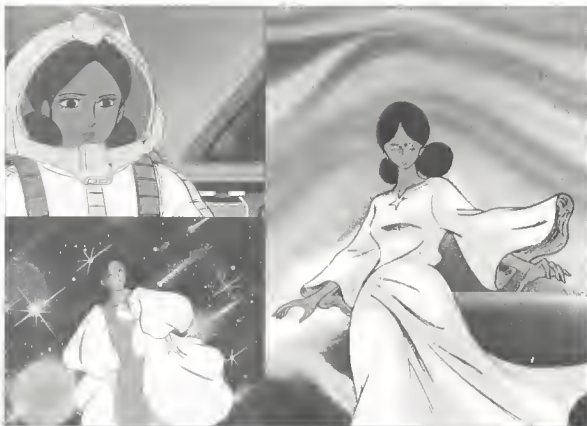
前半に2話ほど、イセリナの役で参加しま

したが、しよせんはゲスト・キャラでしたので、「ガンダム」の作品全体のストーリーはほとんど何も知りませんでした。そんな中で終盤になって、突然ララアという大役で再び参加しましたので、役に敵する上でも、作品の流れに合わせて演技する上でも、とても苦労しました。それに、どの方が何の役を演じられているのかもわかりませんでしたので、チームワークのしっかりしているレギュラーの方々の中に溶け込んでゆくのがむずかしかったですね。

「ガンダム」という作品は戦いのシーンが実に多かったですね。私は戦争というものを実際に経験はしていませんが、もしそんな状況の中に自分が追いやられたとしたら、人間が人間の生命を強引に消すなんて、とてもじゃないけど耐えられないと思います。だから、その中において、愛のために、人を助けるために戦う人は、どう思っているかどう行動するのでしょうか。戦うのは、人を殺すのはいやだが、愛する人のために戦わざるをえない。それは大きな葛藤でしょう……人間心理として興味もあります。が、とても考えさせられることです。

声優からのコメント

私が役者として目標にしていることは、自分自身が何のために生きているのかを見きわめ、それを表現することです。例をあげるなら、フェリーニの作った「道」という映画に登場する、ジェルソミーナという名の、知恵



の遅れた女性のような生き方をする人物を演じてみたいと思っています。ガンダム」に登場したラアもイセリナも、ジェルソミーナのように、愛情のためにすべてを捧げて、場合によっては自分の命を失なってしまうかまわなとて考えている人物でした。人類の未来を考えるならば、資源・エネルギー・食料・領土や社会自身も含めて、未来の世界は暗く厳しいものとなるでしょうが、そんな中において、人を助けてまで人を信じていけるような人間でなければ、人類はそこで終わってしまうでしょう。私は愛なき世界は考えられないし、人類がもつと愛しながら生きていって欲しいと思っています。

「ガンダム」が多くの人に評価されたのは、人間を主役とした、人間ドラマであると共に、通りたいペンではない、厚みのあるいくつもの愛があつたからではないでしょうか。

ラアを演ずる上で避けて通れないものは、ラアがニュータイプであるということでした。これは実に興味深い概念でした。まあ、新人類という意味なんでしょうけど、進化という自然発生的なものとは言い切れない存在だと思っています。私達人間は、幼児の頃知らず知らずのうちに母親のまねをして、色々なことを習得して成長します。これは本能のなせる技でしょう。それに対して、あらかじめ、ある指向性を持って変革して誕生してきたのがニュータイプなのではないでしょうか。だから他にも色々な資質があるのだらうけど、アムロやラアに必要だったのが予知能力であり、迅速な精神反射と、思念による会話で

あつたからそれが現出したんだと思います。また他の状況にあつては、それとは別の能力が身についても不思議じゃない。つまり私が言いたいのは、ニュータイプとは、人類が作り上げた新しい人類じゃないかということなんです。これはラアの役をやり、「ガンダム」の全ストーリーが完結したあとで私がつかんだ一つの結論とも言えます。

ですから、今となつては少し不満が残るんです。ラアの役を始める時点において、できうるならば、それ以前の「ガンダム」の世界や話と、それ以降のストーリーの流れを知つていたかつたということなんです。全体としてはこれこれの話で、第何話から登場すると、前もってわかつていれば、ストーリーの展開上のヤマ場などを自分なりに納得して、役に没頭できたと思いますし、それ以上に、ニュータイプという概念がわかつた上でラアの演技ができたんじゃないかなとも思います。それができなかったのが今となつては悔やまれるわけです。でも、これはテレビアニメの製作においては賛沢な悩みなんでしょうけどね。そんなこともありましたが、この作品では精一杯やつたつもりですし、作品自体とてもすばらしいものでしたので、充実した日々を送れました。これをステップにしてこれからほつと頑張つてゆくつもりです。そして熱意と誠意に満ちあちつたスタッフや、色々と指導していただき感謝の念を伝えたいと思います。ラアという素敵な女性を演ずることができて、私は幸せだと思っています。



——アフレコの雰囲気は、和気あいあいとしていて、とても良かったです——

ゲストキャラとしてたまに出演しただけですから、役柄についてはほとんど覚えておりません。ですから、どのようなアフレコをしていたのかを中心に述べます。

アフレコの雰囲気は、レギュラー出演者の人たちは内容をよく理解しながら和気あいあいと演じていたようです。でも、僕らのようにゲストとしてたまに出る人間は、作品のストーリーも設定も、よく理解できないままに予測で、自分なりの解釈で演ずるしかありません。録音監督の松浦氏にすべてをまかせて、その場でやるしかないですね。まあ、それが間違っていた場合は松浦氏に注意され、どのようにしたらよいのか教えていただけますので、気分的には楽でした。シナリオにあるセリフを読んで一生懸命に自分なりの解釈をして、画面に出る人物の口の動きに合わせてしゃべってゆくのが、アフレコの実態なわけですね。

画面のカットが変わるたびに、しゃべる人が替わるんですが、実際にある多くの映画の場合と違って、この「ガンダム」のような連続形式のアニメでは、内面も含めて登場人物の感じを的確につかむのは、レギュラーの人でないといけません。つまり、役柄を掘り下げにくいのです。ですから、これのでき

る人というのは、反射神経の良い、切り替えるうまい人だと思います。おそらく勘が鋭い人でしょうね。

普通の役者は舞台げいこを繰り返して技術を磨いていけるんですけど、僕みたいな不器用な人間はオロオロしながら毎回やるしかないんですね。ですから、仲間や録音監督にだいい迷惑をかけたんじゃないかと思っています。

第5話に登場したスミス老人のことはよく覚えています。彼の心の中ではやはり地球が命のふる里だったんでしょうね。「俺は地球に骨を埋めるんだ」という台詞にはとても共鳴しました。土に生まれ、土に帰るのが人間本来の姿じゃないでしょうか。ところが自分たちのエゴのために地球を汚している。そんな人も最後には土に帰るんです。その時に地球が汚れていたら悲しいじゃないですか。ふるさと志向と言われるでしょうが、一介のゲストキャラを通して、こんなことまで考えることができた作品でした。



鈴木清信(オスカ・ダブリン)

——オペレーターも、主人公たちと同じ人間として描かれていましたね——

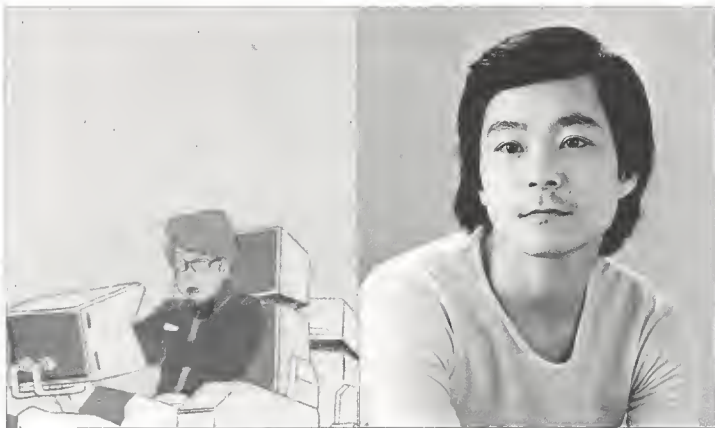
この作品は、戦争自体を嫌っていた少年たちが、ホワイトベースという新造艦に乗って、いや応なしに戦争に巻き込まれていった話で、いわば、継続する戦争の中で各人物が何を考え、何をするのかを扱った人間ドラマでした。だから人の生きざまがよく出ていて、人間ドラマとして身近な感じがありました。大人が見ても鑑賞できるし、子供も楽しめる作品といえるでしょう。そんなことをわきまえながら演じてきました。

オスカはホワイトベースのブリッジでレーダーなどのオペレーターとして活躍しています。普通のアニメでは、レーダー監視員はスキヤナーの表示から方位や距離などをただ言うだけの無名の人々の一人として扱われますが、*「ガンダム」*ではそんなオペレーターにも名前を与え、彼らも主人公たちと同じ人間であるとの認識に立って描かれています。食事をするシーンも出てきましたし、交代制とはいえ、うち続く戦いのために疲れがたまつて勤務中につい、いねむりをしてしまったシーンも時々ありました。このような日常生活面を随所に出したおかげで作品に厚みを与えたキャラという評価ができると思います。

作品の人氣が放映中に高まったので、よい一生懸命になりました。また、録音監督の

松浦さんを始めとするスタッフのチームワークがよかったですね。それが我々にも伝わってきて、僕らもめずらしく、みんなでのつてやりました。

*「ガンダム」*のような色々な意味での問題作が今後もどんどん出ることによって、アニメの作品は淘汰され、質の変化が起こるようになるんじゃないでしょうか。ですから、あしたのジョー。などのように、この機動戦士ガンダム。も、5年後、10年後には改めてアニメ界における評価がなされるでしょう。少なくとも、強烈な印象を伴って残っているであらうと、僕は信じています。そんなすばらしい作品でした。





——ギレンは高慢でいんぎん無礼ではありましたが、すばらしい魅力の持ち主でした——

「ガンダム」に対する予備知識があまりない状態では、ギレン・ザビの役を引き受けました。敵方の大将と聞いている程度ですが、最初にキャラ表とシナリオを見て、軍人らしい容貌を持っている冷酷なイメージの男だと思いました。ただし、頭は良さそうで、そういった内に秘めたものをストレートに表には出さないタイプの策士であると感じました。

作品の前半に出て来た時は、せいぜい演説をするだけのキャラでしたが、終盤に入ってからギレンの登場シーンが多くなり、最初に感じたイメージがほぼ正しいことがわかりました。彼は自分の感情や考えをそのまま表には出さずに、肉親に対してもジオン国民に対しても、常にその効果を計算した上で行動や言動を起こしているキャラでした。なせ、弟ガルマの死をもジオン軍士気の高揚に徹底的に利用してしまった男ですから。父・デギンとの、冷え切った関係での会話は、お互い意味においても、実に印象的でした。お互いに自分の理想とする世界を創るために相手を利用してやろうと、言葉のかけひきをさかんにしているわけです。それも、例の貴族的な言葉使いでの会話なので、印象はますます強くなりました。

そのように、相手の先を押さえて、冷静な

計算に基づいて話すギレンは、不気味な人間ではありました。あのような言い方をした場合に、相手を自然に望むところへ追い込んでしまう魅力は彼は持っていたんでしょう。まさにヒットラー的なカリスマ性を備えたキャラといえます。ですから、デギンが彼を「ヒットラーのしっぽ」と呼んだその言葉は、彼を上手く示していると思います。

ギレンは高慢でいんぎん無礼ではありましたが、すばらしい魅力の持ち主でした。彼の抱く思想は僕はと根本的に異なりますが、その思想を別にすれば、己れが目ざしている世界の実現を完璧に信じて行動する、自信に満ちあふれた人間であるギレンは、ヒーローとは別の要素を持つ理想の人間のような気がします。ただこれは、ある制限された状況で見ているからで、もしギレンのような男が現実的にいたとしたら、おそらく僕はその男を徹底的に嫌っているでしょうね。

ギレンとて最初からあのような男ではなかったらうと思います。戦争に勝つためには、一部の人間に権力を集中させてしまうのが世の中の常ですが、権力の集中は社会的に高みを作ってしまうものです。その高みは権力の中心にある人間の持つ価値基準を変革させてしまうもの。高いビルから地上を見下ろせば、



地上にいる人間はもはや人間ではなく、単なる物体しか見えなくなってしまうものですが、それと同じようなことが、あのギレンにもいえるのではないかと思います。そしてそれは、誰も相談相手がいない孤独な状況をも意味します。第42話において、ア・バオア・クーの司令室で「圧倒的じゃないか、我が軍は……」と、一人悦に入っているギレン。そこには彼のプライベートな心が、少なから

戸谷公次（ウラガン中尉）

とにかく、画期的なアニメーション作品であつたと思います

各話完結ではなく、大河ドラマ形式で連続する話でしたから、毎週出演するレギュラーの人とは違って、自分の演ずる役がどのようなものであり、巨大なストーリーの流れにおいてどんな状況で登場したキャラなのかを理解すること自体がたいへんでした。たとえば、このウラガン中尉の場合には、ウラガンの置かれていた立場を考えなければなりません。

それには、彼の直属の上司であるマ・クベ中佐のジオン軍内部における立場と、彼らが敵であるホワイトベースとガンダムに対して、どのような戦いを展開してきたのか、そんなことまでわかっていないといけないわけです。

作品に対しても同様のことがいえます。毎週出演していたわけではないので断言はできませんが、今までにないタイプのテレビアニメでしたし、作品をずっと観ていないとな

ず表われていると、僕は思います。

「ガンダム」の世界は社会であり、歴史でした。戦争という状況の中で人間や社会がどうなっていくのかという、一つの解釈なのだと思います。ですから作品における登場人物の比重も大きくなります。だから大人の芝居が要求され、非常に緊張感とやりがいを感じました。

なかなか理解できない作品であつたと思います。また、戦争という状況の中で進行したドラマであつたせいなのか、メカが多く登場しましたね。おかげで、台本を読んだだけではどれだけのメカなのかわかりにくく、僕としてはとまどいをよく感じました。もちろん、わからない点は事前にスタッフの方に聞いてから演じましたが……。

とにかく、画期的なアニメーション作品であつたと思います。そして製作スタッフ側の熱気が強く感じられた作品でもありました。

最後に、蛇足ではありますが、この作品の登場人物の中で僕の一番好きなキャラは、俗っぽい意味で、あのシャアでした。自分で演じてみたかったという欲もありますが、こんなわけで、ファンの人たちの熱狂的なシャアに対する反響もわかるような気がします。



なかなか面白い個性の持ち主でした

とにかく、最初は一回（話）で終わる役だと思っていました。その時はたまたま別役も兼ねていたので、ああタブリがあるなと思い、じゃあ片方の役はこうして、もう片方はこうすればいいなという具合にやった結果、残ってしまったのがマ・クベだったんですね。そして、どうやったらいいのか頭をかかえてしまい、苦しまぎれにあのような芝居をしてしまったわけです。そしたら録音後に「実はマ・クベの役は当分出てきます」とスタッフの人にいわれましたね、これは大変なことをしてしまっただぞと思いました。それが一回目をやってしまったからの痛切な感想です。それから苦しみました。ホントに。でも、まあ、楽しかったですけどね。

自分でも突き離しながら、「まあ、この人はようやるわ」と思いながら芝居していましたが、なかなか面白い個性の持ち主でした。ね、悪い言い方の方が多いと思いますが、マ・クベというのは陰湿な部分も持っていますし、物事にかなり固執しますね。でも彼がそれをやりながら、全然反省していないのは徹底していいですね。結局、悪い事をしていても、自分ではそれが悪い事であると振り返ってみることを全然しない人でしたね、あの人は、自分でやっておきながら「あの人」と言うのは無責任ですけど……。まあ、そんなことで、良くも悪くも非常にサッパリした人で

はあったと思います。

やっていて印象深かった部分は、マ・クベがシヤアに対しては非常につらくあたっていった点ですね。特に最後の散り際の話、テキサスコロニーで彼がギャンの中で叫んだ言葉、「シヤアを国にのらせるわけにはいかんのだよ」は、いかにもマ・クベらしい言い方だと思いました。また、この台詞が言えて良かったという気がします。彼の心中には、しよせんはシヤアに対して対等にはなれないという思いがあったんでしょね。だからこの台詞を言わせて死なせてくれたことは、何というか、サンライズさんや脚本家のご好意じやないかと思います。やってゆくうちにこの役に愛着を感じてしまったんです。長くごぶさたして再びマ・クベが登場した時も、なんかまたこの人に会えた、といううれしい感じがありましたから。だからそういう意味では僕自身あの役を好きだったことはいえろと思います。彼が出てくるたびにイヤだなー、と思いつつながら半分喜んでやっていました。

今思うことは、マ・クベの役でもう一度やらないうちと云われるのが一番恐いですね。あの画面を見ながら、あの苦しまぎれで作ってしまった雰囲気はどう維持しているのかと苦しんできたことを、今、ボンともう一度やれと言われても、そんなの同じようにはできないんじゃないかと思えます。マ・クベは、あ

塩沢兼人（マ・クベ）



くまでもあの時のあの状況においてのみ作り出せたものだったんです。しかし、振り返ってみると、よくマ・クベというあんなキャラクターをあいう風にやれたなあ、と自分なりにホッと胸をなでおろしている次第です。

佐藤正治（トワニング准将）

—スピード感あふれる

アニメーションでした—

トワニングは、クールな感じのする、いかにも職業軍人といった雰囲気顔つきであり、体型でした。また、年齢がある程度高かったの、落ち着きのある人間にするために低音を生かして、どっしりした感じを出すように注意して演じたと記憶しています。

シリーズの途中から突然参加しましたから、最初はストーリーや設定がよくわかりませんでした。トワニングはア・バオア・クーを指揮していたわけですが、たとえばア・バオア・クーという単語の意味が、メカの名称なのか、人名なのか、要塞の名なのか混乱しまして、関係者にいろいろ尋ねたり、画面を何度も見るうちに、やっと理解した次第です。

この作品は各話完結でなく、シリーズ全体の大きな流れで集結してゆくものだったせい



か、テンポの速い、スピード感あふれるアニメーションでした。今までのテレビアニメとはひと味もふた味も違った作品といえるでしょうね。また、強烈な存在感がありました。ですから、最終回でジオン軍の学徒兵が「お母さん／＼」と叫びながら爆発に包まれていったシーンは、自分がやった役ではありませんが、実に印象深く今でも残っています。

まあ、途中参加ではありましたが、出演者が僕と身近な、若い人で多くを占めていたもので、そういう意味ではやりやすかったですね。ゲストキャラでしたから、そんなに多くのことを覚えていたわけではありませんが、少なくとも、画期的作品に参加できたことは、誇りにしています。

貞光紳也 (演出)



とにかくハードなSFをやるというんで乗ったことは確かですね。今までのアニメの宇宙があまりにもでたらめだったんで、もったいなく作ろうという考えには共感できました。もともと僕自身SFが好きだったし、アマチュア天文家だったんで、それらの影響を少しは入れたいという気持ちはありましたね。ガンダムのモビルスーツは初期設定では3mほどで、ただ着るという発想だったんです。でもそれを戦闘機のような扱いにしたのは成功だったと思います。

何本か手がけましたが、その中で印象的な話は第8話の「戦場は荒野」です。あれは脚本が良くてコンテでもなかなかのっかし、作画が山崎さんだったから安心してやれました。

ね。あれが一番好きな作品。その次に印象的なのは、ラアの死ぬ話ということで第41話の「光る宇宙」ですね。この回はガンダムのテーマを出すために、富野さんの思い入れが激しくてかなり力を入れましたから。だからコンテも随分直されましたね。富野さんと僕の考え方には当然違った部分もありましたけど、自分で修正してくれたんで、両方の良いところがうまく融合して成功したんだと思います。メインはあくまでも富野さんですし。ニュータイプというのはミュータントなんだろうけど、それとは別に、人間の考え方の進歩だと思う。一つ上の段階って感じ。SFでいえばクラークの「幼年期の終り」に通じるところがあると思いますね。

表現の中で、イメージショットがけっこうありました。これはやはりアニメーションでなければできないと思う。実写だと特撮に相当金かけなきゃならないでしうかつしね。

実感としては、スタッフが少なかつたですね。病人がかなり多かつたし……。だから安彦さんが倒れたあとは、みんな意地で作ってましたね。あれは本当にギリギリでした。

ガンダムでは「遊び」は押えていたけど、僕の場合は必ず何か「遊び」を入れましたよ。まあ僕としては、どこかほっとする場面がほしいから色々入れちゃったんですけど。

最後に一言でいってしまえば、「ガンダム」は大変だったとしかいえないようがありません。いろんな意味で印象深い作品ではありました。

関田修 (演出)



「ガンダム」って難しかった。途中から始めたせいかもしれないけど、今までどのように流れてきて、これからどう流れてゆくのかわからなかつたね。しかもアムロはニュータイプになっちゃって……。あの伏線はちよつとわかりにくかつた。

それから僕はよく殺したね。最初にリュウが死んで、あとマチルダ、ハモン、ミハルって具合にまともな人間が死ぬとこをよくやつたね。ミハルの死ぬところはあまり良くなかつた。自分としては不満の出来です。

それに対して気に入っているのは最終話ですね。あれは山崎さんの力なんですけど……。背景がドロボウさんに盗まれてしまい、進行の草刈君が正月休みを返上して、代りの背

スタッフ・コメント

景を3枚ほど描いたということもありました。最終回のラストについては、シナリオ読んでないからよく言えないけど、製作途中に変わったことだけは言える。最初の予定では、ア・バオア・クーの全景が見えていて、それをアムロたちがただボケーッと見ているんだけど、それじゃ何の意味もない。作画の人が打ち合せの時その疑問を出して、富野さんと色々話したんだけど、富野さんが一時間ほど時間をくれといつて一生懸命考えて、結局コアファイターがどうなるのかを描くことになったんだけどね。やっぱりその形にして正解だったんじゃないかな。わざわざ爆発しているのを出したのに、それをボケーッと見ていたってしょうがないもの。だからコアファイターにした。これは戦争をするための道具なんだけど、それがどうなったか画面に出すことによって、戦争が終るか終らないかを示せたいと思う。コアファイターが消えてゆく、要するに戦争の道具がなくなるんだよね。まあ、そのあとどうなるかわからないけど、それはテレビを観ていた人に考えてもらうしかないんじゃないかな。

作画なんかでいろんな「遊び」をやっていたけど、シリアスな作品なんで演出では遊べなかったね。やりたくても僕には無理だった。疲れた作品だったけど、今までやったことのないタイプだったからやって良かったと思う。わからないことも聞けば教えてもらえるんで、その点ではかなり勉強になったね。



藤原良二 (演出)

演出を始めて2本目の作品だったので、あまりうまくやってましたから、深いことを追求するところまでは余裕がなかったですね。ただ、やっている途中で、演出というのはどういうものか随分吸収できました。僕が主に考えていたのは、面白くするためにどうしたらいいのかとか、富野さんの考えていることをどうしたら上手に表現できるかとか、そればかりでした。そんなことを勉強させてもらった作品ですね。

好きな話は「宿命の出会い」です。あれはどういう感じになるかわからないけど勝手にやってみたものなんです。前半の少しだけそのような雰囲気を出して、評判は割と良かったですね。画面的にもきれいで、そういう面

から見れば好きな作品ですね。しかもあれは、ニュータイプが出現し、発展していく一つの境目をなす話でした。楽しかったのは「小さな防衛線」です。また、一番大変だったのは「宇宙要塞ア・バオア・クー」ですよ。これだけはホントに泣く思いをしましたね。その割には思い通りにはできなかったですけど。絵かきさんなども頑張ってくれましたが、やはり僕の力が足りなかったんですね。いや、大変だという印象しか残っていませんよ。

こんな僕に対して、富野さんはやはり偉大でした。例えば遠くの方で何かしている人の声を入れたり、日常的な生活部分を出したりして、随分深みが出ていましたね。主人公たちだけでなく周囲の人間が全部生きている雰囲気がありますね。話の中の広さが出るんです。僕がやるかというのとは出てこない。そういうのは富野さんが作るんです。あと、レイアウトも富野さんは奇抜なのを作りますね。僕なんかが考えもつかないことを平気でしちゃうんです。だから空間的な広がりやリアリティが出てくるんです。テレビ画面は大きさが決まってるんですが、その画面を十二分に駆使して広げる技術というのが富野さんから教えていただいていたうれしな思いです。

「ガンダム」はハッピーエンドで一応終わりましたけど、そのあとどうなるのかは僕には全然わかりません。富野さんは伏線を考えたらつしやったんでしょ。これからはそれを考えていこうかと思っています。

大熊伸行

(創造エージェンシー)
・プロデューサー



ガンダムは作品自体は最高だったと思います。まあ基本的には放映時間をまちがえたという事ですね。私共といたしましては、パート2をゴールデンタイムでやるという計画を現在検討しております。だからその企画自体とか、シナリオ、監督、それからアニメーターの人達はすぐれたものを全て出してくれたという事なんです。他の作品等と比較して相対的にいったら、進んでいた作品とか、あの時間にやるのは少し勿体なかったですね。サンライズが製作会社の立場であるように、私共は代理店の立場で当初ガンダムをとらえていた。ザンボット、ダイターン、そしてガンダムという事で、クローバーというオモチャ会社をスポンサーにつけて、ガンダムとい

う巨大ロボットを主人公に考えてきたわけですね。ところがいい悪いは別にして、この作品では、シャアとかアムロとかの人間に、非常な人気が集まったわけです。すなわち、対象のズレですね。TVをあの時間にみる層と、作品の内容が一致していなかったわけですね。もう一つは、TVにおいて当然ながら視聴者は強く、基本的にいいものはいないと判断し、評価したんですね。ガンダムに登場する人間のキャラクター自体に、今の年代の女の子が求めている一つのあこがれとか、希望とかいうものが合致したということがあってはいないでしょうか？

——再放映は現在、全国のTV局からひっぱりだこで相当やっていますね。ですがこのすばらしい企画をさらに発展させていくためにはやっぱり、リビートだけではしょうがないんで、そのためには映画とか、パート2を製作していかないと、大きな人気はでないですね。勿論パート2でも、最初のメイン・スタッフの方々にまたやつてもいいと思います。でも、そのためにはそういう条件をそろえなくてはできませんから……。一応パート2は来年の10月頃をめどに実現させたいと思っています。

作品の質と現在の人気をささえるのは、基本的に富野+安彦ラインでしょうね。それは、物語が勧善懲悪ではないという事や、アムロとかシャアに備っているスター的な要素でしょうか。

長崎重信

(作画)



はくは最初ガンダムは従来のロボット物だと思っていたんです。ところがやっていくうちに、表面ばかり追っている普通のTVSFとは何か違うというか、めずらしくドラマに重点をおいた演出に重みのある作品だったのに気づいて、新鮮な面白味を感じました。何か今までとは違ったイメージを出そうと、コンテでも考えたのがよく感じられるんですね。作画はしんどかったけれども、半分は楽しんでやっていました。爆発なんかでも32話などで、新しい手法をどんどんやらせてくれたしね。好きなキャラは(はくは全然やっていないのだけれども)マチルダですね。安彦さんのキャラっていうのは難しく……好きなキャラクターでも描けなくて苦労しました。その中

でも特に難しかったのは、シャアとセイラが再会して芝居するところですね。その微妙なところが大変でした。モビルスーツではドムが新鮮だったんじゃないかな。歩くでもなく飛ぶでもなく……というところがね。大げさなデザインの下には、リアル感というか、重量感がありましたね。話的には13話の「再会、母よ」というのが面白かった。ロボット物にはない雰囲気が出ていたと思う。でもぼくがこの回を担当していたらメチャクチャになっていたんじゃないかな？ 大体ガンダムってというのは設定が面倒くさい上に、担当話数にとぶので、その間がわからずに苦勞するんです。富野さんの作品でもダイターン3などは一話完結だし、疲れないし、好みからいってもガンダムよりダイターン3の方が好きですね……本当は。

ぼくは後半抜けてしまったんですけども、第一話を担当した時には安彦さんが作監で、随分と勉強になりました。大変な思い出ばかりで、作品も全編は見えていないのですが、41話の「光る宇宙」など非常によかったと思います。何だかよくわからなかったけれども、きれいだっし。放映中は2クールで切られるだろうとまで噂していたのに、まだ人気があるのには驚きますね。富野さんなんか、小説も書いてたりして本当にスゴイ！ あの小説に合わせてアニメを作画したら、TVのよりはもっとなつぽくなるんじゃないかな？ とにかくロボット物はアニメが一番ですよ。



植田益朗 (制作進行)

僕にとっては初めてのアニメの仕事で、全然わからないところから入ったので、最初はアニメーションでこんなものかなあと思っていましたが、やっていくうちにしんどくなりましたね。でも、皆さんが色々教えてくれましたし、それが富野さんの作品だったのはいい出会いだったと思います。

僕の担当したものにはあまり面白いものはありませんでした。自分がやったから作品を客観的に見れないのかもしれないけど、どれにも思えない出はありますが、一番残っているのは最後にやった「光る宇宙」です。よく人に言われましてね、よくここまで作れたとか、よくここまで好き勝手に幻想を出したとか……。たしかにイメージシシーンは多かった。

僕の立場から言えば、そのイメージを各スタッフに伝えるのが大変でした。

進行というのはあくまでも制作の仕事だから、管理しなくてはなりません。ある意味では制作と演出は、どこかでぶつかり合っているところがあります。放映日が決まっているから納品日も決まっている。そこから逆算されて出てきたスケジュールに遅れるわけにはいかないんです。だから演出の人に、好きなだけ時間やるから本当にいいものを作ってくれないで、とてもじゃないけど言えない。ある意味ではどこかで泣いてもらわなくてはならないですね。それがちよつと辛かった。

「ガンダム」の作品について言えば、前半と後半で作画の人が違ったけれども、前半の人でもよく雰囲気をつかまえていてくれました。全体として動きも良かったし、いい出来の作品だったと思います。

スタジオの雰囲気は良かったけれども、状況としては大変でした。文芸もいないし設定制作もない。チームワークでカバーしていたみたいところがありませんでした。また、富野さんの作品の場合、製作する人はそれなりにリラックスしようとする傾向があります。緊張感ある作品を作っているから、そうでもないし心身共に疲れてしまっていますからね。

こんなことも含めて色々ありましたから、スタジオ内での打ち上げの時に、富野さんが、あなた方がいなければ「ガンダム」はできなかったと言ってくれた時はうれしかったです。

初公開 トミノメモ

◎ガンダムスタッフはよくこういう。

「いやあ、トミノメモには泣かされたよ」

このトミノメモとは「ガンボイ」として富野氏が執筆したガンダムの一話から五十二話までのシノフシスなのである。

物語の大きな流れは三十六話分までほぼ同じであるが、三十七話以降五十二話までは本編とかなり異なっている。

特に後半は行間が把握できないと物語が全然分らなくなってしまうのである。

決定稿のものは本編とさほど変らないので五十二話構成のこのメモを掲載してみよう。

「機動戦士ガンダム」のフィルムはこのメモから出来上つたのである。

ファン必見といつて良いだろう。

第37話 バロムの罠

キシリア少将は、マ・クベが救出したドズルの忘れがたみをひきとると、マ・クベとバロムに、連邦軍の追撃部隊の殲滅を命じた。マ・クベは、特注してあったモビル、スーツ・ハクジ（剣技モビルスーツ）を受領する。

バロムは、面白くなかった。シヤア大佐に会い、2人の間に謀議が成立した。マ・クベをなきものにするため、サイド4におびき出す作戦である。（勿論、シヤアは、バロムにそれを感じさせないように、もちこむ）

出撃していった、マ・クベ隊は、月をかすめつつあったWベースと接触をする。

バロムは、重巡チベをWベースに向け、サイド4を背景に戦いを挑む。

バロムは、宇宙突攻用モビル、スーツ・ドワッジ。数機で、強襲をかける。

Gパーツのどれかで発進したアムロらは、Wベースに直撃を受けさせてはならぬという条件のもとで戦う。作戦終了後、補給を受けられないWベースは、極力、戦いを避けねばならないからだ。

アムロとバロムの戦いは次第にサイド5に

流されてゆく。（サイド5は、一、二のコロニーを残して全滅している）

一方、Wベースは、重巡チベとの交戦で危機に陥る。それを救出するのが、かつてのルナツーの基地司令ワッケインである。戦艦マゼランで。

バロムは、ガンダムと交戦中、シヤアとの約束を思い出した。

「これ程、早く約束が果せるとはな。」

バロムの。ドワッジ。は、サイド5の。テキサス。に逃げこむ。かつて、大規模牧畜用に建設されたコロニーである。

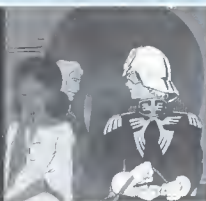
戦前、牧畜と観光を兼ねて作られたものである。

アムロとバロムは、刺し違える形で戦いを終了した。ガンダムも損傷を受ける。がサイドに空気があったのは幸いである。

アムロは、吐息をついたものの、Wベースと、どう接触をとるか……。

その頃、シヤアは、ラアラと、エスパーの研究者、フラナガン博士を伴って、。テキサス。サイドに潜入していた。

——マ・クベの名譽挽回意識



第38話 テキサスの攻防

シアアの目的は、単に、マ・クベを討つことではない。

ラアラに、戦いを教えることであり、フナガンに、ラアラの脳力を、いかにモビルスーツに伝えるシステムを完成させることであるのだ。

サイド4の、テキサス。その周辺は、ミノフスキー粒子が濃い。敵、味方の通り道故の宿命である。

アムロは、テキサスが、無人の地でない事に驚いた。遊牧民の生活をする人々が、生き残っているのである。

そこで、アムロは、カスバル・ペイリーと知り合う。ジオンに憎悪を燃やす少年である。十七才。彼の情報で、ザンジバル・タイプの戦艦がテキサスに入港している事を、アムロは知る。

ガンダムと一機で殲滅できるのか？ アムロは、港に潜入した。

シアアは、マ・クベ隊に対して、『テキサスのガンダムを討つべきではないのか？私は討伐隊の命令を受けてはいないので、充分の戦力を持っていないのでは。』と、通信した。

とは、いえ、シアアは、重火砲タイプのモビルスーツ、ギャンで出撃をした。

再会である。シアアのノアムロの、アムロは身ぶるいをした。が、その感激（？）もつかの間、マ・クベが、テキサスに到着した。

シアアの言をもっともしたのである。マ・クベは、ハクジに搭乗して、自ら、ガンダムと対峙する。

剣技の激突。

そして、シアアは、ひき下り、ラアラに言う。

「よく見ておけ。白兵戦のあり方を。」

そして、両者の斗いの途上、シアアは、仕掛けたのだった。マ・クベを討つ仕掛けを。

ハクジは、シアアの罠とガンダムの攻勢の中で、散っていった。

「私に似た俗物は、嫌いだ。」

カスバル・ペイリーは言う。アムロ、俺を連れていってくれ。いい軍人になる。

アムロは、微笑した。

「いだろう。僕の隊長が、承知するなら……。けど、個人的なうらみなど、軍人になつたからって、晴らせないよ。」

シアアは、ラアラに言う。

「戦士になるのが、なぜだと思ふ？戦いをなくすためののだ。」

そういうシアアに、ラアラは心酔する。そして、自分の持つ能力が、新しい時代の人類の幕開けともなる事を知るのだった。

「私の力を、シアアのために發揮して、新しい時代を見たい。」

フナガン機関は、シアアの命令に従って、ニュータイプの人間のリスト・アップにかり、電氣的に能力の拡大を図るシステム最終テストに入っていた。

第39話 シアアとセイラ

三すくみといえた。Wベースとマゼラン。シアアのザンジバル。指揮官を失ったマ・ク

ベ討伐隊。

キリシアは、シアアに、マ・クベ隊を統合する事を命ずる。

その隙をついてWベースは、テキサスに潜入、ガンダムとアムロの救出を図る。

しかし、それは、シアアとその部下ジン・ライム酋長のモビルスーツ、ドワッジの妨害を受ける。

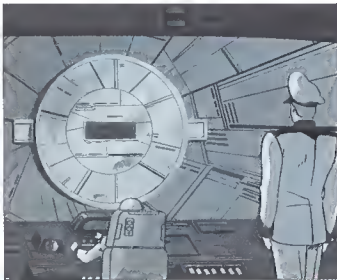
シアアは、ラアラとソフィアを無事。テキサスから脱出させねばならなかった。が、これは、ワッケインの、マゼランに妨害される。

この三つともえの斗いの中、アムロは、シアアのモビルスーツを破壊する事に成功する！「ギャン」の終焉である。

そして、テキサスの荒野を逃れるシアアは、アムロ救出隊の一人、セイラと出会う。

やはり、兄妹であつたのだ。

② 父がジオンを創つたのも、人類を救つためだった。それを、ザビは、独裁国家にし





た。もう一つの理由は、父の味方だった人々を暗殺をした。

⑤ だからといって、あなた一人で、ザビ家に対しての恨みを晴らそうとして、何が残るの？

⑥ この戦争を早く終わらせる事はできる。ギレンという男は、用心深い男だな。私ごとでは、近づけないのだ。

⑦ 本当のシャア・アズナブルという人。私は知っていたわ。

⑧ 彼と暗殺されたいから、私が名前を貰った。

⑨ ……!?うそでしょ？

⑩ 木馬にいたのはやめる。地球へ密入国できるくらいの金はおいていってやる。私のザンジバルが脱出する時に。

打倒、ガンダムの手段を選ぶわけにはゆかなくなっているのだな。

⑪ それも、恨みで？

⑫ 違うのだ。男としての意地。プライドだ。……もつと違うな。ガンダムのパイロット……アムロか？ 奴の意志が、私を刺激する。ラアアもそう言っていた……

⑬ ラアア？

⑭ ……金は受けとれ。地球へ戻るのだ。と、シャアは逃亡する。

この会話の途中から、ブライトがこれを盗み聞きしてしまふ。

アムロは、ガンダムで、ライム曾長の「ドワッジ」を破壊したが、彼の防戦があつたおかげで、シャアのザンジバルは、テキサスを脱出した。

ワッケインは、ザンジバルの火力が、マゼランの倍する事に舌をまいた。

セイラは、テキサスの港で、カスバル・ペイリーが見つけた小包を受けとるのだった。

シャアの残していった金であった。表書きには、セイラ・マス殿。中の便箋には、唯一行。やさしきアルティシア・ソム・ダイクンへ。キヤスバル・レム・ダイクンより愛をこめて。

ブライトは、立ち尽すセイラに声をかけた「セイラノ出港するぞ！」

その声にふと逸速するセイラに、アムロはいう。

「怪我でもしたんですか？ 荷物持ちましよう。」

「あ、ありがとう。アムロ。」

アムロは、セイラに違う顔をみた。

ハヤトは怪我をして、フラウが大騒ぎする。



第40話 シャリア・ブル 激進

ギレン・ザビは、木星から帰ってきたシャリア・ブルと謁見した。

「ガンダムというモビルスーツを使いこなす少年がいる。唯の兵士ではないようだ。君のような超能力的な、そう、ニュータイプだ。」

「ざれ事を……。私の能力をぞ、所詮、や、勘のよいことぐらいで……。」

「まあいい。キシリアの部下にシャア……大佐になったはずだ。奴が、ガンダムの情報に詳しい。奴の処に行つて……できれば、ガンダムのパイロットを調べてみてくれ。」

キシリア・ブルは、モビルスーツ「ゲルググ」を与えて貰った。（ラアの使うもの、前期タイプ。シャリア・ブルの予知能力を探知するシステムが搭載されている。）

ブライトは、生理的にセイラを拒否したかった。こともあろうに。ジオンの創設者、ジオン・ス・ム・ダイクンの忘れがたみが、同じ乗組員にいたとは……。

セイラは、さすがに沈みがちであった。アムロは、そんなセイラに、初めて興味を持った。

「何があつたんです？ 戦いが厭になつたんですか？」

「……そうね。厭ね。……サイド7に來なければよかった、と、今になって思うわ。」

セイラも、アムロを対等な相手としてみるようになってきた。

「あなた、大人になつてきたのね。何かしら？ とうとう、するどすぎるくらい少年……大人ね。何が變つたの？」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」

「戦場慣れでしょ？ きつと……。」



シャリア・ブルは、ラアラとシャアに会った。彼は、驚愕した。ラアラの脳波を通して、シャアの心が読めたのだ。

「ザビ家への怨念?……どうするのだ!? ジオンを乗っとりとうとする野心家——とも思えぬが?」

シャリア・ブルにとって、ラアラが超能力者（ニュータイプ）として十分な戦力である事は判る。それを探し出したシャアの能力も判る。しかし、それは、ジオンにとっては不吉である。

「ガンダムとそのパイロットは、ニュータイプなのか?」

シャリア・ブルの、ゲルググは発進する。シャリア・ブルは、あつという間に、マゼランをほうむり、ブライト、アムロらは（セイラの事に、心を奪われていたのだろう）その防御にまわりきれなかった。（ワッケインの死）

Gスカイの高速から、ガンダムへの変化はシャリア・ブルにとっては、隣をつかれる原因ではあった。

そして、ゲルググとガンダムの戦斗は、熾烈を極めた。アムロは、戦士として初めて錯乱した。

心をえぐる様な斗いに、アムロは、全く異なった人間を、ゲルググの中にみた。

アムロの予知能力ともいべきものに、感應の目覚めが起ったのだ。アムロは、ニュータイプの種になった時、それらの意志を消すという戦術に出て、ゲルググを倒した。

ラアラは、その斗いを見て、シャアに言う。「敵にしてはならない人です。けれど、戦いの中で、私は、もっと成長したい。シャア。あなたのお役に立てるように……。」



「勝てるかな?」

「判りません。エルメスの完成を急がせて下さい。私には、あの少年の意志の力を越える自信はありません。」

第41話 ルナツー防戦

ギレンは驚愕した。そして、彼ははじめて月のキシリアの基地、グラナダへ降りた。

連邦軍がルナツーへ進攻してきた事と、シャリア・ブルが討たれた事。この二つは、重要な意味を持つ。

「連邦の進撃作戦が整いつつある事。もう一つは、新しい人類が生れつつあるということだ。シャリア・ブルの予知能力は、未来を洞察するために必要であった。その力が、連邦の中にも生れつつある。これは、人類史上重大なことだ。新しい、進歩が連邦から始る。これは、許せぬ。シャリア・ブルの部下たち

の中から、そのニュータイプをよりすぐった部隊を、ガンダムにむけねばならぬ。」

「シャア大佐は、すでに、その用意をしておられます。」

「ならば、打倒ガンダムは、シャアに任せよ。貴下は、ルナツーに集結しつつある地球連邦宇宙軍の殲滅を!」

キシリアは立つた。三隻の新型戦艦、グワジン、宇宙空母、ドロス。そして、重巡チベ、ムサイ等の艦隊の発進である。

Wベースには、極秘指令がルナツー司令のハムスキー提督から届く。ルナツー近くの隕石群集積エリアにひそみ、ドロスを撃てと!

同時に、キシリア艦隊は偵察隊に勇将タルを出撃させた。モビルスーツ、ガッシャの山越えハンマー。という恐るべき武器。それに、二機のグフ・タイプ。

隕石帯で、Wベースは、ゲルにキャッチされた。

セイラは、自分をふつとるためにガンタンクで出撃させる。カイのガンキャノン。ハヤトはGバーツで援護するものの、ガッシャの山越えハンマーは、隕石の影から、味方機を狙い撃つてくる。

アムロは、セイラの危機に、ついに、彼の能力。危機を予知。する力が発揮されてセイラを救うと同時に、ガッシャを殲滅した。

そして、空母、ドロス。の前に、Wベース突攻の道を開いた。

そして、ルナツーの連邦軍艦隊が発進した。ガンダムの量産タイプ、G.M.と、ジオンのモビルスーツが、宇宙に激突する間、ガン



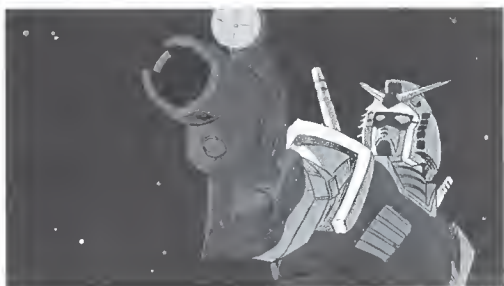
ダムとWベースは、ドロス¹の腹にもぐりこんで、これを殲滅した。

キシリアは艦隊の損傷を恐れて、撤退をした。

アムロは、セイラの病室を見舞う。

「あなたは、私の危険を先読みしたのではないかしらね。……以前、マチルダさんが言っていたわ。あなたは、エスパーかも知れない。」

「そう決めつける理由は、なんですか？ ひょっとしたら、セイラさん。あなたも、ニュータイプなのですか？」



第42話

グラナダへの道 (シャアの敗北)

セイラは、シャアの金をみんなに分けた。自分も一枚を記念として。

「これに、兄への惜別をこめて！」と。

ルナツーで補給を受けるWベース。アムロは、呼ばれた。ララアにだ。

全く前兆のない処へ、アムロは、Gスカイを発進させる。と、そこにアムロは、エルメスを見た。

それは危険の信号だった。アムロは撤退する。

と、シャア自らの操縦するモビルスーツ、キケロガ²が襲う。

アムロは、ララアにおびき出されたのである。

シャアは、キケロガの絶対的パワーをもつてしても、ガンダムを撃ちとれぬ事を知

る。

土壇場でガンダムに逃げられるのだ。

しかし、アムロの方も、シャアが見る程に強くはなかった。ガンダムの機動力が、アムロの反射神経についてゆけなくなっていたのだ。メカニズム的に……。

アムロはひき退り、グラナダ攻略³に向うWベースに合流する。

そこに一人の男が待っていた。モスク・ハシ博士⁴。

帯電磁波の工学的応用⁵の権威である。

つまり、ガンダムのメカを、電磁でつづみ、より早く、なめらかに動かす手当てをしようというのである。

「ジオンのソフィアという男の理論を、君の父上が流してくれてな。」



「父は、生きているのですか？」

「フラナガン機関に殺された。これは、確実だ。」

モスク理論の応用は効果絶大であった。シャアのキケロガを殲滅する事ができたのだ。

シャアは、危機一発の処、ララアのエルメスに救出された。

シャアの防衛線は、破られ、連邦軍の艦隊は、グラナダへ向う。

セイラは、シャアが救出されたらしいのを残念に思う。フライトに言う。

「兄は、鬼子です。」

その本心かららしい言葉に、フライトは、セイラへのわだかまりが消えてゆく様であった。

第43話 グラナダ攻略

シヤアは、自らのザンジバルを半身不随にしつつも、連邦軍の二隻の戦艦を沈めて、グラナダへたどりついた。

連邦の攻撃は始まった。

Wベースも、その中堅を担い、グラナダに攻撃をかける。

ラアラも、出撃をするという。シヤアは止めた。

「戦場を知れ。それに、エルメスは、^{ドク}が出来てはじめて、お前の能力も発揮される」

キシリア指揮する重モビル・^{※10}アッザム^{※11}もシヤアの手にかかると、軽量モビル・スーツ以上に働く。連邦の^{※12}G.M.の大半を殲滅した。^{※13}(アッザム改となる。2機か3機)

Wベースは、その楯となるべく前進をする。

ハヤトもセイラもカイも参戦をする。

アムロもだ。ハヤトの決死的な活躍が、

アッザム^{※14}の弱点を発見する。

ガンダムは、総力を決して、ガルバルディを殲滅した。

その時、キシリアは、シヤアに言う。

「生きのびられるとは思えぬ。恨みをはらすなら、剣の一太刀とも、私にくわえたらどうか？」

「知っていたのか？キシリア？」

「ジョン・ダイクンの忘れ形見、キヤスバル・ダイクン。もつとも、私は、お前さえ、使って、兄のギレンを倒そうと考えていたのだがね。」

「お言葉に甘えさせて貰おうか！」
シヤアは、キシリアを刺した。

そして、シヤアは、二度まで、ラアラに救出されて、グラナダを脱出する。

ギレンは、歯ざしりをした。

「月がおちた!」

デギンは、ギレンを呼ぶ。

「和平の潮時と思うが……。」

「すでに遅すぎる。同時に、私の得た情報によれば、連邦軍の力も、月までです。ジョンに進攻するには、時がかりでしょう。」

彼の自信は、シヤア生還の事実と、もう一つの計画による自信に裏づけられていた。

第44話 エルメスのラアラ

グラナダを占領した連邦軍兵士の間に、恐怖が拡がった。

モビルスーツのパイロットが、ジョンの小型モビルスーツの前に、悶死^{※14}するという恐怖である。

Wベースも、その恐怖の声をキャッチした

「ラアラ?……ラアラ?……?」

それは、囁くようでありながら、恐怖を伝える。

それは、連邦軍の新造戦艦^{※15}アメリカ^{※16}が撃沈された時の叫びであった。

「シヤアの処にいたラアラか?」

アムロは、出撃した。いや、ひかれた、というのが正しいのかも知れない。

セイラは、ミライは、アムロのその行動が、アムロにとって、連邦にあっての危機と悟る。

ミライとセイラの勘が複合した時、少なくとも、アムロの危機だけは察知できたのだ。

セイラは、カイ、ハヤトを促してアムロを追う。

ミライは、ブライトに、彼等の行動の身勝



手を認めさせた。

そう、危機なのだ。

ガンダムは、エルメスと連動する^{※17}。ドクに攻撃され、全くのピンチにたった。

セイラの死をかえりみぬ防戦の中、ガンダムは立つ!アムロは、ドクを操るエルメスの本体を、地中にみ込んだ。

ドク。数体を殲滅して、セイラを救出したアムロは、地中にひそむエルメスへ向う。

そこには、ラアラの狂暴が待つのだった。

セイラは、重傷を負いつつWベースへ帰還する。彼女の再起はあり得るのか?



第45話 遭遇／ララア

月の地中を通して攻撃するという事があり得るのだろうか？

考えている間にはなかった。Gブルの装甲を通して、アムロはララアのエルメスが、アムロ自身にターゲットを絞っているのをノ

一方、ギレンとの会談を終えたシヤアは、ララアを追う。

半エスパーであるバックカデリアに従えて。彼は、シヤア・ブルの部下であったという少年である。(モビルスーツ。ガルバルディ)

カイ、ハヤトらは、シヤア、バックカデリアの防衛線を張る。

地中深く、ガンダムとエルメスは対決する。その斗いは、憎悪なのか？義務なのか？理由が見い出せぬ。その戦いの空虚さが、二人の意識の合流が、二人の間に調和を生んだ。

二人の斗いこそ、人の歴史なのだ！

人が越るべき歴史なのだ！

では、次に、人は、何に期待できるのか？

一人の疑問さえも調和した。

二人の推論は明確に調和した。

あるのか？人が、今以上に賢くなるという可能性が。

二人の推論が、一つの未来をかいま見る。力、示せよ。次なる人は、その力、見て、範とする。

二人して疑問を発した時、

バックカデリアが侵入する。

「共に死ね！ジオンにとって、ララアは、裏切りとなる！」

その叫びをシヤアは訊く。その真の意味は、シヤアとして判らないが、さもありなん、と思うのだ。

ララアは、違う人間なのだ。そして、そのララアと斗い得るアムロも、ララアと同種の人間なのかも知れぬ。シヤアの想像は当たっていたのだ。

「シヤア大佐！ララアは危険です！私にはきこえた。敵の少年とされ合うララアを！」

バックカデリアのガリアアに、カイ、ハヤトらは奔弄されるものの、このバックカデリアの驚きの隠を、ついて、ガルバルディのバックカデリアは散った。

シヤアは、自らの「ガルバルディ」を操り、ララアに言う。

「お前の指図に従う。私は、ガンダムを討ちたい。」

ララアは、絶望した。

「今、斗っている少年は、私の敵ではない。仲間なのにも！」

ララアは、兄とも思うシヤアの要求を、はねつける事はできなかった。

今や、三者の血みどろの斗いが、地中を抜けて続けられた。



時！

ララアは、アムロに、瞬間の憎悪を持つ。シヤアを、三度、救いつつ、ララアは、猪突した。

アムロは、エルメスにとどめを刺した。シヤアを救わがために、ララアは、散った。

ララアと調和してみたあの。夢に、アムロは疲弊した。

病床のセイラのもとに、一つの花束（フ）が届けられた。シヤアからである。

フラウは、ハヤトやカイの手当に手一杯であった。もう、アムロは、遠い人のようにだ。

傷ついて帰国したシヤアは、初めてギレンザビと会った。

「マスクをとらんのか？無礼だな。」

「眼が弱いのです。それに、酷い顔をみせ

た。

たではない。ひどいのです。」

「どこで会ったか？」

ギレンは、シヤアの物腰に、そう思う。

彼は、シヤアが、ラアラ、バツカデリアらを中心とした部隊編成の真の意味を洞察していた。

「……それが破られたというのは、重大だな。」

「はい。ソフィア博士の研究機関を通じて探しだしても、数人しかいなかったエスパーたちです。私自身、ラアラにめぐり会うのに数ヶ月を必要としたのです。」

「ガンダム……、といったな。連邦のモビルスーツ。」

「はい。そのパイロットが、ラアラと同じ種類の人間だったという事は、不幸でした。」

「俗物の私にも判る。これは、危険だ。」

「シャリア・ブルの部隊……もう居ませんか？ 総帥。」

「タルダン。キシリアの特殊部隊だった男だ。同じ、種類のな。しかし、かなりおちる。」

「パワーで対抗しましょう。総帥のゲルグと、ジオングはすでに最終テストを終っているはずですが？」

「よく知っているな。シヤア・アズナブル……なぜ、ムキになる。指揮官らしくもない。」

「ガンダムとは、因縁です。」

連邦軍は、戦力がのびきっていた。

月では、ジオンの残っていたものによる補修工事が続き、Wベースに、ジオン制空圏内偵察命令が発動された。

Wベースが、ジオンの制空圏内に入ろうとする時、グワジン、タイプBの艦、デギンに

接触をした。

すね、会戦！

「和平交渉のルート発見のため、艦長の労をむ。」

二艦は接触した。

なんと、デキン・ザビその人が、Wベースへ移乗して、ブライト以下の人々に会う。従うは、文官でありデギンの秘書クスコ・アル

ブライトが、真の意味で惚れた女性である。

公式の会談の後、デキンは、セイラを指名して、別室で語り合う。

「アルテイシア殿である事は判る。話し方が、母上のトア殿にそっくりだ。」

あなたの父上であるジオン・ズム・ダイクンが、ふえすぎた人類をこれ以上放置してはいけないと、選ばれた人々による地球連邦の管理を考えつかれたのだ。私は、それに賛成したからこそ、ジオンを継いだのだ。が、その後、私のやり方に反対する人々もあらわれ、確かに、私は、ダイクン一派を追放したやむを得ずな。」

「奴隷制度を復活し、ザビ家独裁を目的となさつたからです。父のやり方とは違います。」

「ギレンが、いけないのだ。甘やかすすぎた私も、いかれたのは、あなたでしょう。」

「そうだ……人を殺す。これは、痛いことだ。」

戦艦デギンを連邦に向わせようとした時、ギレンの和平ならじとする意を呈したタブローの。キケログ。部隊が、デギンを襲撃した。大部隊である。ガンダム・チームの活躍。そして、
もはや、これまで。恨みあるなら、

アルテイシア、私を討て！」

「わ、わたしは、兄のキヤスバルとは違います。シヤアといつわつてまで、私恨を晴らしたくはありません！」

「シ、シヤア……」

デギンは死。グワジンタイプもキケログ部隊と共に散る。

その中で、ブライトは、クスコ・アルを救出できたことを、神に感謝した。





第47話

ジオン最終兵器を探れ

ブライトは、クスコ・アルの怪人に眠れなかった。むろん、充分に眠れる状況ではなかったが……。数十個の偵察ロケットは、ジオンの四十二のコロニーの間に放出してある。その情報、逐一入ってくるからだ。

アムロは、クスコ・アルは危険だ。と、ブライトに忠告する。

「あの人は、スパイだと思う。」

ブライトは、それを無視したかったが、アムロの能力は知っている。

「気をつけよう。アムロ。」

そして、Wベースは、ジオンの中に、明確な宇宙船の動きをキャッチする。

アムロたちが、偵察隊として出動する。

そして、38パンチのサイドから、無数と思える慣性宇宙艇の発進するのを目撃した。

「ほら、よく言うじゃない。歴史で習った民族大移動って、こんなこと言うんだろな。」

アムロとハヤトそれにカスバル・ベイリィは、驚嘆した。その宇宙船団（小型ばかり。中に巡洋艦クラスもある）は、古い型のサイドへと吸いこまれてゆくのである。

クスコ・アルは、それがどう言う事か、知らないという。

結局、宇宙艇が一番移動したサイドに進入して、実態を知るしかなかった。

アムロとハヤトは、ロケットの墓場といえる処に、Gフルを隠して、潜入する。

そのサイドは、一番、古いタイプのサイドで数年前に放棄されたものであった。

そこには、不満が渦まいていた。
「なぜ、急に移動させられたのか？ 強制疎開なんて……。」と。

ジオンの国民も何も知らされていないと知ったアムロたちは、（兵隊にきいてみたりもする）38パンチに潜入する決意を固める。

が、38パンチは、強力な軍が展開していた。アムロたちは、発見され、新鋭モビルスーツ、ガラバ^{※18}に追われる。

ガラバ^{※18}の強大なパワーに接した時、アムロは思った。よほどのパイロットのはずだ。移動させた理由くらい知っているかも知れない。

アムロは、未知のパワーに接しつつも、なんとか、パイロットを捕えたいと思う。

それ故の苦戦の果、アムロは、パイロットを捕えた。

アムロの予測は、当たっていた。

パイロットは大佐である。

しかし、彼は言う。

「ソーラ・レイ作戦と名づけられてはいるが、実態は知らん」と。

クスコ・アルも知るわけはなかった。

「防衛線をはるにしても、けっして、得な位置ではないはずだが？」

ブライトは、疑問に思う。

そして、Wベースは、伝令を乗せたロケットを連邦軍の前進基地へ発信させた。

シャアは、己れの新モビルスーツ、ガラバ^{※18}の受領に行く。

そして、ゲルググ^{※19}とさらには、ジオング^{※20}というニュータイプ^{※21}のモビルスーツの性能を知るためでもあった。

能を知るためでもあった。

第48話 ジュピター船団を撃つ

シャアは、ギレンに上申する。

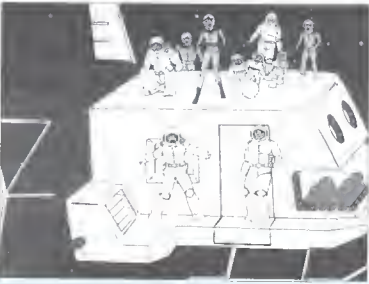
「ゴラの前歴を調査しました。ゲルガンよりすぐれたニュータイプです。ゲルググに乗せるのは彼になされたいか？」

「ゴラは、戦斗員ではない。シャリア・プアルに続く指揮者たる男だ。ゲルググに乗せたくはないな。」

シャアは、ギレンを本当に俗物と思う。ソーラ・レイの計画を話した時から、ギレンは連邦に勝利するつもりでいる。

「しかし、国民を苦しめすぎる国家が勝つためしかない。戦後の政治を自分で治めるつもりでいる。」

シャアは、ギレンをもう殺そうと思った。しかし、ゲルググにしても、ジオングにしても、ガラバにしてもだ。ガンダムを倒した



めの最有力モビルスーツだった。ギレンの力をもつてして、初めて製作し得るモビルスーツだ。

ガンダムを倒し、アムロに対して快哉を叫びたいとも思う。ギレンは、すでに、いつでも倒せるのだ。

「俗物は俺かも知れん。仇うちこいどわり、子供に対しての競走心が、いまだ消えんとはな。」

ヘリウム3を運ぶ船団が木星から帰国する。その殲滅は、現在のジオン軍の三分の一の戦力減を意味する。

Wベースのもとに、マゼランタイプ二艦。計十三機のモビルスーツと共に、木星船団に襲いかかる。(このタイム・ラグを連邦はいついさつきキャッチした、として)

クスコ・アルは、動揺した。伝令用ロケットを盗み、ジオンに知らせる必要があったからだ。連邦軍は、これを期に、ジオン総攻撃に向かうだろう。

クスコの脱出。プライットは、自らクスコを追うはめに陥る。これは不幸だった。

Wベースは、旗艦ジャワの指令で動けばよかった——艦長代理はミライ。

*20
プライットは、クスコを射殺する。

一方、木星船団を襲う連邦の三艦の前に、援軍としてのゲルダンの。ゲルググが防戦にまわる。

戦斗一過。ゴラは、見抜く、ゲルダンではゲルググを扱い切っていない。

彼は、戦斗の途中で、ゲルググに移乗しようとする。しかし、ガンダムは、早かった。ゲルググを殲滅する。

が、この時、アムロは、ゴラの意志の刺激に戦慄する。

「ラアの再来か？」

その恐怖が、アムロの意志を開花させる。

彼は、ニュータイプになりつつある。

第49話

ソーラ・レイ パートI

ゴラは、ゲルググの破壊の中から脱出した。

ギレンは、沈痛であった。しかし、ゴラはいる。

「私は嬉しい。死地回生の作戦、試してみるとききたようだ。」

シャアにとっては、ゴラは面白くない存在だと思つたが、すぐ、それは現実のものとなつた。

「シャア・アズナブル？ 嘘だろ？ キヤスバ、ダイクン？」

ゴラは、こともあろうに、ギレンの前でそう言つたのだ。

しかし、今のギレンにとって、それが、何の意味を持つのだ？ シャア大佐は、間違ひなく苦戦のジオン軍にあつては、スターであるのだ。彼にガラバを与え、ゴラに、ジョング。を与えて、連邦は充分に叩く事が出来る。

連邦軍が、月の裏に出で来た処で、ソーラ・レイが発動する。ギレンは決した。

Wベースは、敵前ともいえる処で補給を受ける。連邦軍は動きだし、数時間後には、ジオンの制空圏に入るといのである。補給は急がれた。

と、その時であった。宇宙に光が走つたように感じた。見えるわけがないのに！

隊が殲滅された！ 大半！

(これを表現するストーリーが要るわけだ)

Wベースとジャワ(マゼランタイプ戦艦)補給艦が真にとり残された。

ギレンは狂気した。

「連邦の戦力の半分を一瞬に灰にした。残る半分のどれ程がジオンにたどりつけるか！ ゴラ、シャアに申しつける。残存兵力を叩け！ ジオンの勝利、ここにあり！」

シャアは、Wベースと接触しなかった。しかし、ゴラがまずWベースと接触し得た。

ジョング対ガンダム
アムロ対ゴラ

二人のニュータイプは、わずか30秒前の予





知能力を全開して斗った。

そして、アムロは勝った。

憎悪だけに支えられた予知能力（プレ・コグニション）は、憎悪を増幅させるだけだ。

アムロは、疲れ切つてゆくと共に、怒りと願望が生まれる。

これは、ニュータイプの人間のやる事ではない！

アムロは、断定した。ララアとの事は違つた。調和があつた。

第50話

ソーラ・レイ パートII

憎悪を生むもとは、一体何なのだ。

戦争状態そのものだ。戦争さえなければ、これ程までの憎悪は、あり得ないだろう。

レビル將軍が宇宙に復帰した。なぜ、連邦軍が殲滅されたのか？まず、それを知る事が第一である。

アムロは、38パンチに謎があると向う。シャアが待っていた。ガラバで。

アムロとシャアの戦いの中、アムロは、

「謎」をつきとめなければならなかった。

残存兵力を糾合したレビル將軍麾下の戦力が進攻しつつあるからだ。

「私には、ニュータイプの素質があつても、俗物故に、その能力が発揮されんのだ。これ

で、奴に勝てるのか？」

これは、シャアの不安であつた。が、技量全てでアムロのガンダムに對抗する。これだけをとつても、シャアは、ニュータイプと言

えた。

でなければ、この二人、こうも戦い続けら

れるわけがなかった。

二人は、共感している。

そして、遂に目撃する。ソーラ・レイの第二弾が発射されたのを！

38パンチのサイドそのものが、太陽エネルギーを肉包して、そして、一方に放出する。

ただそれだけの事であつたが、その規模が絶大である故に、レーザー砲とも化すのであつた。

レビル麾下の戦力は、一瞬にして消失した！

レビル將軍も消えたのだ！

アムロは絶叫した！シャアもやりすぎとは思ふ。

そのたじろぎが、シャアをして敗北させる事となった。

ガラバは破壊された。シャアは？

彼は生きのこる。が、セイラには判つていた。シャアは、すでに、死者に等しいと！

なぜ、判るのだ？セイラ？そう、セイラもニュータイプ。

アムロたちは、ガラバを討った勢いにのつて、38パンチを破壊した。

アムロたちは、ガラバを討った勢いにのつて、38パンチを破壊した。

第51話 ジオン殲滅 パートI

瀕死のシャア。ジオンの首都に帰る。

「残念だな？こうなつては、親の仇きも討てぬ。むしろ、私が君の胸に剣を刺すこともできるのだが、まあ、やめとこう。むごい事はな。」

「さ、さすが総帥……。今さら、仇き討ち





もない。私は、敵たる人物、アムロに興味を持ちますので」。

「ア、アムロ？」

「そう。あなたを討つのは、彼ですから」

「やめたまえ。まるで、ニュータイプのような口のきき方をする。もう、連邦には、ろくな戦力もない。ジオンは、勝利したに等しい。まして、ソーラ・レイ・システムは、金もかからずに短期間で造れる。君のアイデア、真に二階級特進ものだ。中将にしてやるよ。シヤア。君をな!」

シヤアは、己れのミスがあつたと思つれば、ソーラ・レイのアイデアをギレンに語つたことだと思ふ。

たつた数隻の艦隊が、ジオンの中心に向う。レピルの最後に発した市令の発行である。

「総突撃」

ソーラ、レイに直撃される直前の命令であつた。

アムロも遡進してゐなかつた。今は、判るのである。

目の前の敵が敵なのではない。国家の指揮者たる者を討たねば、戦いは終らぬのだ。

ギレン討つべし。

厚い包囲網は、すでに新型モビルスーツの出る余地はなかつた。そのかわり、数は、絶大に多かつた。

ギレンも、ついに、ゲワジンで出撃する。なぜならば、もう一掃りの戦力しかない。

これを己らの指揮権のもとに倒し、ザビ家一党の力を示す。全ての人類に対して、この強権を示す事は、今後の、階級制確立のために重要な意味を持った。

文官に、何が出来る。市民に何の権力があ



るのか?と、いえる。全て、ザビから発した力である!」

激戦のすえ、Wベース一艦、ついに、ゲワジンに接触をする。

そして、もつれ、もつれて、要塞都市、ア・バオア、クラーへ移つた。

ガンダムとて、すでにボロボロであつた。無敵といえる戦艦を沈め、ア・バオア、クラーへとたどりついた。

「お前たちは、やめろ!敵は、一人だ、ギレンだけなんだ」と、アムロは絶叫しつづけた。

カスバル、ベイリー。アムロにとつての、

真の意味での部下は、こゝで死ぬ。

アムロは、いろいろな意味で、彼に上司としての責任を感じて……。



第52話 ジオン殲滅 パートII

ア・バオア、クラー。要塞基地であると同時に、軍事工廠のおかれてゐるサイドである。

ギレンは、逃げこむ型となつた。が、これは、たかが一艦、たかがモビルスーツによつてひきおこされた事柄とは認め難かつた。

「ニュータイプを、けくみすぎた」。

これが、ギレンの思ひであつた。

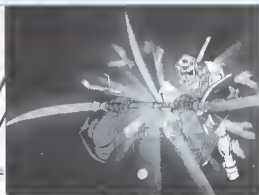
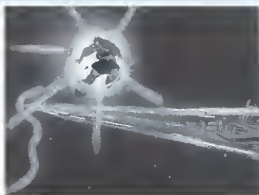
シヤアは、重態をおして慣性宇宙艇で、ア・バオア、クラーへ向う。

「二階級特進。この科白、気に入らんね」。

シヤアのギレンへの思ひである。

Wベースは、大破して、各員は、ゲリラ戦にまきこまれた。

ガンダムは、ア・バオア、クラーの最後の防



御網「ギガン」——（モビル・スーツと地上砲塔のあいだの「子」を撃ち倒して大破する。動かさないことはないのだが、コクピットはむき出し。四方から踊りかかるギレンの親衛隊の前に、アムロは拳銃一丁の闘いとなる。

そして、生身の体の悲しさ。アムロは傷つく。しかし、

「ギレンは倒さねばならぬ！……ならない！……真の悪を倒さねば、……いけない……！」

その思い、絶叫は、そう、アムロ、一人のものではなかった。

アムロは、走る。

と、傍らを、シャアが走っていた。

「君との結着は、後だ。」

あゝ、シャアが走れる！なぜだ！

ブライトが叫んでいる。

「ギレンはここだ！」

と。

ドアをうち破る。

ブライトが倒れる。（致命傷ではない）

そして、セイラが、ミライが走る。

「倒さねばならぬ！」

それは、アムロ、お前の声ではない。

「ア、ム、ロ。でしたね。アムロ……！遊びたいわ。アムロ。……あなたと見た、未来なら……アムロ……あなたと……」

「遊ぶために闘うのか？ ララア！」

それは、悪問だ！それで、いいではないのか？ アムロ。と、彼は、自分に言いかけせる。

ララアの調利。

今、セイラ、ミライ、アムロの三人は、ラ

ラアの声をきく。

しかし、ギレン親衛隊は、次々に、彼らを

倒す。シャアも、セイラも。ミライも、

そして、

「ギレン・ザビか？！」

「ア、アムロ。レイ。ニュータイプだとは

な。」

「そうだ。」

「しかし、もう遅い。このア・バオ・ク

ーは自爆する。」

「一分三十秒後にか？」

「よく判るな。ニュータイプ……」

アムロは、ギレン・ザビを撃った。同時に、

親衛隊の銃撃もアムロを襲う。

「ギレン・ザビは死んだのだ！ 僕を殺して

何になるのか！ 逃げろ！ 全力を尽して逃げろ

！ア・バオ・クは爆発をする。」

どうと倒れるアムロ。

その中で、ララアが呼びかける。

「ア、ム、ロ。行こうよ。新しい時代が、

開けるんだから。」

「あ……！ 行けるかな。ララア……。み、み

んなが、苦しんでいる。」

「救えてあげられるでしょう？ アムロなら

……みんなに……」

「……そ、そうだ。僕と、ララアで見たも

の……みんなにみせてあげなければ、ならな

い。」

破壊されたガンダムに、たどりつくアムロ。

「眼を開いてごらん。意識を開いてごらん

よ。みんなが、みえるよ。」

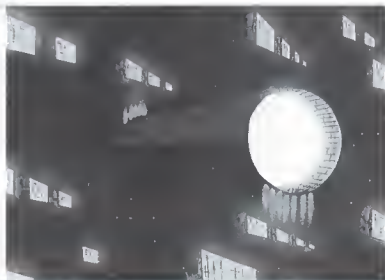
アムロは、言われるままにした。

あ、

みえる。煙の中の、仲間たちが。

「ブライトさん！ 右に出れば、Wベースで

す。ア・バオ・クを脱出するんです。」





ブライトは、自分が何の力で気づいたのかは知らなかった。たゞ、Wベースへ戻らねばと、思い、そうした。……そう、出来た。

「ミライさんノ早くノ上ヘあがつてノ」

ミライは、なぜ自分が煙うずまき中で、気づいたのか知らなかった。アムロが、叫んだのかも知れないとは思いつ、タラップをのぼる。

「フラウノフラウノ僕の好きなフラウノ頑張ってくれ。Wベースへ戻るんだ。」

フラウは、元気になった。

「カツ、レツ、キツカノさノ起ってノ」

「カイさん、ハヤトさんノ死んじやうぞノ起つんだノ起ってくれノ」

カイとハヤトは立つノ走るノ

「リュウウさんノ大丈夫ですよな。」

セイラは目覚める。目の前に、シヤアがいる。いや、キヤスバル兄さんがいる。

「アムロが呼んでくれた。行けるか？アルティシア？」

「兄さんノ」

「私は無理だ。お前だけ、行けいノ生きのびろノ」

「そ、そんなノ……い、いえ、そ、そうね。行くわ。兄さん。」

「あ、……アムロに伝えてくれ。い、少年だと……」

「は、はいノ」
「……アルティシア……」

「!?」

「いい、……いい女になれよ。」

「ノ」

「もう、頑張らなくていい。いい時代が開ける。」

「……………」

「アルティシア……愛している。」

セイラ、いや、アルティシア。ダイクンは走ったノ

「みんな、Wベースにつけるよ。アムロ」

「判るよ。ララア。僕は着けるかな？」

「私もいる。着ける。」

ギガン最後の末梢神経ともいべき系を、ガンダムは、ぶつち切る。

「ララア。君は、どんな女の子なんだ。」

「これから、もつと判るよ。アムロ」

「そ、そうだね。」

ガンダムは崩んだ。ポロボロのWベースから、声にならぬ歓声が上がる。

全員脱出できたのだ。ア・バオア・クーは爆発した。

脱した。この仲間たちは、今、ララアの意志とアムロの意志が見た、新しい世紀へ向けて、出発をする。

人は、種々の変改期を迎えつつあるのだ。

アムロ、ララアらは、それを予見した。時、宇宙世紀0080ノ

「……ララア……遊ばうね。明日……」

アムロは、混濁する意識の中で、言った。

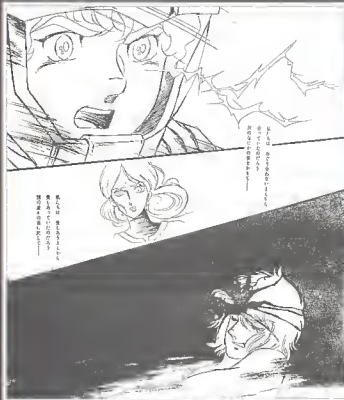


〈元〉

宇宙世紀0080。一月三日。
地球連邦政府とジオン共和国との間に、和平交渉が成立した。

ガンダム ア・ラ・カルト

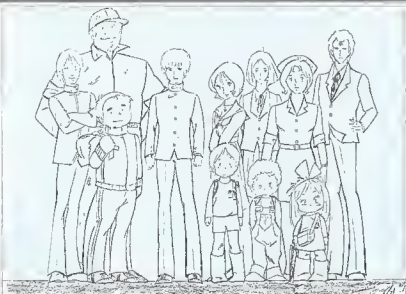
ファンジン大特集



「NIKKY CHECKE VOL. 4」より転載



「WILD CLASS VOL. 4」より転載



「ヘキテ? VOL II」より転載

ガンダム制作の見える協力にあたって

アニメーションを創り続けるための気力と根性を、内からささえ、外から引き上げて下さったのは、数知れない皆様からのおたよりでした。こうした方々の影のはげましが、どれほど心強く感じられたことでしようか。

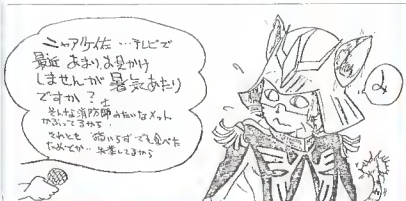
ここに感謝の意を表して、その一部を掲載いたしました。

本当にどうもありがとうございました。

また、掲載はできませんでしたが、数えきれないはげましや御批評のお手紙も、ありがたく受け取らせていただきました。重ねて御礼申し上げます。

最後に、掲載しました連絡先に、確認が行き届かず、変更されたところもあるかと存じますが、なにとぞ御了承下さい。

日本サンライズ 制作スタッフ一同



「てれびとう VOL. 2」より転載

スタッフからのコメント



—スタッフからのコメント—
 にはともあれ、パロディが面白い
 のです。絵もうまいし、本音のガンダム
 ……といったところかな。

機動戦士ガンダムF・C
 〒241 横浜市旭区本村町44-2
 横浜郵便局 私書箱15号



機動戦士ガンダム
UNDAMI

スタッフからのコメント

まだ有名でなかった頃から活動しているライディーンのFCです。ガンダムをはじめ、サンライズ作品の人気に長い間貢献してくれています。充実した地道な本作りには感心します。ありがとうございます。

RFC
 〒170 豊島区上池袋
 2-36-3
 杉山りか

機動戦士ガンダム

スタッフからのコメント

まだ有名でなかった頃から活動しているライディーンのFCです。ガンダムをはじめ、サンライズ作品の人気に長い間貢献してくれています。充実した地道な本作りには感心します。ありがとうございます。

ムフフ
 友愛会誌

VOL.12

ちよとちよと戦士な5
 ガンダムをしてみよう...Q

スタッフからのコメント

本の作りは簡単ですが内容がいたってしっかりしていますね。ほのぼのとした手作りの感じがいいじゃないですか。



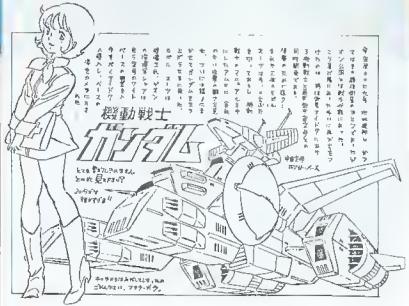
機動戦士ガンダムF・C
 愛知県海部郡蟹江町西の森才勝98
 森山佳代子

アパ
 No.2

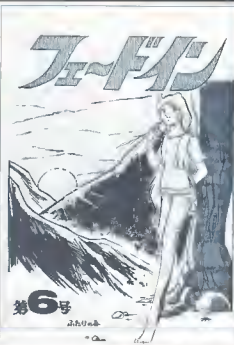
機動戦士ガンダムF・C

スタッフからのコメント

本の作りは簡単ですが内容がいたってしっかりしていますね。ほのぼのとした手作りの感じがいいじゃないですか。

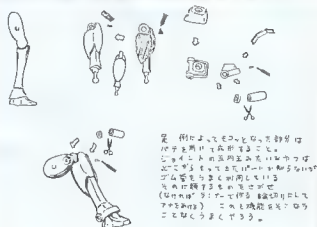


ふたりの会
17
東京都豊島区目白5-10-13
塚本裕美子



—スタッフからのコメント—

サンライズ作品を中心にアニメ、SF、マンガ等幅広い活動を地道に行なっている同好会ですが、その片やらない批評はたいへんめずらしい存在なのです
こども古顔で、いつもバックアップしてくれましたね。ありがと



足 柄によってその部分には
必ずと別れて使用する。この
シールドの両面は、いかに
ぶつかるようにして、その
間をうまく利用している
もの。この部分には、
(白紙) ライトで作る。この
アサキ(白紙) 二枚と機能
を、この
に、この



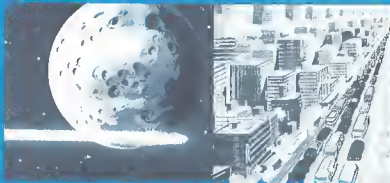
作、この
(白紙) ライトで作る。この
アサキ(白紙) 二枚と機能
を、この
に、この



うわーッ
みめえッ

わあッ

機動戦士ガンダムF・C
〒732 広島中郵便局私書箱94号 代表 荻原薫
スタッフからのコメント
ファン立場から楽しんでるファンキがよくわか
ります。本も立派ですし、内容もありだくさんで
す。ガンダムの作り方がよいですな。



AFC アニメクト
〒770 徳島県杭都郡鴨島町鴨島乙57
I2 福見方 AFC アニメクト



Animact vol. 9

アニメーションFC ホワイトウイング
〒600 京都市下京区西七条西八反田町566
アニメーションFC ホワイトウイング本部

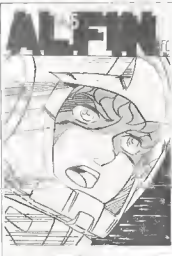


アニメ愛好会コスモポリタン
〒920 金沢市小立野3-27-47
平方 東元恵子



S・F・C・A

新潟県西蒲原郡西川
川崎59-1
栗原美紀子



ガンダムFC 大気圏
札幌市中央区宮の森2番9-400
伴野浩子



R・A・F・C・会誌
〒665 宝塚市栄町宝塚
前郵便局止
田中基代



機動戦士ガンダムファン・クラブ サイ
〒7 1-51 渋谷区笹塚3-39
I2 辻一



機動戦士ガンダムFC
〒630 02 奈良県生駒市生駒台南100
大海方 機動戦士ガンダムFC



機動戦士ガンダム後援会 GSA
〒661 尼崎市瓦宮三井田3-5
丸野浩美



ZGFC
〒490 01 一宮市光明寺天王裏175
ZGFC 小島千里



MGFC
〒824 福岡県行橋市下崎14
石川淳一



機動戦士ガンダム後援会 GSA
〒661 尼崎市瓦宮三井田3-5
丸野浩美

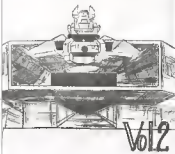


機動戦士ガンダム&アニメC
ファイター
〒133
東京都江戸川区北小岩



(現在活動は行なっていません)
遠藤基代

てれびう



アニメFC「蒼海」
〒560
豊中市岡町南2
14-36
浜口いつ子



機動戦士 第21

Vol.6
Gundam
Grazing



(連絡先不明)

コンパス
アラカルト



AFC パロディ・レストラン
〒636-01
奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺334-3
如月絵梨香



〒153
東京都目黒区駒場
皇川 登

機動戦士ガンダムFC
〒247
鎌倉市今泉134
岡田 方
立石れい

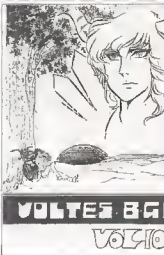


〒176
東京都練馬区旭
本田 登志子



アニメーション振興会
(代表) 浅倉 洸

AMA (アニメニア アーミー)
〒145
東京都大田区上池台4
山川 方
野口 将



ホルテス&アニメ研究隊

星雲アンドロメダ
世田谷区松原3-2-3

ANTARES



星雲アンドロメダ

剣企画
〒985 多賀城市町前2-2-12
北野方 剣企画室

GUNDAM F.A

エプ!



アニメファンサークルアニファア
札幌市豊平区豊平四条1丁目
吉野充栄



anifar Vol. 5

機動戦士ガンダムF.C ホワイトベース
〒194 町田市原町田4-13-8
杉本屋アパート6号室 ホワイトベース編集部

機動戦士ガンダムF.C
ホワイトベース
2

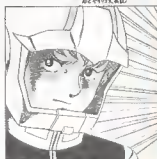


ガンダムF.C.のもりROUGE
愛知県瀬戸市水北町1-68-166
ガンダムF.C.のもりROUGE 加藤方
〒489 続まこと



AFCベリリオス
〒113 文京区本駒込2-15-19
川上育子

VELARIOS



VELARIOS 特集/機動戦士ガンダム

アニメ研究会 フェード・イン
〒271 松戸市松戸新田576-46
丸山涼子



アニメーションサークル オス
〒870 大分上宗方郵便局止
アニメサークル オス



VELARIOS Vol. 1

機動戦士ガンダムF.C
〒335 埼玉県秩市北町1
大山方 葵はるか
25-12

Deous Baza
1

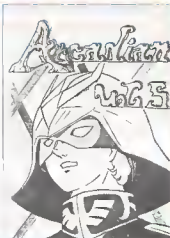


A.F.C Fool・Hardy
〒553 大阪市東淀川区淡路本町2-
松原方 Fool・Hardy



Vol. 11

アニメ&マンガサークルアルカデアン
〒615 京都市右京区西院西今田町4
南佐智子



Alcaidea Vol. 3

〒166

杉並区阿佐谷
河原方

風間洋
34
5



〒107

東京都港区北青
佐脇方

3-8-13
葉流花



A & M アペイロン
(現在活動は行なっておりません)



「ラクララ」
「ホイーン」より転写

ザンボット3 F.C. 改+ガンダム、ダイタ
イン3 F.C. (サイドセブン)
(代表) 都築真



ガンダム F.C. ヘキチ
〒804 福岡県北九州市戸畑区天神2
2-14 佐藤方 ガンダム F.C. ヘキチ7



日本サンライズ非公認ガンダム後援会フ
ァンダム本部 〒545 大阪市阿部野区
阪南町3-18-10 森本恵樹方 森尾恵



A、F、C みるるば
〒983 仙台市志波町5-12

伊勢利枝

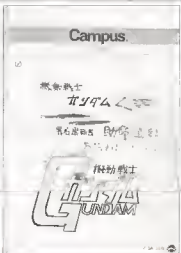


古川憲志 F、C 神奈川支部
〒101 東京都千代田区神田神保町1
25 南神保町郵便局止 F・F・C

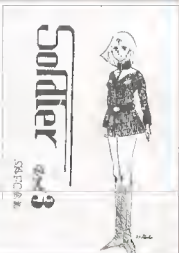


○機動戦士ガンダム 著名運動書
署名運動サークル
代表 橋本持衣子
協力 ホワイトベリス
フアイトーシユ
スタッフからのコメント
ガンダム放映中止反対ノットです。ムチャクチャな内容で
すが、その熱意はありがたく頂戴いしま
した。

署名運動書



S.A.F.C.
島原市浦田上756
坪田方 広岡竜



スタッフ座談会 ガンダムを終えて



総作監——安彦 良和

総監督——富野 喜幸

司会 ガンダムに關しての話は、何人もの人にうかがったのですが、何人かの人に集まっていただけで座談会をするのは初めてですの
で、まず企画の山浦さんに企画意図を、お話し
願いたいのですが：

山浦 あのか、今日は格好の良い話はやめに
して、本音の吐き合いをやってみない。何で
ガンダムをやったのかというと……まあ営業
的な話でしてねエ……これだけはいえると思
うのだけれど、四年近くオリジナルものをや
ってきたサンライズ色というものに現場の人
が執着したという事が、ガンダムを生んだん
じゃないでしょうかね。そうして富ちゃん
と安彦ちゃん、それに現場のスタッフがある程
度作品に食い込んだ、というか意固地になっ
た部分があつて、自分に妥協しないで作つた
ことが結果として成功したんじゃないかと思
うんですよ……

富野 わあ、それ半分以上外交辞令だな。結
果論は認めたくないですね。企画の段階から
いったことだけど、劇場版にしてもいいよ
うな話に作ろうって……でも本気になつてそ
ういうことを考えてやつていたらどうなつた
でしょうね。

山浦 やつぱり「何かをやんなきゃいけない



企画部長——山浦 栄二

脚 本——山本 優

脚 本——星山 博之

んだ”ってというのがスタッフの頭の中にあったのは事実だよ。

富野 うんそうだね。

安彦 何かあったというよりも、何がなかったかが問題なんですよ。今までと違って、周囲からの意見がなかったね、これがとってもありがなかった。

星山 意見を山浦さんたちが排除してくれたんでしょ。

富野 そうですね、現場には余計な意見はほとんど入って来なかったですね。

安彦 意見が入ると、我々飲み込みがいいから、「あつそれじゃ、こうしよう」なんて考えて挫折してしまうから……もつとも、まるで意見がないものだからこれでもいいのかな、いいのかな……と言いながらやっていった部分もありますね。

富野 一番苦しい時期に山浦さん、伊藤さんが、意見をシャットアウトしてくれたことはすごくありがたく思ってます。

山浦 そうはいってもさ、これも開き直りなんだけど、フィルムが完成しちゃったら外から何いわれても、もうどうしようもないじゃない。もうあとは現場を混乱させてもしようがないから、意見消しちゃうわけ、なんか判ったような、判らないような話だね。

安彦 そうだね、意見が少なかったの、もうひとつ、会議が少なかったね。

星山 あれは少なかったというよりゼンゼンなかったという感じ……

安彦 2、3回ですね……どうも会議って好



きになれないんだ。ものを作る上で、意味のないような会議がなかったということは、非常に作家の個性が素直に出せるんですよ。会議ばかりやっていたら、スタッフの個性が互いに薄めあっていったかもしれないね。

星山 それは言えますね。

安彦 たとえば、「なんだ、このトミノメモは？さっぱり判らん！」でことで、これを議題にして会議をやらうよ、なんてしてたら結局何も判らずに終わったと思うね。

山浦 ガンダムは、テレビ局も作品として認めてくれていたんだよね。だからそれを前提としてプロデューサーの関岡さんが、富ちゃんとテレビ局の窓口になってくれたでしょう。おかげで局に直接行って、色々な意見を聞かされて混乱するってことがなかったね。

富野 局がガンダムを良く理解してバックアップしてくれたのは助かったな。多数数の意見を生で聴くより、テレビ局の意見として消化された話を聴く方がわかり易いからね。いろんな意見を聴くと、自分では排除しているつもりでも、自分の個性が弱められていくような気がするから……

山本 たとえばガチガチの管理体制の中で、シナリオの一本一本管理されちゃうと上のOKが取れないと進まないから……出しても引つ込めちゃうたりしてね。

安彦 局や代理店の人が、色々なのは、その作品に期待しているからだと思うの。何もいわないのは、ガンダムが期待されてなかったのかもね。



全員
(笑い)

山浦 いやそうでもないよ、局の人も代理店の人も、「ガンダムはいいねえ」って話してくれんだ、行くとも必ずね。何が悪いかって話も出るんだけどさ、早い話、五時半にやってくるのがヤバイというわけ。7時台にやる番組だよこれは、なんていわれてね。(笑)

まあ、結果としては良かったんじゃないかと思うんだ。

富野 結果論で、話はして欲しくないんだな
あ、これだけは言わせてよ。

安彦
しかし、この話を読んで、読者が喜ぶ

んですかね？

星山 うーん 疑問ですね。

山浦 まつ編集の人にまかせましょう。

多少の不満はあるけども……

富野 わかる、それとっても良く判る！

山本 僕もさ、四巻で色々書いたんだよね。

「本当にこんなきつく書いていいのかな」と

思いつつね。でも編集の人が「富野さんが、恨み事を全部書いて下さいといってました。」というから、遠慮なく書いてやった。

富野 うん、それ僕の希望だったんだ。読んでさ、優さんの言いたいこと、すっごく判
つちやうの。で、読みながら思うんだよね、
「こんなもの読みたいくない！」ってさ。



●機動戦士ガンダム記録全集について

——訂正とお詫び——

○本文掲載の、山本優氏のガンダム街で次の点誤りがありましたので訂正してお詫びいたします。

●本文208頁の下段25行め

「ガンダムの顔と安彦氏が表現出来たのは、
を

●同27行め

「そして、記録されるフュウング（保存）
ファイリング

●本文209頁の上段25行め

「プロと自称するほどの仲間たちは、
僕

●本文210頁の上段6行め

「…のは演出的無垢である」といった風の
無能

●同中段4行め

「ぼくはガンダムの術の念にふれたかった」
芯



全員（笑い）

富野 でもこんな石の投げ合いみたいな話を

しててもさ、スタッフがこうやって会って話

をするって事、他の会社じゃ有り得んのよ。

星山 ニュタイプじゃないけど、スタッフ

がどこかで相手を信用しているんだよね。

富野 そりゃあそうさ！ 僕だって今日は優

さんが来る事知ってて、ちゃんと来たもん。

嫌いな奴ならスツボカス。 （笑い）

山本 まあね、あつそうだ編集の人さ、四巻

の僕の文章で五ヶ所誤植がありましたんで直

しといて下さい。

司会 どうもすみません。

山浦 でもね、人間どこかでさ、「何を！」

っていう気持ち持ってなけりゃ、いい作品な

んで創れんのじゃないかな？

星山 仕事をやってる時に頭に来なかった

らウソだよ。僕なんか富野さんとは仕事上の

言い争いはしょっちゅうやってたもん。

富野 そうだよな。頭に來るっていえばイス

タの若い連中がそうだったんだよね。安彦が

倒れた直後さ「安彦さんがなんて倒れるんだ」

と頭に來たわけ。なにしろどうしていいか判

らんのだからなあ。しかしやれる人間は自分

たちだけなんだ、他にはいないんだ、という

ことで必死に……それこそ一話、一話が戦

みたいになつてくれたんで穴があかなかった

んだよね。そういう気分を、まだ若いスタッ

フが持った事実、これがガンダムという作品

の価値かもしれないね。

安彦 今だから美談に聞こえるけど、本当は



美談じゃないんだよね。

富野 どこが美談なものか、生き残るために必死で闘ったんだよ。

安彦 それでね、そういう時にプロダクションが補給してくれないといけないんですよ。

僕が抜けた分だけ完全にマイナスなわけでしょう、人間でもスケジュールでもないから補給しなけりや仕事にならないもの……

星山 実戦経験のない若者が、補給も無しに闘い抜いたなんて、1スタそのものがWベースみたいなものですね。

富野 だから山浦さんにいたいのはね、スタッフが何かを感じてやっている時にはプロダクションもがんばって作品の手ごたえみたいなものを感じて欲しいんだ……さっきも劇場用のラッシュを見て感じたんだけれど、何かあるって判って欲しいなあ。

星山 ワッ、そんな話、初耳だよ……ね、優さん？

山本 ウン、初めて知った……

◆ ◆ ◆ 子供の感性は大切に ◆ ◆ ◆

星山 ガンダムブームの中で感じた事なんだけれど最近の子供たちって、とっても優しいんだよね。大阪のデパートで五月の連休の時に公演した時さ、それこそ僕の範疇を超えた質問が続出でね。いささかメゲちゃったんだよね。そうしたら質問した子がその後で、「星山さん、あんな質問気にしないで下さい、別にたいした事じゃないんですから」って感めてくれるんですよ。

SPOT LIGHT

うらかたさん

☆鉄人を飛ばしたのは僕なんですよ——♡

・動画チェック

浜津 守

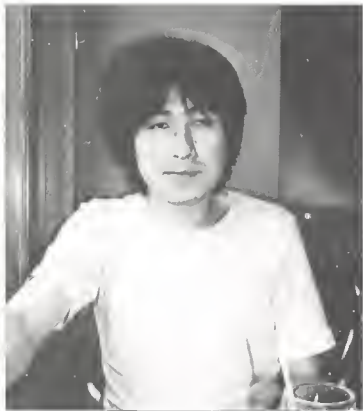


ガンダムシリーズという、もう大変だった
としかいえないですね。ぼくはあんな
大変なアニメーションはやってた事がない。

ぼくのやったのは一応「動画チェック」な
んだけれども、名前とはうらはらに動画をチ
ェックするだけではないんです。動画をみて
まずいのは全部直さなくてはならないわけで、
チェックというよりは「直し屋さん」みたいな
感じですね。それであ、あの作品はおも
しろかったし、自分なりに遊んだりもしなが
らやっていったんですけれども、安彦さんが病氣
で倒れてからは、流れてきた動画なんて
ムチャクチャになつてきたんです。それをな
んか原画なんかあまり知らない、今まで動画
をやってきた人たちがばかりで必死に直し
始めて……あの時は本当にもう大変でした。
なにしろ4人がかりでも1人の安彦さんの仕
事に追いつかないような有様だったんです。

だからその最近ファンの人達に指摘され始
めた。作画のアンビ。なんていうのは安彦さ
んが倒れてからすぐに始めたんですよ。とい
うのも、安彦さんが倒れてからすごくめいっ
ちやって、夜中まで残って仕事をやっている
うちに、なんかこうラムラッとしてね……

ぼくの仲間が板野一郎くんという人がいま
して、その人がういったアンビの一番最初
ですね。37話の大判の引きセルで、ライディ
ーンとダイターン3かな？ ザンボット3は
もう壊れてしまったのであの地球にはもう存
在していないだろうと……わりとロボ
ットアニメーションが好きなんですよ、
彼は——それでアニメのロボットを全部覚えて



いて、ああ、鉄人もいたねーとかいって鉄人も描いたんです、スゴク小さく。でも当然みんな小さいものは、仕上げにまわつたら、ふつうモビルスーツと同じ色にされてしまうんです。モビルスーツと一緒に飛んでいるんだから……。ところがそうしたら、その時仕上げの人にも好きな人がいたらしく、ちゃんと一個一個そのオリジナルな色になって上がってきたんです。ホントに！鉄人なんていうのは昔モノクロ放送だったのに、雑誌のグラフィックなんかで覚えていたんでしょうね。ちゃんとその色になっているんです——オビが赤くてね。それを見た時、「ああスゴイ……!!」と感激しましたよ。でもあれ、ブラウン管じやわからないからいいや、とフィルムにして流してしまつたんです。——大体最初のうちは、アソビといつてもあのTVフレイムの外でうまくやっていって、TVでいくら細かく捜しても絶対にわからないんです。フィルムには入っていないんだけれども、フレイムの中には入らなかったから……。そしてそのうちに最終回で、演出の関田さんという人もこれじゃ見えないから、わりあい趣味的に1個くらい入れてもいいんじゃないかっていうことで、いっぱい出してみたら、ぼくの描いた鉄人が、動いているうちに偶然フレイムから出てしまつたんですよ。フレイムの外で動いていたのが……。でも一コマだつたから、描いたばくでさえ、最初ブラウン管で見た時にはわからなかつたなあ。そういうのはふつうわりと氣を使つて見ているから（？）わか

るんですが……。ガンダムはとにかく安彦さんが倒れてから、みんな悪ノリしてやっていたんで、そういう物は特に捜さなくても何か出てくると思うんですけれども……。どちらかというと今ごろあまり捜してほしくないですね、ハハハ……。ぼくのやつたアソビには単に動いているというものが多くいんですが、板野くんがやつたやつではスゴクおもしろいがあるんですよ。あの人のストーリー性があるんです。ガンダムの絵コンテの欄外に、フレイムの外の鉄人の小話のコンテがきつてあって、そのストーリーがちゃんとつながっているんです。鉄人がジオン軍に攻められている、やられそうになつたところをボルトスVがライディーンに助けられ、また地球に帰ってくるという美しい話なんだけれども……。仕上げで消されていなくてもフィルムじゃないとたぶんわかりませんね。例えば42話の時はかなり色々描いたんだけれども、大体消されてしまつて、動画もないとわからないです。でもそれなりに何か話があるんですよ。アソビというのにも色々な種類のものがありまして、普通の人が普通に見ていてチラッと見える素直なアソビから、いっぱい描いているくせになかなかわからないひねくれたアソビまで多種多様ですよ。人間の芝居でのアソビなんかは、真面目なアソビですね。ボツになった中にもおもしろい絵がかなりあつたんだけれども、みんな捨ててしまつた。——富野さんとかいろいろ描いたんですよ……。



自分のコンテなんかには、ここはやるぞ。なんて書いていたんだけど、証提隠滅で、そのコンテも捨ててしまって、少し勿体なかったかな？その時は気づかなかったけれど、フィルムの中のものが結局残ってしまったので、フィルムも消しにいったりしてね。なるべく……。今思うと鉄人だけじゃなくて、アトムなんか飛べばよかったな。

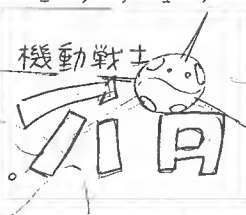

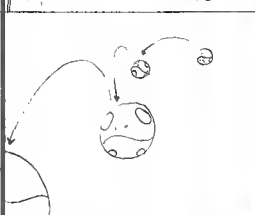
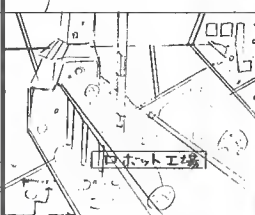

しかし最近のフアンの人たちっていうのはそういうものまで見つけてしまうので驚きますね。あんなもの、それしか見ないようにしなければ、ふつう絶対にわかりませんよ。——イデオンではハロミたいのをよくみかけるようですが……。よく見て下さい！

ぼくはハロって言うキヤラがスゴク好きで、本当にガンダムで動かしきれなかったキヤラクターというのはハロじゃないのかな？ 他

にはザクとか、キツカとか、まるまっついキヤラが、ぼくは好きなんですよ。

とにかくガンダムはみんなすごく頑張ったし、それだけ社内スタッフもきちんとしていましたね。富野さんも、安彦さんもすごい努力型の人で、自分の手をつけた仕事というものは、何でも自分で直してしまっている。富野さんの絵コンテなんて、シナリオを全然無視しているようなものですよ。本当にすごいと思います。安彦さんもまた、自分の作監の時には、全部自分一人で原画を描いていたようなものだし。上がつてきた原画も、大体自分で修正を入れてしまっているの、出来上がった時にはちゃんと自分の絵になってしまっているんですよ。あれでは本当に倒れなくてはおかしいと思うくらいの仕事をしていましたね。

「こんな遊びもありました」

S.	ビクチュア	内 容	セ リ フ	秒 数
			<p>トントントン</p> <p>シャーン。</p>	
1	 <p>BANK. カンタム 24話では?</p>	<p>宇宙 10076</p> <p>アム・レイに よって誕生 したマイコンはロボットかあった。 その名は "ハロ"</p>		
2		<p>戦後.....</p> <p>ロボット用 115 か</p> <p>キッカキタモト様立によって 開発され はじめた。</p>		
3		<p>もはや とみか 元祖 ハロカ わがらるい。</p>		
4	 <p>BANK イテオン 7話より</p>	<p>時代は変り 人生後か母屋を返し はなれるようにも 頑具として 定着していた</p>		

S.	ビクチムア	内 容	セ リ フ	秒 数
5	<p>BANK イテオン #5</p>	<p>そして アイコンとして 多称性を 増していた</p>		
6	<p>BANK イテオン #2 (よ)</p>	<p>戦闘機にも 内蔵してある けれど……</p>		
7		<p>身の危険を 感じるに 自動的に 脱出して しまうのだ。</p>		
8		<p>だから けして 生産された その量は 減ることはない。 宇宙に進出していった。</p> <p>「果るとは知っていたか その日か今日かとは知らなかった」 全宇宙が何かに吃らついて パシヤンコに つぶれて なくなってしまった</p>		

S.	ビクチャア	内 容	セ リ フ	秒 数
9		やはり、 宇宙は落下していた のだった。		
10		しかし 110はスーパになった その弾力性ゆえに!		
		宇宙に存在する 110-が ビョッビョッ 動いている。		
11		そして、どこにもある 宇宙めがけて 飛んでいく。		
12		中心へ 中心へ		

S.	ピクチャア	内 容	セ リ フ	秒 数
13		中心に 再構成された ハロ感星か でまた。		
14		として ゆったりと 回りだした!?		
		マザーハロの まわりを!!		
		時々 ちょうちょう の大群か またりしたり してみちたりして		
15		あ〜と 幸せな 宇宙になり ましたと丈。	「10」ちょうちょ ちょうちょ ちょうちょ ちょう. ちょうちょ	

おしまい♡

SPOT LIGHT うらかたさん

『オレは、サンライズの何でも屋だよ!!』

企画室デスク 飯塚 正夫



○サンライズ企画室



○風間洋子女史といっしょに仕事です

◎記録全集を始め、すべての雑誌の編集者がお世話になった人、それが飯塚氏である。
ガンダムの設定資料、バンクセルなどは、飯塚氏以外の人間では整理できないのだ。

—何？うらかたさんの取材にオレが出るの？
他にもスタッフはいっぱいるじゃないか。
ほら、富野さんが是非載せてくれって言っていたバンク係のサッチちゃん（竹川早苗女史）はどうしたの？
…「一度出たし、今さら私が出て……」と言われたって、他のスタッフも同じようなこと言っただろ？ やっぱりなあ、しかたがないから話したげましょう。
いつもオレのところに回ってくるんだよね、ややこしい話は……
えっ、何をやってるのかって？企画室デスクという名の雑用係だね。何でもかんでもやらされております。ハハハッたええさ、スポンサーとの接触は企画室の仕事だから、メカの名前なんか特に商品化のこともあるので、まず企画

室で発案するでしょう。それから製作現場の富野氏を通して提出するのよね。
ガンダムに関してはイニシアチブをとったのは山浦さんだけど、最後はやはり富野氏がこの方がいいな、といって決ったんだよね。
ガンキヤノン、ガンタンクに関してはオレと富野氏の二人で決めたんですよ。ガンダムという作品は、特に監督の意向が大切だから、富野氏に原案を出してもらって、こちらでセレクトするわけです。
たとえば大きさの問題としても、どれぐらいにしようかと考えるとスポンサーのことがあるから大きくしなければいけない。でもあんまり大きくしたくない、ということ、成人男性のそれも体格の良い奴ね、その十倍ということ、で18mとなっちゃったんだよね。タンクやキヤノンはそれに合わせて、釣り合うようにしたわけ……内部図解にしても、各部の名称はエンジンとかリーダーなんかを決めるには富野氏を通すんだ。それをオレんここでクリヤーにして発表するわけ。



○仕事中の飯塚氏

ガンダムは雑誌でずいぶん取り上げられたでしょう。あれは営業部の意向もくんだ上で、「こをみてほしい」ということを十分理解した上で、資料を渡すんだよね。それで、どこそこの雑誌が「Wベースの設定書を欲しい」といつてきたら、それをコピーして渡すのがオレの役目。まあフィルムを作る以外の全部の仕事をやっているから竹尾ゼネラルカンパニーじゃないけど、「こちらサンライズの何でも屋」って感じなんだよね。

ワーツ写真なんかとるの、やだよノ命が吸い取られる……しょうがないなあ。一枚だけだよ。このメカイラスト？まあ某雑誌の仕事、とてもしておいてもらおうか……なんてね。

日本サンライズはアニメーション関係は、なんでもやれる会社なんですね。だからタイトルデザインなんかも富野氏とやっちゃった。ガンダムの色指定？もちろんやりましたよ。現場の意図を汲みながら、なおかつスポンサーとの折りあいも考えて、妥協点を考え出してね。だから企画室でも十分選考した上で一応の色を決めて、スポンサー側のデザイナーの意向を生かして、あの放映されたものになったわけですよ。

記録全集だつてずいぶん手伝わされたもんなあ。もつともサンライズの本なんだからあたりまえだけどね。ほら、この洋君（風間洋女史—企画室勤務）はガンダム当時は009をやってたんだけど、ガンダムにやたら詳しいから最近では彼女にガンダムの仕事を押しつける事が増えているんだよ。カラーページのキヤラクターシートは彼女の仕事……洋君ちよっとおいて。ほ

らタダで写真とってくれるって。ホイ、シャットおして、ハハハッ。

まあ、うらかたつていえば、そうなんだけどアニメーションなんて協同作業だから全員がうらかたなんじゃないかな。ガンダムにしろ、イデオンにしろスタッフはおろか、会社ぐるみで乗っているからサンライズって職場はやりがいがあるんだな。こんな話でいいのかな。記録全集のトリにふさわしいような話じゃないなあ。洋君何かない？印象深い話つていえばね。

スケジュールがめちゃくちゃな時に私が1スタに夜中に行ったのよね、そしたら富野氏がステテコ姿でコンテ切ってたのよ。で私の方を見てね「見たなあ？」つていうから、「見たアーツ」で答えたら、「見られてしまった」と、シヨボンとして仕事を続けていたこと——ハハハッ、あとは編集の人にまかせるからさ。記録全集用にまとめてみてよ——。

——ガンダム記録全集を作成するにあたって一番活躍された飯塚氏のお話ですので、趣向を変えて生の声そのままに集録してみました。旧来のアニメと違い、ガンダムは数多くの設定書が発表されましたが、それは飯塚氏の資料管理がいきとどいていたからに違いありません。記録全集のトリを飾るのに、これ程ふさわしい人は他にいないのかもしれない。

（終）

これが打上げパーティ企画書だ！



機動戦士
ガンダム



終戦協定調印式 招請状

様

(打上げパーティ)

御案内

N「宇宙世紀0079年。アニメに最もキビシイ宇宙殖民地日本サンライズは、

1スタ公国を名乗りアニメーション界にSFアニメ戦争を挑んできた。

この10年余りの闘いで、1スタ公国と外注軍は、総スタッフの半分を
苦に至らしめた。スタッフは自らの行為に恐怖した。……

戦争は極限状態に陥り、10年余りが過ぎた。

この日、宇宙世紀0080年、1月26日(土)長く厳しく苦しい戦いは終り、

君たちは、生き延びることができた!!

この戦いの後、サンライズ連邦政府と1スタ共和国の間で、終戦協定が結ば
れる事になった。この協定調印式は下記の通りに行われる事になった。

生き延びた諸君は、この協定調印式を見届けるべく、こぞって参加される事を
希望し、ここに心から招請状を発する次第であります。」

日 時 1980年1月31日(木) PM. 6:30~9:30

場 所 西荻窪 パブハウス サントリー館

西荻窪駅北口前 松岡西荻ビル 5F

すてきなウェイトレスが貴方のお相手です

機動戦士ガンダム 最終回 ビデオ上映 テレビ4台のマルチ映

8時~9時 ピアノ演奏あり、のど自慢の方はマイクがあります

海外ピアノ演奏に
海外名歌の世界にチャレンジ



すてきなウェイトレスの二人



☆いかにスタッフが、ガンダムを乗って製作していったかが判る好例がこの招請状だ。文章は、あの企画室の飯塚氏である。文章を読んで、楽しんでいただきたい。これがガンダムに関する最後の資料である。

機動戦士ガンダム 記録全集 5

昭和55年10月24日発行

発行者／岸本吉功

発行所／株式会社日本サンライズ

〒167 東京都杉並区上井草 2-35-11

電話／東京 (03) 399-8962

編集者／株式会社銀英社

印刷・製本所／小宮山印刷株式会社

●許可なく本書の転載複製を禁ず。

落丁・乱丁本のお取替えは直接、本社までお送り下さい。(送料は小社で負担します。)

定価 2,900円

機動戦士ガンダム 記録全集 5

昭和55年10月24日発行

発行者／岸本吉功

発行所／株式会社日本サンライズ

〒167 東京都杉並区上井草 2-35-11

電話／東京 (03) 399-8962

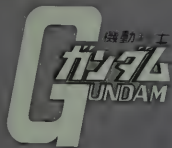
編集者／株式会社銀英社

印刷・製本所／小宮山印刷株式会社

●許可なく本書の転載複製を禁ず。

落丁・乱丁本のお取替えは直接、本社までお送り下さい。(送料は小社で負担します。)

定価 2,900円



記録全集5



MOBILE SUIT GUNDAM





Presented by
NIPPON SUNRISE

機動戦士
Z
記録全集

日本サンライズ

G 機動戦士
ガンダム
GUNDAM

記録全集 **5**



MOBILE SUIT
GUNDAM





Presented by
NIPPON SUNRISE

機動戦士

ガンダム

記録全集

5

日本サンライズ